
日 高 市

向 山 / 上 原 / 向 原

首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

—Ⅳ—

1 9 9 5

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

首都圏の幹線道路は、急激な都市化や自動車の増加なども相まって、今や飽和状態に近づきつつあり、輸送力を著しく低下させています。首都東京に隣接し、全国一の人口増加県である埼玉県内の道路網もその例外ではありません。

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道、通称圏央道の建設は、関越自動車道など、東京から放射状に伸びる高速幹線道路を環状に連絡することにより首都圏への流入交通を分散させ、慢性的な交通渋滞の緩和を目的として建設が進められております。

県内の一部区間ではありますが、供用の開始も近づきつつあり、埼玉県としても、今後、地域活性化を進める上で大きな役割を期待するところです。

ところで、県内の圏央道建設予定地には、貴重な遺跡が数多く知られておりました。そこで、これら埋蔵文化財の取り扱いについては、関係各機関が慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、どうしても避けることのできない遺跡については、当事業団が発掘調査を行い、記録保存の処置をとることになりました。今回報告いたします向山遺跡、上原遺跡、向原遺跡は日高市内で発掘調査を実施した9遺跡のうちの3遺跡です。

これらの遺跡がある日高市は、関東平野の西を縁どる外秩父山地の裾にあり、高麗川が踊る「きんちゃく田」や、緑深い高麗丘陵に抱かれるように散在する高麗神社や聖天院、中世の幹線道路である鎌倉街道伝承地など、景勝に優れ、文化遺産に恵まれております。

また、埋蔵文化財も国指定史跡「高麗石器時代住居跡」や女影院寺などの古代寺院跡をはじめ、学術上重要な遺跡も数多く知られる地域でもあります。

発掘調査の結果、縄文時代を中心として、先土器時代から中・近世に至るまでの数多くの資料が発見されました。

特に、向山遺跡では、県内でも例の少ない縄文時代早期の棒型文土器や石器が多数出土した集落跡として注目され、新聞紙上を賑わせました。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財保護の基礎資料として、また、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から本書の上梓に至るまで御指導、御協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、日本道路公団東京第二建設局、同川越工事事務所、さらに日高市教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

- 1 本書は、埼玉県日高市に所在する向山遺跡、上原遺跡、向原遺跡に関する発掘調査報告書である。
各遺跡の代表地番と、発掘調査に対する文化庁指示通知は以下のとおりである。

向山・上原遺跡他第一次調査

日高市大字下大谷沢字下向山692

平成元年6月1日付け委保第5の249号

向山遺跡

日高市大字大谷沢字向山678-1

平成2年11月15日付け委保第5の1253号

上原遺跡

日高市大字田木字上原455-3

平成2年10月2日付け委保第5の559号

向原遺跡

日高市大字馬引沢字向原474

(第1次)平成4年4月24日付け委保第5の373号

(第2次)平成4年4月13日付け委保第5の190号

(第3次)平成4年7月10日付け委保第5の890号

(第4次)平成5年3月23日付け委保第5の1397号

- 2 発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設に伴う事前調査であり、調査は埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整を経て、日本道路公団の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

- 3 本書にかかる発掘調査は、昭和63年12月9日から平成元年3月31日まで行なった第一次調査の成果をもとに下記の期間で実施した。

向山遺跡 (No.29-188)

平成2年5月1日～平成3年1月31日

上原遺跡 (No.29-171)

平成元年7月1日～平成2年3月31日

向原遺跡 (No.29-063)

(第1次)平成3年8月1日～平成3年11月30日

(第2次)平成3年12月1日～平成4年3月31日

(第3次)平成4年5月1日～平成4年6月20日

(第4次)平成4年11月15日～平成5年1月12日

- 4 報告書作成事業は平成6年度に受託し、これを実施した。

なお、発掘調査・整理事業の組織は3頁に示したとおりである。

- 5 発掘調査の担当者は以下のとおりである。

向山・上原遺跡他第一次調査 中島宏、宮昌之

向山遺跡 栗島義明、岡本健一

上原遺跡 山本禎、山本靖

向原遺跡 中島宏、栗岡潤(第1・2次)

黒坂禎二、栗岡潤(第3・4次)

- 6 発掘調査時における遺跡の基準点測量および航空写真撮影・測量は、朝日航空株式会社、中央航業株式会社に、また、向山遺跡のC14年代測定と花粉分析はパリオ・サーヴェイ株式会社、向原遺跡出土炭化材同定他を株式会社パレオ・ラボに委託した。

- 7 出土品の整理および図版の作成は、資料整理第一課の黒坂が担当し、同課田中英司の協力を得た。

- 8 本書の執筆は、第1章1節を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課、第IV章2節1項を田中、付編を株式会社パレオ・ラボが、他を黒坂が行なった。

- 9 本書の編集は、当事業団資料部長、同副部長の監修のもと、整理第一課職員が当たった。

- 10 本書に掲載した資料は、平成7年度以降、埼玉県埋蔵文化財センターが管理・保管している。

なお、各遺跡の略称は以下のとおりである。

向山遺跡 MKYM 上原遺跡 UEHR

向原遺跡 MKH

- 11 本書の作成にあたり、下記の方よりご教示、ご協力を賜った。(敬称略、五十音順)

阿子島 香・麻生敏隆・麻生 優・安斎正人・

石井 寛・石塚和則・井上 肇・大塚達朗・

岡本東三・小倉 均・梶原 洋・金井塚良一・

小林達雄・小瀬良樹・白石浩之・曾根原裕明・

堤 隆・勅使河原 彰・戸沢充則・中平 薫・

長崎潤一・早川 泉・林 謙作・原田昌幸・

藤野次志・宮下健司・矢野健一・横山裕平

凡例

- 1 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土地院標準平面直角座標第IX系(原点:北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく各座標値を示す。
また、各標図における方位指示は、すべて座標北をあらわす。

- 2 本書における遺構の表現は、便宜上、下記の略号で表記した部分がある。

S U…先土器時代石器集中区

S J…住居跡 S K…土墳

S C…集石 S P…埋甕

S L…炉穴

S D…溝 S E…井戸

- 3 各遺構の番号は、できるかぎり調査時に付したものをそのままに報告した。しかし、向原遺跡については整理・報告途上に不都合が生じたため、新番号を与えた。現地調査時の番号、および遺物注記との対照は第VI章末に示した。

- 4 測量、遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構 先土器時代石器集中区 1/40
住居跡・土墳・炉穴・井戸 1/60
集石・埋甕 1/30
溝 1/60(断面) 1/400(平面)

遺物 先土器時代石器類 2/3
縄文時代土器 1/2(草創期・早期中葉)
1/3(その他)
縄文時代石器 2/3(石鏃・小型石器類)
1/3(その他)
縄文時代土・石製品類 2/3
中・近世磁石 1/3

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図、遺物分布図等は、その都度、スケールの脇に縮尺率を示した。

- 5 個別の遺構測量図におけるドット指示は、原則として以下のとおりである。

●…縄文土器類(縄文土器・土製品)

▲…石鏃 ▼…削器

★…打製石斧 ☆…磨製石斧

■…礫器 □…スタンプ形石器

○…磨石類(磨石・石皿・凹石・敲石)

△…剥片類(剥片・石核)

▽…礫

また、遺跡全体遺物分布図等、その他の図類については個別に凡例を示した。

なお、ドットを結ぶ線は、両端の遺物が接合関係にあることを表している。

- 6 測量、および遺物実測図内の網部指示は以下のとおりである。

▨…ローム層による地山

▩…炉跡および焼土分布

▪…被覆乱部

▧…断面図に対する遺物投影の範囲

▩…土器展開実測図内における縄文施文部分

- 7 文中の引用文献は、(著者 発行年)の順で表現し、巻末にその一覧を掲載した。
また、註は①弧付きで表現し、各項末にまとめて掲載した。

- 8 文中の色彩表現は、農林水産省水産技術会議事務局監修『標準土色帳』1976による。

目次

序

例言／凡例

I 調査の概要	1	(2)土墳	84
1 発掘調査に至るまでの経過	1	(3)集石	87
2 調査の経過	2	(4)埋喪	90
(1)向山遺跡	2	(5)溝	94
(2)上原遺跡	2	(6)遺構外	94
(3)向原遺跡	2	VI 向原遺跡の調査	99
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	1 遺跡の概観	99
II 遺跡の立地と環境	4	2 遺構と遺物	101
III 遺跡の概要	7	(1)住居跡	101
IV 向山遺跡の調査	9	(2)土墳	108
1 遺跡の概観	9	(3)集石	112
2 遺構と遺物	11	(4)埋喪	112
(1)先土器時代石器集中区	11	(5)炉穴	113
(2)住居跡	17	(6)溝	115
(3)土墳	28	(7)遺構外	115
(4)集石	34	VII 結語	123
(5)溝	39	1 向山遺跡	123
(6)井戸	39	(1)住居跡と環状礫群	123
(7)遺構外	40	(2)出土土器と遺構の造営期	124
V 上原遺跡の調査	75	(3)出土土器	129
1 遺跡の概観	75	2 上原・向山遺跡	131
2 遺構と遺物	78	3 台地と流域、南北と東西	133
(1)住居跡	78	付編／引用文献	

表目次

向山遺跡		上原遺跡	
第1表 石器観察表(1)	16	第6表 石器観察表	98
第2表 石器観察表(2)	71	向原遺跡	
第3表 石器観察表(3)	72	第7表 石器観察表(1)	121
第4表 石器観察表(4)	73	第8表 石器観察表(2)	122
第5表 石器観察表(5)	74	第9表 遺構番号新旧対照表	122

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の縄文遺跡	5	第35図	遺構外出土遺物(8)	55
第2図	日高市周辺の地形	5	第36図	縄文時代石器分布	57
第3図	遺跡周辺の地形	8	第37図	礫・焼礫分布	58
	向 山 遺 跡		第38図	遺構外出土遺物(9)	61
第4図	向山遺跡全体図	10	第39図	遺構外出土遺物(10)	62
第5図	先土器時代の石器集中	12	第40図	遺構外出土遺物(11)	63
第6図	先土器時代の石器(1)	13	第41図	遺構外出土遺物(12)	65
第7図	先土器時代の石器(2)	14	第42図	遺構外出土遺物(13)	66
第8図	先土器時代の石器(3)	15	第43図	遺構外出土遺物(14)	67
第9図	第1号住居跡	17	第44図	遺構外出土遺物(15)	69
第10図	第2号住居跡	18		上 原 遺 跡	
第11図	第3号住居跡	19	第45図	上原遺跡全体図(1)	76
第12図	第4号住居跡	21	第46図	上原遺跡全体図(2)	77
第13図	第5号住居跡	22	第47図	第1号・第2号住居跡	79
第14図	第6号住居跡	23	第48図	第3号住居跡	80
第15図	第6号住居跡出土遺物	25	第49図	第4号住居跡	81
第16図	第7号住居跡	26	第50図	第5号・第6号住居跡	82
第17図	第7号住居跡出土遺物	27	第51図	第7号住居跡	83
第18図	第1号～第31号土墳	29	第52図	第1号～第23号土墳	85
第19図	第32号～第62号土墳	30	第53図	土墳出土遺物	86
第20図	第63号～第86号土墳	31	第54図	第1号～第7号集石	88
第21図	土墳出土遺物	32	第55図	第8号～第19号集石	89
第22図	第1号～第19号集石	35	第56図	集石出土遺物	90
第23図	集石出土遺物(1)	36	第57図	第1号～第5号埋甕	91
第24図	集石出土遺物(2)	38	第58図	第1号～第9号溝	92
第25図	第1号・第2号溝、第1号・第2号井戸	39	第59図	第10号～第13号溝	93
第26図	西地区遺物分布全体図	41	第60図	遺構外出土遺物(1)	95
第27図	遺構外出土遺物(1)	42	第61図	遺構外出土遺物(2)	96
第28図	縄文時代早期中葉土器分布	43	第62図	遺構外出土遺物(3)	97
第29図	遺構外出土遺物(2)	45		向 原 遺 跡	
第30図	遺構外出土遺物(3)	46	第63図	向原遺跡全体図	100
第31図	遺構外出土遺物(4)	49	第64図	第1号住居跡	102
第32図	遺構外出土遺物(5)	51	第65図	第1号住居跡出土遺物(1)	103
第33図	遺構外出土遺物(6)	52	第66図	第1号住居跡出土遺物(2)	104
第34図	遺構外出土遺物(7)	53	第67図	第2号～第4号住居跡	105

第68图	第4号住居跡出土遺物	106
第69图	第5号住居跡	107
第70图	第1号~第21号土壇	109
第71图	第22号~第34号土壇	110
第72图	土壇出土遺物	111
第73图	第1号集石、第1号・第2号埋壙	112

第74图	第1号~第10号炉穴	114
第75图	第1号~第7号溝	116
第76图	遺構外出土遺物(1)	117
第77图	遺構外出土遺物(2)	118
第78图	遺構外出土遺物(3)	119

圖版目次

向山遺跡

図版1	向山遺跡航空写真、西地区遺構集中部
図版2	第1号住居跡遺物出土状況、 第2号住居跡遺物出土状況
図版3	第3号住居跡、第4号住居跡
図版4	第5号住居跡、第6号住居跡遺物出土状況
図版5	第7号住居跡、第7号住居跡遺物出土状況 第7号住居跡土層断面、第7号住居跡炉跡
図版6	第2号集石、第3号集石、第4号集石、 第5号集石、第7号集石上層、 第7号集石下層
図版7	第8号集石、第10号集石、第11号集石、 第12号集石、第13号集石、第13号集石断面
図版8	第14号集石、第16号集石、第17号集石、 第17号集石遺物出土状況、 第1号溝、第2号溝
図版9	先土器時代石器類、先土器時代接合資料
図版10	第1号住居跡出土土器、 第1号住居跡出土土器、 第2号住居跡出土土器、 第2号住居跡出土土器・石器
図版11	第3号住居跡出土土器
図版12	第4号住居跡出土土器、 第4号住居跡出土土器、 第5号住居跡出土土器
図版13	第6号住居跡出土土器
図版14	第6号住居跡出土土器、 第6号住居跡出土土器、

第7号住居跡出土土器、

第7号住居跡出土土器

図版15	土壇出土土器、土壇出土土器、 集石出土土器
図版16	集石出土土器、遺構外出土土器(表) 遺構外出土土器(裏)
図版17	遺構外出土土器
図版18	遺構外出土土器
図版19	遺構外出土土器
図版20	遺構外出土土器
図版21	遺構外出土土器
図版22	遺構外出土土器
図版23	遺構外出土土器
図版24	遺構外出土土器
図版25	遺構外出土土器
図版26	遺構外出土土器
図版27	遺構外出土土器
図版28	遺構外出土土器、東地区出土土器、 東地区出土土器、土・石製品類
図版29	西地区出土土器類
図版30	西地区出土土器類、東地区出土土器類

上原遺跡

図版31	上原遺跡航空写真
図版32	第1号住居跡、第2号住居跡、 第3号住居跡、第4号住居跡、 第5号住居跡、第5号住居跡炉跡
図版33	第6号住居跡、第7号住居跡、第1号土壇 第2号土壇、第4号土壇、第5号土壇

図版34 第7号土壇、第8号・第9号土壇、
第12号土壇、第16号土壇、
第19号土壇、第19号土壇焼土部、
第21号土壇、第22号土壇

図版35 第1号集石土器出土状況、第2号集石
第3号集石、第3号集石掘り方、
第4号集石、第5号集石、
第6号集石、第6号集石掘り方

図版36 第7号集石、第7号集石掘り方、
第8号集石、第8号集石掘り方、
第9号集石、第9号集石掘り方、
第11号集石、第11号集石掘り方

図版37 第12号集石、第12号集石掘り方、
第13号集石、第13号集石掘り方、
第14号集石、第14号集石掘り方、
第15号集石、第16号集石

図版38 第17号集石、第18号集石、第19号集石
第1号埋甕、第2号埋甕、第3号埋甕
第4号埋甕、第5号埋甕

図版39 第1号～第3号溝、第4号・第5号溝、
第8号・第9号溝、第11号溝、
第12号溝、第13号溝

図版40 第1号住居跡出土土器、
第3号住居跡出土土器、
第3号住居跡出土土器、
第4号住居跡出土土器

図版41 第5号住居跡出土土器、
第5号住居跡出土土器、
第6号住居跡出土土器、
第7号住居跡出土土器

図版42 第1号土壇出土土器、
第4号土壇出土土器、土壇出土土器、
土壇出土土器、第1号集石出土土器

図版43 第1号集石出土土器、集石出土土器、
第1号埋甕出土土器、第2号埋甕出土土器、
第3号埋甕出土土器、第5号埋甕出土土器

図版44 遺構外出土土器

図版45 遺構外出土土器

図版46 遺構外出土土器、
遺構外出土土器類、遺構外出土土器
向原遺跡

図版47 向原遺跡航空写真

図版48 第1号住居跡、第1号住居跡埋出土状況
第2号住居跡、
第4号住居跡、第4号住居跡埋甕、
第4号住居跡石棒出土状況

図版49 第5号住居跡埋甕、第5号住居跡埋甕、
第5号土壇、第11号土壇、
第14号土壇、第14号土壇遺物出土状況、
第15号土壇、第15号土壇遺物出土状況

図版50 第16号土壇、第17号土壇、第21号土壇、
第25号土壇、第33号土壇、第1号集石、
第1号埋甕、第2号埋甕、

図版51 炉穴群、第2号～第4号炉穴、
第9号炉穴、第10号炉穴

図版52 第1号溝、第2号溝、第3号・第4号溝、
第4号溝、第5号溝、第6号・第7号溝

図版53 第1号住居跡出土土器

図版54 第1号住居跡出土土器、
第1号住居跡出土土器

図版55 第1号住居跡出土打製石斧素材
第4号住居跡出土土器、
第4号住居跡出土土器、
第5号住居跡出土土器

図版56 第14号土壇出土土器、第15号土壇出土土器、
土壇出土土器、土壇出土土器、
第27号土壇出土土器、
第7号炉穴出土土器、第4号溝出土土器

図版57 第1号埋甕出土土器、第2号埋甕出土土器、
遺構外出土土器

図版58 遺構外出土土器

図版59 遺構外出土土器

図版60 遺構外出土土器

I 調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

首都圏中央連絡自動車道は、東京都心から40～50km圏に位置する中核都市を相互に連絡するとともに、首都圏から放射状にのびる各高速道路（東名、中央、関越、東北、常磐、東関東）を連結し、地域間の交通の円滑化および土地利用の適正な誘導を図り、諸都市の健全な発達を促進させる役割を果たすことを目的とし計画された。埼玉県としても積極的に本事業の推進を図ってきたところである。県内では入間市の都県境から関越自動車道鶴ヶ島ジャンクションまでの延長19.8kmで事業が進められてきた。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、昭和62年10月9日に日本道路公団、文化財保護課、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、関係各市町教育委員会の担当者でもった協議をはじめとして、事業の進捗状況に応じて、関係者間で協議を重ねたところである。

昭和63年9月26日付け東二建総管第117号で日高市及び入間市金子地区について、平成元年8月1日付け東二建総管第157号で狭山市笹井地区について、平成2年10月29日付け東二建総管第219号で鶴ヶ島市および入間市小谷田地区について照会があった。

文化財保護課では照会地について分布調査、埋蔵文化財所在確認調査を実施し、その結果にもとづき、昭和63年12月2日付け教文第806号、平成2年2月14日付け教文第1470号および平成2年11月29日付け教文第1000号で次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

入間市：西武蔵野・東武蔵野・十文字原・

青梅道南・丸山・坂東山・坂東山西・森坂

狭山市：八木前・八木・八木上・沢口上・宮地・

金井上・西久保・東久保

日高市：向原・上原・向山・下向山・二反田・谷津

鶴ヶ島市：後A・後B・道上・久保

前記の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、事業の計画変更が不可能と判断されたので、記録保存の処置を講ずることとし、発掘調査の実施について日本道路公団、文化財保護課、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団とで協議した。その結果、昭和63年12月9日から平成元年3月31日まで日高市内の6遺跡について第一次調査を実施することとなった。この成果により、平成元年度に上原遺跡、同2年度に向山遺跡の発掘調査を行った。また、向原遺跡の発掘調査は平成3年度、4年度の両年度に行った。

向山、上原、向原遺跡の調査届に関する文化庁長官からの通知は、それぞれ以下に示したとおりである。

向山・上原遺跡他第一次調査

平成元年6月1日付け委保第5の249号

向山遺跡 平成2年11月15日付け委保第5の1253号

上原遺跡 平成2年10月2日付け委保第5の559号

向原遺跡

(第1次) 平成4年4月24日付け委保第5の373号

(第2次) 平成4年4月13日付け委保第5の190号

(第3次) 平成4年7月10日付け委保第5の890号

(第4次) 平成5年3月23日付け委保第5の1397号

2 調査の経過

(1) 向山遺跡

平成2年5月より現場事務所設置などの調査準備と並行して重機による表土削除を開始した。その結果、東地区には遺構・遺物の分布が散漫なもの、西地区では、縄文時代早期中葉の押型文土器を中心とする遺物が予想以上に散布することが判明し、焼窯も含め、全遺物の出土位置を記録する方針を決定した。

大量の遺物をその場に残留しながらの遺構確認作業は困難を極めたが、同期の住居跡も存在することが確認でき、6月からは本格的な精査に着手した。

精査はまず、遺構・遺物が集中する西地区の北西部より着手し、工程の合間をぬって周辺の作業を進める順序で行なった。

調査は順調に推移し、10月にはほぼ全ての遺構精査を終了し、航空写真撮影を行なったのち、先土器時代遺構・遺物の確認調査に移行した。その結果、東地区では石器集中区を発見し、精査を行なった。

西地区を含めた全調査は12月にはほぼ完了し、1月、残務処理した上で事業を終了した。

(2) 原遺跡

平成元年7月より、現場事務所の設置などの調査準備と並行し、対象区南半分の重機による表土削除を開始した。確認の結果、遺構・遺物の分布が散漫なもの、縄文時代中期の住居跡・埋壘、中近世の溝等が検出できた。

同月下旬から遺構精査に着手し、9月中は溝の処理に専念した。10月には縄文時代遺構の精査に移行し、11月末にその全てを完了した。

北半分の表土削除と遺構確認は12月に開始し、南半分と同じ趣旨の遺構に加え、北端の台地縁辺で縄文中期の集石土壌を多く検出した。

これらは、南より精査を進め、2月には集石土壌の地上写真測量を行なった。その後、遺跡の航空写真測量などを行ない、3月中旬調査を完了し、残務処理を経て、全ての事業を終了した。

(3) 向原遺跡

向原遺跡の調査は工事、および用地買収の都合上、対象区をA～Eの5区に分け、それらを4次、3期にわたって調査した。各区の位置は遺跡全図を、そして、各次の届出期間に例言を参照されたい。

第1期（平成3年8月1日から平成4年3月31日）

第1期は対象区の中央付近より調査を開始、南に範囲を広げた。調査順にAからCの地区名を与えた。

8月は調査事務所の設置と並行し、A区より順次重機による表土削除を開始した。これが終了した部分より遺構確認、つづけて精査に着手した。なお、A区南は近年の掘削が著しく、調査を断念した。

9月からは土壌・住居跡等の精査も軌道にのり、完形の縄文土器や石器の出土が相つた。そして、末には、A区南東で炉穴群を検出し、精査を開始した。

炉穴群の調査は10月に持ち込まれ、並行してB区の調査にも着手、単独埋壘や炉穴などを検出、調査を継続、11月をもって全てを終了した。

12月には届出2次にあたるC区の表土削除から遺構精査に移った。土壌中心の同区の精査は順調に進み、同月中には重機を追い北に転じ、D区の遺構確認から精査に移行した。

1月、D区では埋壘や炉跡、遺物の集中が随所で見られ、住居跡の存在を念頭に調査を進める。雪や霜に手間取りつつも、2月中をもって現場での作業はほぼ終了し、3月は残務整理にあてた。

第2期（平成4年5月1日から平成4年6月20日）

第3次の届出で、D区南の現道下を対象とした。北半分は集中配管埋設のため調査不能であった。

検出遺構は土壌といくつかのビットのみであり、重機を迫るように精査に着手し、6月中旬、すべての調査を終了、残務整理にはいる。

第3期（平成4年11月15日から平成5年1月12日）

第4次の届出にあたり、E区と呼称した。確認の結果、遺構遺物は多くはなく、12月中に精査を終了し、残務整理に移行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

1 第一次調査（昭和63年度）

理 事 長 長井五郎
副 理 事 長 百瀬陽二
常 務 理 事 兼 早川智明
調 査 研 究 部 長
理 事 兼 管 理 部 長 原田家次

庶務経理

管 理 課 長 関野栄一
主 事 江田和美
主 事 岡野美智子
主 事 本庄朗人
主 事 斎藤勝秀

発掘調査

調 査 研 究 部 副 部 長 塩 野 博
調 査 研 究 第 二 課 長 昼間孝次
主 任 調 査 員 中 島 宏
主 任 調 査 員 宮 昌 之

3 発掘調査（平成2年度）

理 事 長 荒井修二
副 理 事 長 早川智明
常 務 理 事 兼 倉持悦夫
管 理 部 長 古市芳之
理 事 兼 調 査 部 長 吉川國男

庶務経理

庶 務 課 長 高田弘義
主 査 松本 晋
主 事 長滝美智子
経 理 課 長 関野栄一
主 任 江田和美
主 事 本庄朗人
主 事 斎藤勝秀

発掘調査

調 査 部 副 部 長 塩 野 博
調 査 第 二 課 長 昼間孝次
主 任 調 査 員 栗 島 義 明
調 査 員 岡 本 健 一

5 発掘調査（平成4年度）

理 事 長 荒井修二
副 理 事 長 早川智明
常 務 理 事 兼 倉持悦夫
管 理 部 長 古市芳之
理 事 兼 調 査 部 長 吉川國男

庶務経理

庶 務 課 長 萩原和夫
主 査 賛 田 清
主 事 菊地 久
経 理 課 長 関野栄一
主 任 江田和美
主 事 長滝美智子
主 事 福田昭美
主 事 腰塚雄二

発掘調査

調 査 部 副 部 長 梅沢太久夫
調 査 第 二 課 長 坂 野 和 信
主 任 調 査 員 黒 坂 慎 二
調 査 員 栗 岡 潤

2 発掘調査（平成元年度）

理 事 長 荒井修二
副 理 事 長 百瀬陽二
常 務 理 事 兼 倉持悦夫
管 理 部 長 古市芳之
理 事 兼 調 査 研 究 部 長 吉川國男

庶務経理

管 理 課 長 関野栄一
主 事 江田和美
主 事 岡野美智子
主 事 本庄朗人
主 事 斎藤勝秀

発掘調査

調 査 研 究 部 副 部 長 塩 野 博
調 査 研 究 第 二 課 長 昼間孝次
主 任 調 査 員 山 本 禎
調 査 員 山 本 靖

4 発掘調査（平成3年度）

理 事 長 荒井修二
副 理 事 長 早川智明
常 務 理 事 兼 倉持悦夫
管 理 部 長 古市芳之
理 事 兼 調 査 部 長 吉川國男

庶務経理

庶 務 課 長 高田弘義
主 査 松本 晋
主 事 長滝美智子
経 理 課 長 関野栄一
主 任 江田和美
主 事 福田昭美
主 事 腰塚雄二
主 事 菊地 久

発掘調査

調 査 部 副 部 長 梅沢太久夫
調 査 第 二 課 長 昼間孝次
主 任 調 査 員 中 島 宏
調 査 員 栗 岡 潤

6 報告書作成（平成6年度）

理 事 長 荒井 桂
副 理 事 長 富田真也
常 務 理 事 兼 加藤敏昭
管 理 部 長

庶務経理

庶 務 課 長 及川孝之
主 査 市川有三
主 事 長滝美智子
主 事 菊地 久
経 理 課 長 関野栄一
主 任 江田和美
主 事 福田昭美
主 事 腰塚雄二

整理事業

資 料 部 長 塩 野 博
資 料 部 副 部 長 兼 谷 井 彪
資 料 部 整 理 第 一 課 長
主 任 調 査 員 黒 坂 慎 二

II 遺跡の立地と環境

今回報告する向山(第1図A)・上原(同B)・向原(同C)の三遺跡は、日高市の東端、JR東日本鉄道川越線武蔵高萩駅のほぼ南方向、約2.5～3.5kmに位置している。

三遺跡がともに立地する入間台地は、入間川をはさみ狭義の武蔵野台地と対峙し、北を岩殿丘陵下に東流する越辺川に限られる。第2図にみるように、台地内には幾筋かの河川があるが、入間川が作りだした扇状地形を反映した北東流に統一されている。

そのもっとも南を開折する小畔川は、高麗丘陵に源を発する数流路を集め、越辺川、入間川、さらには現荒川に統合される。

南北に別流した小畔川は川越市笠幡付近で合流するが、そこにいたるまでの両河は水流こそ認められるものの、小川というに達した程度の川幅でしかない。

しかしながら、三遺跡がより所とする南小畔川の南には、「クボ」から発する伏流を除けば、入間川の河岸段丘まで、脈々と流れる河川は存在しない。

このような環境を直接に反映し、付近の遺跡は、河川と同じ北東―南西に連なる傾向をもつ。すなわち、大河入間川のかたわらでは湧水を頼るかのように段丘座に沿って、そして、小畔川流域では川の至近に分布する。なかでも南小畔川の流域の密度は他に比して濃く、その多くで縄文時代の遺物が採集されている。

逆に、この地域では適当な沖積地が存在しないためか、弥生・古墳時代の遺跡がほとんど確認されていない。その意味では、この空白期を境として当地の歴史を大きく前後にわけることができる。

本書であつた資料は、主として前半期の所産である。したがって、以下、遺跡の歴史的環境は、同期についてのみを対象とする。

後半期における、高麗郡の設置や古代寺院の展開、東山道武蔵路の推定経路、中世鎌倉街道と柏原餅物師の関わりなどについては、(西井・金子・岡本1993)や(井上1994)に詳しい。あわせて参照されたい。

さて、当地周辺における先土器時代の資料はこれまで確とした報告例がなかった。しかし、近年の圏央道建設にかかる一連の調査では、鶴ヶ島市から狭山市にかけてで発見があいだぎ、普遍的な存在が明らかにされつつある。

第1図に示した範囲では、下山遺跡(6)で砂川期から、細石丸文化期をはさみ、尖頭器文化までの石器群が発見されている(西井・金子・岡本1993)。また、西久保遺跡(7)では、武蔵野台地IV層下部から砂川期にかけての石器集中区9箇所と礫群4箇所、および尖頭器文化の石器群が調査された(註1)。そして、宮地遺跡(9)では、ローム層の中からではないものの、細石丸や細石丸、尖頭器などが採集されている(城近1972)。

とくに、西久保では県内に比肩する良好なナイフ形石器群と接合資料が見いだされている。加えて、光山遺跡群(1)北方2kmの横田・柳戸・新山遺跡などで細石丸文化から尖頭器文化の石器群が調査されている(註2)。これら一連の発見により、当地における武蔵野台地IV層から細石丸文化期にかけての繁栄が一躍周知のものとなった。

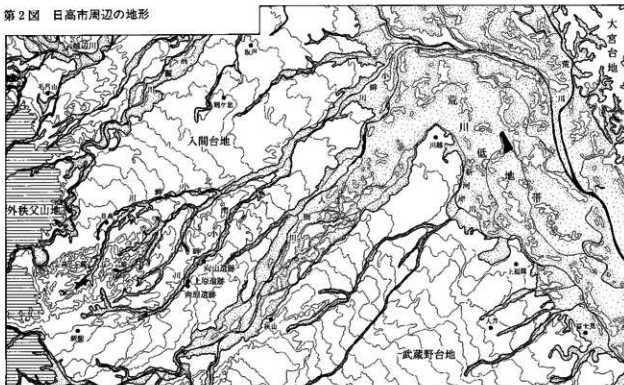
縄文時代にいたり、既知の遺跡数は一旦減少する。草創期から早期にかけての分布は散漫で、とくに草創期遺物の報告例は、高麗川上流の小岩井波場遺跡(安岡1977)、入間川沿岸の加能里遺跡(曾根原1984)などがあるのみで、図示した範囲では本書であつた向山遺跡が初出のものとなる。

また、早期では押型文土器とその周辺、および条痕文系土器の出土がもっぱらである。だが、前者は入間川や高麗川沿岸での確認はごくまれで、反面、小畔川流域を中心とする入間台地内では、わずかずつではあるが、普遍的に出土する。そして、今回、向山遺跡で集落跡と大量の土器・石器を確認しており、二反出遺跡(5、同1993)や、南北小畔川の合流地点である上組II遺跡(黒坂1989)などの成果を加味すれば、県内

第1図 遺跡の位置と周辺の縄文遺跡



第2図 日高市周辺の地形



でも有数の分布集中地域としても大過ないだろう。

しかし、その後は西久保遺跡、今宿遺跡(25、小渕1987)、堂ノ根遺跡(20、富元1993b)などで条痕文期の炉穴を、また、二反田遺跡で早期末から前期初頭期の住居跡を、そして、南小畔川上流の旭原遺跡(富元1993a)で花積下層期の住居跡を検出した他は、具体的な痕跡が不明である。

ところが、前期の中葉からは遺跡の分布に変化があらわれる。多少の起伏はあるが、遺跡数と規模は徐々に拡大し、中期にいたり、前半で最大の繁栄をむかえる。この傾向は関東山地をとり巻く西北関東地域で共通するものだが、この周辺は、そのなかでも地域的な偏差を見いだすことができる。

明確な変化の嚆矢となるのは、いわゆる黒沢期である。図内では八木上遺跡(10、金子1990)、楊柳木遺跡(29、仲山1986)で集落跡が調査されている。とくに前者は、西北関東系の有織維土器とともに、甲・信州方面で流行した無織維の釈迦堂Ⅱ3式土器が出土している。搬入経路は秩父盆地経由が有力であり(黒坂1992)、押型文系土器の存在とおなじく西方とのつながりを彷彿させる。

遺跡群はさらにその後、拡大の一途をたどり、最初頭の閑散期を経つつ、中期にいたる。図中の遺跡範囲は縄文時代遺跡を意図したもののだが、網で指示したように、そのほとんどで中期の遺物が発見されており、膨張のほどが察せられよう。

これらの中で、発掘の成果から大規模な集落跡の存在が想定できる遺跡だけでも、宿東遺跡(12、中平・松本1994他、註3)、二反田遺跡、芦刈場遺跡(19、城近1979)、茅久保遺跡(15、富元1991)、株木遺跡(17、富元1993a)、尾瀬遺跡(23)に西接する堂前遺跡(柳戸1986)、宮地遺跡、丸山遺跡(26、註4)などがある。そして、その間を埋めるように数軒規模の遺跡が点在している。

さらに細かくみれば、検出された住居跡の時期は、いわゆる井戸尻期から加曾利EⅡ期にかけてがもっとも多い。しかし、本書で報告する向原遺跡では磐沢期

の埋没が、堂前・芦刈場遺跡ではそれぞれ新道・藤内期の住居跡が、そして、稲荷遺跡(13)では加曾利EⅣ期の住居跡が調査されており(中平1990)、長期にわたり、この地が好まれたことがわかる。

磐沢・新道など、勝坂系前半期の動向が活発であることは、北西関東のたがでは律しきれないところである。曾利系の土器や、その影響を受けた甕形などの器種、さらに連弧文系土器が多出することも考えあわせると、遺跡数の増減などでみた北西関東の圏内に属しつつも、東京多摩地区などの南西関東との緊密なかわりを保ち続けていたといえるだろう。

だが、以上のような繁栄も、後期にいたると状況は一変する。遺跡の分布は、入間川や高麗川など、容易に大石が採集できる河岸段丘地帯へと移動する。その結果、小畔川上流域の遺跡数は激減し、上組Ⅱ遺跡で称名寺から堀之内期にかけての集落跡が調査されている他は、長山甲遺跡(2)、西ノ久保(3)で堀之内系のわずかな土器資料が報告されている(井上1994)にすぎない。もちろん、入間・高麗の両川沿岸でも、中期の栄華をとりもどすことはなかった。

そして、晩期でも、後期の分布傾向をそのままに引継ぎ、いくつかの遺跡を最後に、この地域における人間の痕跡は一旦途絶するのである。

註1 現在、当事業団で整理作業中。本報告と同時刊行の予定である(西井・栗岡1995)。

註2 現在、当事業団で整理作業中。柳戸・新山遺跡は本報告と同時刊行(西井1995)、横田遺跡は次年度刊行の予定である。

註3 日高市教育委員会によって7次にわたる調査が行なわれている。また、現在、当事業団でも発掘調査を実施中で、住居跡多数を検出している。

註4 平成3年度、狹山市教育委員会によって調査が行なわれた結果、住居跡12軒が検出された。現在整理中である。

III 遺跡の概要

今回報告する三遺跡は、いずれも南小畔川の右岸に立地する。とくに、向山・上原の両遺跡は、同川と直接に面するが、第一次調査の結果、低地部分には遺構・遺物は検出されず、台地の上だけが全面調査の対象となった。

道路建設の事前調査という性格上、調査区の範囲は遺跡の全域をおおうわけではなく、向山は遺跡の北端を、上原・向原は中央を貫くようなかたちで調査区が設定された。

向山遺跡は既報告の下向山遺跡に隣接し、約14,000㎡を対象として調査を行なった。調査区は、遺構・遺物の分布状況より、東西の二地区に分離し、その間には約60mの空白部がある。

検出できた遺構は、西地区で住居跡が7軒と、土壌86基、集石19基、溝2条、井戸2本、また、東地区で先土器時代の石器集中1箇所である。

その内訳は、住居跡6軒が縄文早期中葉、1軒が縄文中期中葉、溝と井戸が近世と判定した。

これに対し、土壌および集石は時期判定の題材に乏しく、判断に窮するものが多い。分布や軸方位から、溝や井戸と有機的な関連が推察できる長方形の土壌数基は、近世期に構築されたものだろう。そして、他は縄文時代の所産と思われる。しかし、いくつかの集石は確実に中期の所産と推定できるが、遺物の出土に恵まれなかったものは、早期・中期のいずれに帰属するか判断つかなかったものもある。

住居跡の軒数が示すとおり、出土遺物の中で主体となるのは縄文早期中葉であり、いわゆる東山式土器や初期の沈流文系土器、そして、押型文系土器がまぎって出土している。

また、これらに伴うと思われる石器も、スタンプ形石器や礫器を中心として212点ほど出土しており、該期の石器組成の基準資料となりうるものである。

このほかに、受熱のために赤化したものを含む大量の曜と、剥片が検出できた。その数は天箱換算で約80

箱。ほとんどがチャートで、目前に流れる南小畔川岸の石種を反映している。

一方、上原遺跡は南北約400mという長大な調査区となった。総面積は約20,440㎡で、南は3mほどの生活道路を目安に向原遺跡と画されている。

検出できた遺構は、住居跡7軒、土壌23基、集石19基、埋甕5基、溝13条である。近世期の所産となる溝と一部の土壌を除き、すべて縄文時代中期に構築されたものと判断した。

中期遺構は大きく勝坂系と加曾利E系に分離でき、遺構分布も、住居跡北群は前者、南群は後者に帰属する傾向がある。土壌は、南半に多く、勝坂期の遺物が出土していないことから、すべて加曾利E期に構築されたものと判断できる。対して、集石は分布・出土遺物ともにこの逆と判断できる。なお、埋甕は4基までが後者に帰するものであった。

出土遺物は、中期の集落跡にしては、さほど多くはなく、天箱換算で12箱ほどであった。

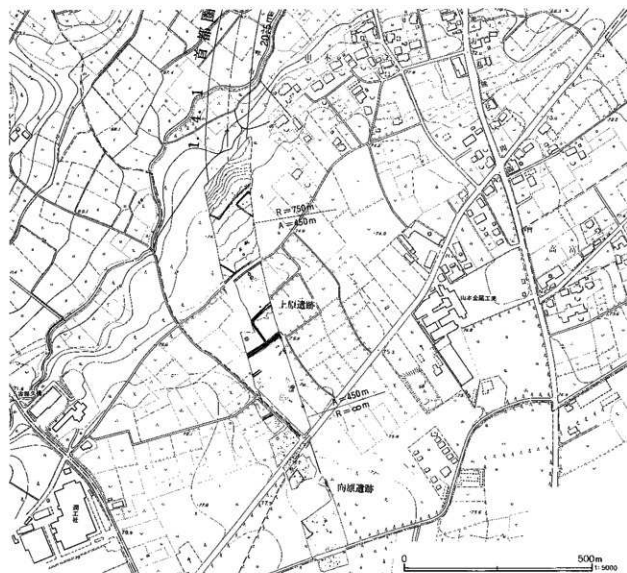
今報告で最南に位置する向原遺跡は、約11,700㎡を対象として調査を行なった。しかし、近年の擾乱や、道路下の埋設管などの関係で、調査区が細かくわかれてしまっている。

検出遺構は、住居跡5軒、土壌34基、集石1基、埋甕2基、カ穴10基、溝7条である。近世の溝と一部の土壌を除き、縄文時代に属し、カ穴が早期後半であるほかは、無数のビットも含め、中期の所産となる。

中期遺構の分布は調査区北半分に片より、北に接する上原遺跡の南側との地区的・質的な分離は困難である。両遺跡の線引は大字境を目安として接しており、統合か、分離に対する再検討が必要だろう。

出土遺物は加曾利E期のものが大半である。だが、上原遺跡のそれよりは若干新しい傾向があり、時代とともに台地の奥へ進出した継続的な集落変遷を想定することも可能である。また、集落と隔絶した地域で潅沢期の単独埋甕も検出している。

第3図 遺跡周辺の地形



IV 向山遺跡の調査

1 遺跡の概観

向山遺跡は南小畔川右岸の台地上に位置し、直接に同川が蛇行する低地に面している。安定した遺構確認面と現水田との比高差は約2 m。しかし、その落差も調査区北半の範囲で傾斜の率をゆるめ、南半ではほぼ平坦となり、確認面で62.5 m前後を維持する。

対象地は、遺跡範囲の北を約250 mにわたり東西に貫く。だが、遺構や遺物分布が両端に限られたため、調査区は東西の2地区に分離した。その間を含め、事業対象として扱った面積は約14,000 m²である。

調査の結果検出できた遺構は、住居跡が7軒、土壌が86基、集石が19基、溝が2条、井戸が2本である。これらは西地区に存在し、なかでも北西に片よって分布している。

このうち溝と井戸は、覆土の特徴や、陶磁器片の出土などから、近世期の造営と判定した。また、第47・48・73～75号土壌などは、軸方向や覆土に、溝との関連をうかがえるため、同期と判断した。

その他の遺構は、出土土器や覆土、形態から、縄文時代の所産と判断した。このなかで、第7号住居跡は中期加曽利E系土器が出土しており、いくつかの集石や土壌とともに、中期後半の構築と判定した。

しかし、出土土器の主体は、早期中葉の、撚糸文系東山式、同系末の無文土器、初期の沈線文系、そして押型文系である。住居跡をはじめとする多くは、これらの土器とともに利用されたものだろう。

早期遺構の分布は、西地区の北西に片より、往時は北の調査区外にも伸びていた気配を見せる。遺物や、大層に散乱していた礫などもこの分布に重なり、大略南北に長い楕円の範囲でまとまっている。

6軒を調査した早期住居跡は、確認面よりの掘り込みが浅く、柱穴は心もとなく、炉跡も確定できなかった。しかし、これらは整然と軸方向が統一され、3列が並ぶように構築されている。上屋架構の問題も残るが、同一景観のもとに存在した可能性が強い。

これに対し、土壌は円形で鍋底に近い断面形を呈するものが多いが、出土遺物少なく、詳しい時期判定に支障をきたすものが多い。南北に群を成するようであるが、即断はできない。

また、集石は、礫分布の中核をなすように、調査区北側では環状に分布している。下位土壌の有無によって二者に別れるが、判定できる時代との関係や、その他の基準ははっきりしない。底石の敷設は1基に見られたのみで、他は上中層に終始する。集石は、時代に問わず、チャート破砕礫が80%以上を占め、60%が被熱している。

一方、遺物は前述した早期中葉の所産が圧倒的で、3,528点が出土した縄文土器のうち、75%を占める。特に、押型文系土器の出土量は県内でも比類なく、また、東山式の資料も充実している。

また、縄文石器は、東西地区合わせて、製品が212点出土した。スタンプ形石器を筆頭として、礫器、削器、石鎌など、早期に製作されたと見こまれるものが大半である。

そしてもう一つ、東地区では先土器時代の石器集中区を検出している。小規模であるものの、接合資料が得られ、尖頭器などの単品も出土している。

また、西地区でもナイフ形石器や細石核などが散発的に出土している。だが、こちらは、縄文遺物とともに検出されている。周囲では縄文時代に帰属せしめた剥片が多く出土している。あるいは、これらのうちには同時代の剥片が含まれているかもしれない。

なお、西地区脇の谷部では、立川ローム層第2黒色帯の直下で有機質に富む粘土層が確認できた。往時の植生と該当層の年代を復元するため、放射性炭素による年代測定と花粉分析を委託した。しかし、試料採取に手違いがあったためか、満足な結果が得られなかった。そのため、付編への掲載を差し控えた。

第4图 向山遺跡全体图



2 遺構と遺物

(1) 先土器時代石器集中区 (第5～8図)

本遺跡では、東地区の1箇所为先土器時代の石器集中区を検出した(第5図)。これらは、表土削除後に発見された8番の剥片を皮きりに、地山ローム層の精査で検出できたものである。

その多くは、東3・4Bグリッドの径2.5mの範囲で散発的に出土している。また、砂岩礫2点を検出したものの、礫群はともなわない。

出土層位は、表土下の暗褐色新移層で出土した8を除き、ほぼ、ソフトロームの基本第III層から基本第IV層にかけてであるが、とくに後者に集中する。

この集中より出土した石器類16点のうち、14点がチャート材の同一母岩に属する剥片や石核で、11点が接合できた。また、これに取り囲まれるように、黒曜石の尖頭器と剥片が1点ずつ出土している。

この他、東西地区のいくつかで、第6図2～5に示したナイフ形石器や細石核など、先土器時代の石器を検出しているが、いずれも地山ローム層中の調査で出土したものではなく、縄文時代の土器や石器などとともに、単独で出土している。

しかし、今調査では、縄文の所産とした剥片が481点も出土しており、なかには、例えば5のナイフ形石器のチャートに酷似する石材の剥片が複数存在するなど、いずれに帰属するのか紛らわしいものも多い。

本遺跡の主体である縄文早期中葉の調査という性格上、縄文遺物の垂直分布の眼界を見極めるため、いくぶん厚く地山層を掘削した感もなくはない。そして、その過程で先土器時代に起因する剥片をも、ともに測量、取り上げてしまった可能性も十分にある。

結局のところ、莫大な量を含めた遺物の検出時に、各剥片を吟味したり、整理時に、各遺物で記録した標高値で微妙な高低を識別するのは困難であった。そのため、技法的に新古の識別が容易な石器製品のみを分離し、単独で報告するにとどめた。本遺跡の先土器時代を検討する際には、留意をお願いしたい。

尖頭器 (1)

両面加工の尖頭器で、原材料には透明度の高い良質の黒曜石を用いている。裏面の一部に素材となった剥片の剝離面を残す。正面から裏面方向への力によって、上半部を欠いている。

本例は単独出土のため詳細は分らないが、同様の尖頭器は墨夷道に関連する鶴ヶ島市横田遺跡(註1)から、製作址を伴って確認されている。あるいは横田遺跡で製作されたものの1点かもしれない。

細石核 (2・3)

2は良質の黒曜石を用いた細石核である。素材は厚みのある剥片を利用している。素材となった剥片の主要剝離面を打面としている。打面調整は加えられていない。打面には10箇所ちかい加撃痕が集中して残されている。周囲をめぐるように為された細石刃剝離作業によって打面縁辺が鋸歯状を呈する。全体に幅広く短い細石刃が剝離されている。

県内ではこうした細石核の出土例は報告されておらず、類例としては神奈川県上草柳第1地点にちかい。「船野型」とよばれる細石核に類似する。

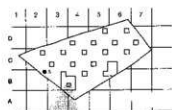
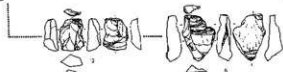
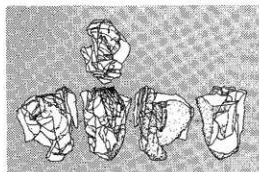
3は2と異なって片理面の多い、あまり良質でないチャート製剥片を素材としている。素材の形状をそのまま用いて、船底にちかい外形となっている。打面調整は長軸のやや斜方向に為されて、その端部から短い細石刃が数点剝離されている。

ナイフ形石器 (4・5)

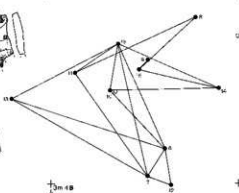
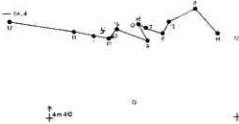
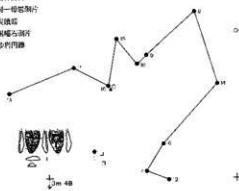
ナイフ形石器各部の名称については、田中によって提示されたものによる(田中1979)。

4は黒色で良質なチャート製剥片を、正面中央に稜線が位置するように縦長に利用している。正面左側縁を素材のまま残し、そこに刃こぼれ状の痕跡がある。基部の正面から裏面方向への二次加工によって、柄部のような作り出しとなっている。

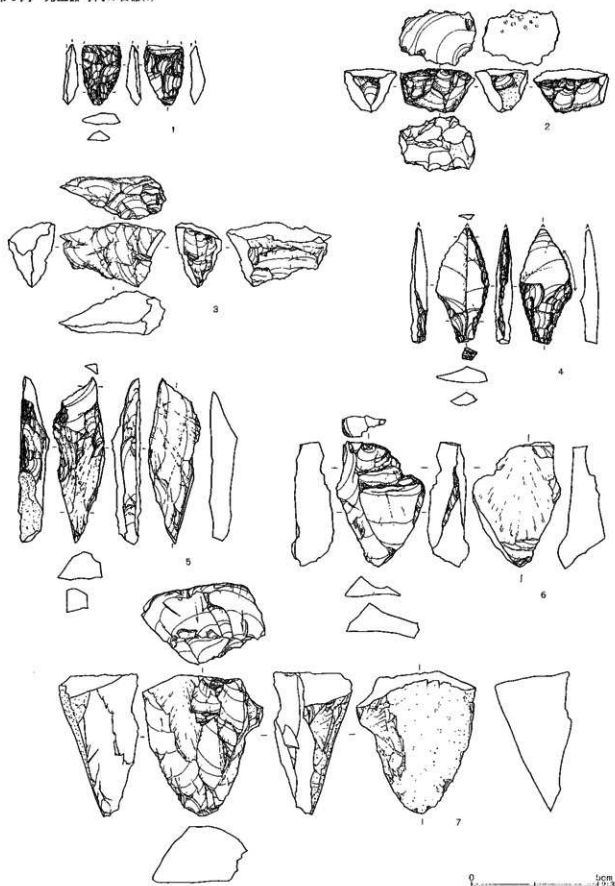
5は片理の走るチャートの横長剥片を縦に用いている。正面右側縁は折面をそのまま利用し、左の側刃縁に2次加工が集中する。先端角は60度前後とやや鋭さ



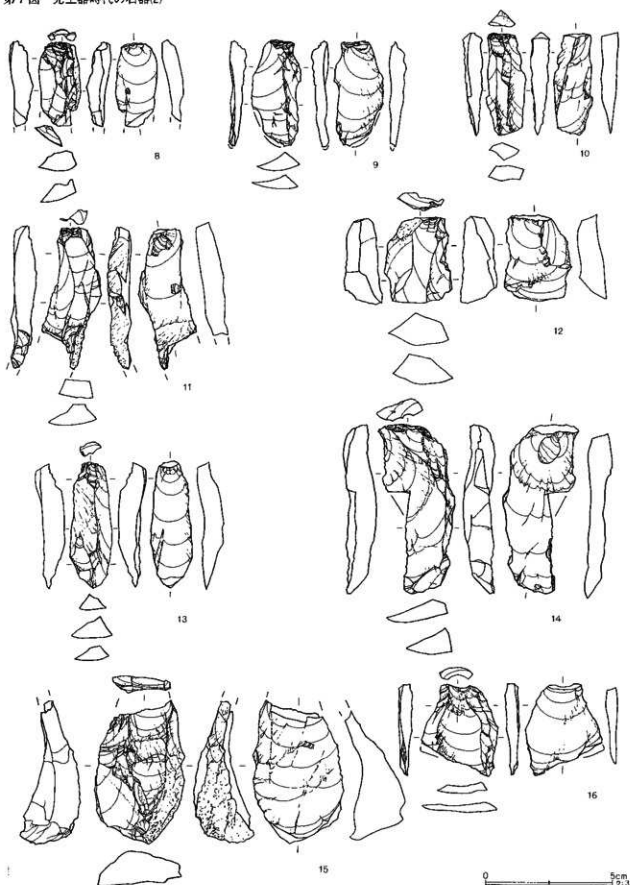
- 混合資料
- 同一樣本數
- ◆ 夾續器
- ▲ 連續石測片



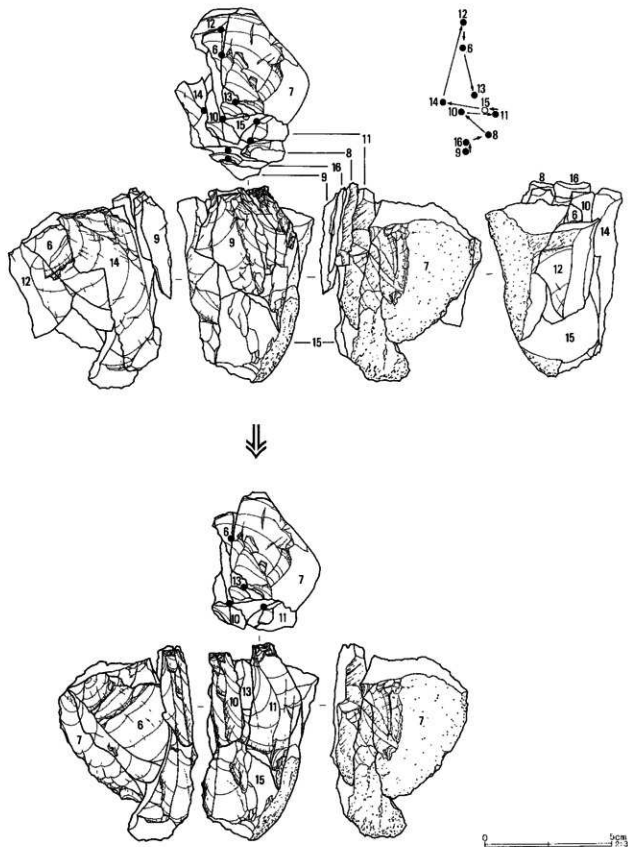
第6図 先土器時代の石器(1)



第7図 先土器時代の石器(2)



第8図 先土器時代の石器(3)



に欠け、切出し状の外形をなす。

4・5共に従来武蔵野台地でIV下と呼ばれてきた石器群に相当し、県内においても多くの類例がある。

削器 (6)

幅が広く厚みあるチャートを用いている。正面右側縁中央部に、丸みを帯びた刃部が設けられている。

石核 (7)

6と同一母岩で、互いに接合する。石核としては最終的な残核である。正面に同一方向から為された縦長剥片の剥離痕が残る。打面は斜離面によって切られているが、数枚の大きな剥離面で構成され、細部調整は残されていない。

剥片 (8～16)

6・7と同一母岩で、すべてが接合する。7に残されていたように、いずれも縦長の剥片で、細かい打面の調整は為されていない。どこかに片理面をもつものが多い。

13～15の、正面の剥離痕には求心的な方向を示すものもある。しかし、180度打面を転移するまでには至っていない。

接合資料 (第8図)

6～16までのチャート製同一母岩の接合状態を示した。原石は円礫で色調は黒褐色に灰白色が斑状に混じり、所々に片理面が多く走る。ただし遺存した部分は比較的良好であり、片理の間を縫って剥離作業が行われている。

打面調整の剥片は接合しないが、円礫を大きく分割するかのように打ち割り、大まかな打面調整の後に同一方向への打撃で剥片を得ている。打点をジグザグに転移しながら縦長剥片を得、凹凸のある打面に沿って細調整を経ずに作業を進めたために、14以降の剥片では斜傾している。

本母岩を用いた製品の詳細は不明だが、原石の特徴や縦長剥片の形状から、砂川型式の石器群に用いられた可能性が高い。

註1 現在当事業所で整理作業中。次年度刊行の予定である。

第1表 石器観察表(1)

番号	グリッド	北-南cm	西-東cm	標高m	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石 質	備 考
1	東 4 B	572	48	64.165	尖頭器	(2.4)	1.5	0.6	1.72	黒 曜 石	以下同一母岩接合
2	西 4 K	---	---	---	細石核	1.7	3.0	2.2	9.33	黒 曜 石	
3	東 2 B	95	886	64.226	細石核	2.3	1.8	4.2	11.81	チャート	
4	西 5 D	734	313	62.252	ナイフ形石器	(4.5)	2.1	0.7	4.92	チャート	
5	西 6 C	533	865	62.323	ナイフ形石器	6.5	2.1	1.0	13.09	チャート	
6	東 4 B	363	121	64.194	削器	5.1	3.6	1.5	18.13	チャート	
7	東 4 B	593	103	64.255	石核	5.5	5.0	3.1	70.98	チャート	
8	東 4 B	424	155	64.454	剥片	3.3	1.7	0.6	4.35	チャート	
9	東 4 B	469	104	64.110	剥片	4.2	2.0	0.7	4.03	チャート	
10	東 4 B	502	65	64.137	剥片	4.1	1.6	0.7	4.32	チャート	
11	東 4 B	482	27	64.210	剥片	5.6	1.8	0.8	9.14	チャート	
12	東 4 B	601	127	64.318	剥片	3.3	2.7	1.3	12.05	チャート	
13	東 3 B	510	858	64.312	剥片	5.0	1.7	0.8	6.30	チャート	
14	東 4 B	500	180	64.185	細剥離痕のある剥片	6.7	2.7	1.0	16.47	チャート	
15	東 4 B	452	73	64.237	剥片	(5.7)	3.6	2.0	35.08	チャート	
16	東 4 B	479	94	64.284	剥片	3.6	3.1	0.5	3.91	チャート	

(2) 住居跡 (第9~17図)

第1号住居跡 (第9図)

住居群東端の3Eで検出した。第2号住居跡の南にあり、北西に傾く軸線は同方向のみならず、同一の線をはほぼ共有する。

壁穴開口部の形態は、長軸方向にややひしゃげた楕円形で、確認面から床面までの深さは、10cm前後と浅い。覆土は褐色系土で占められ、上下や壁際での変化はあまりない。

床面中央と東よりに、径約60cmと80cmの浅い掘り込みがある。住居内での位置関係からすれば、竈跡ではないかとの推測もできるが、覆土からは焼土塊や粒子の存在は認められず、これが燃焼施設であることを立証する根拠が見いだせない。

柱穴に相当する小穴は、前記の掘り込みを除き、壁際に7本検出したが、いずれも浅く、柱底も検出できなかった。

覆土中や床面直上からの遺物出土は散漫で、土器19点と石鏃が2点出土したにすぎない。土器は早期が16点と最も多く、うち15点が埴型文系であった。

1~4は、いずれも山形埴型文の胴部片である。

第2号住居跡 (第10図)

第1号住居跡と北西に傾く軸線を共有し、形態もほぼ共通する。第6号土壇と重複し、土層観察の結果、同様が後出すると判断した。覆土は褐色系土で占められ、壁際や下層ほどに黄色味を増す。

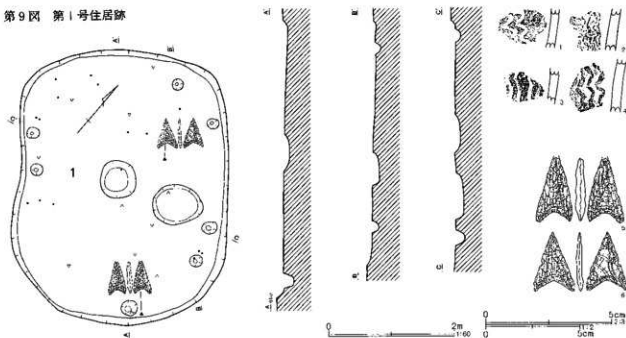
柱穴に相当する小穴は8本を検出したが、いずれも10cm前後のもので、柱底も検出できなかった。また、北西中央のそれは、他よりやや大きく、位置関係からして燃焼部である可能性もあるが、焼土粒子等のもとまりは見られず、確定はできない。

遺物は覆土中より散漫に出土しているが、やや北側に片よる傾向がある。土器が59点出土しているが、東山式12点、燃糸文系終末の無文系5点、埴型文系35点と早期中葉の3系が主体である。また、石器類は刮器が1点と剝片が3点出土した。

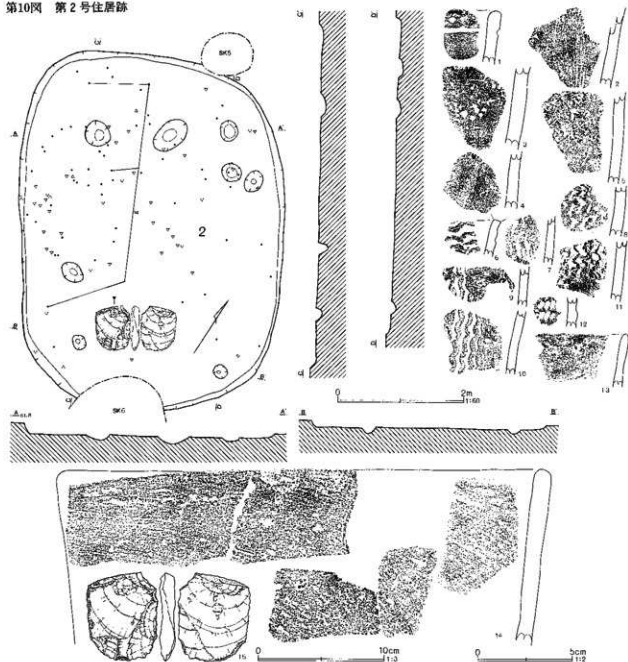
1~5は東山式と分類したが、2・4・5は胎上の質感が埴型文系に類似しており、とくに、5では同系に多い片岩質の混和材を大量に含んでいる。あるいは同系として扱った方がよいかもしれない。2の器表には縦位の擦痕が残るが、これは、文様を意図したものではなく、器面調整痕である。

一方、6~11は山形埴型文系の資料で、同系出土35

第9図 第1号住居跡



第10図 第2号住居跡



点のうちの大半はこの類である。これに対し、12は単節のLRが施文され、13は無文である。前者は条間が広く、押圧手法による縄文の可能性もある。

14は、撚糸文系末から沈線文系初頭に比定できる無文土器である。胎土に石英や長石を含み、横から斜位の擦痕様器面調整痕が観察できる。第23図9の第2号集石とも酷似しており、本住との距離を考慮すると、あるいは同一個体かもしれない。

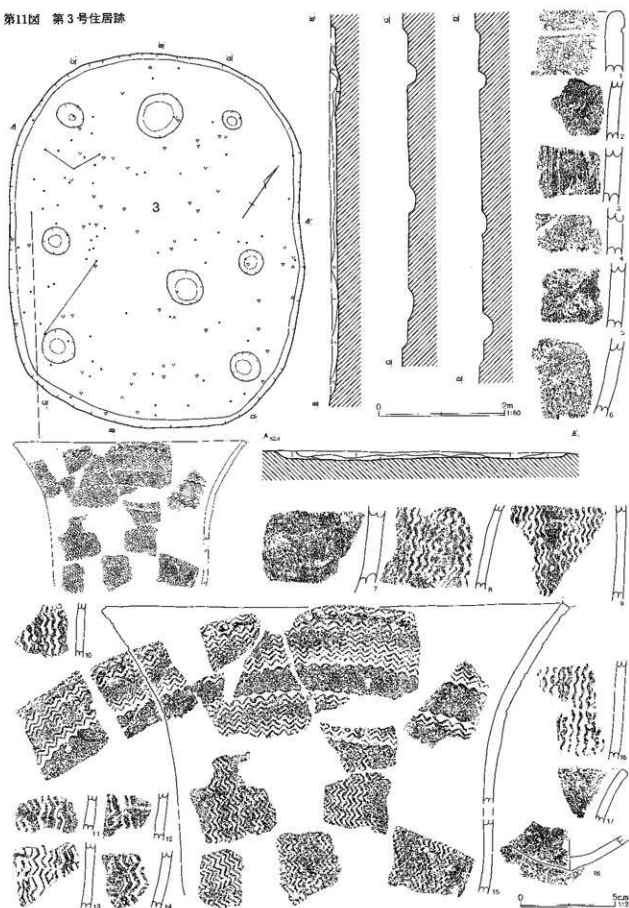
第3号住居跡 (第11図)

今回検出した縄文時代早期住居のなかで最も南に位置するが、北西に傾く主軸線の延長は北に位置する第4号・第5号住居跡の中心を貫く。

竪穴開口部の形態は側辺が直線的な楕円形で、確認面からの深さは約10cm程度である。覆土は褐色系土が主体だが、下層と壁際に向かい黄色化し、覆土は3層に分離できた。

柱穴は壁際にめぐる6本が相当すると思われる。し

第11図 第3号住居跡



かし、いずれの深さも10~15cm程度で、柱痕は残されていない。また、北柱間の浅い掘り込みは竈跡との解釈も可能だが、覆土内では、焼土粒子の混入等、燃焼施設をうかがわせる要素は観察できなかった。

遺物は86点の土器と、7点のチャート剥片が出土した。これらの分布は散漫で、片よりがなく、これといった傾向を見いだせない。

土器は42点の東山式と、54点の押型文系とに大別でき、沈線文系や直前の無文土器は出土していない。

1~7は東山式の無文土器であるが、いずれも砂粒を含み橙褐色を呈する。口縁部の1は口頭部の口縁部に沈線を加えたのみで、器形曲線に変化ない。

一方、8~18は押型文系で、とくに、15は第32図の118とともに、全体の器形が推し量れ、かつ、複段にわたる横帯施文が観察できる。本遺跡では数少ない資料である。印された山形文は細く、深く、そして鮮明で、他の山形文とは一見でちがいを識別できる。

もう一つ、6~7mmの器厚は、他の同系土器よりやや厚く、石英・長石、さらには雲母を大量に混和させた乾質的な胎土は、粘質的な視覚感を持たせる本遺跡の押型文土器のなかでは際立っている。

押型原体の長さは約2.5cm、胴下位の縦位施文帯も同原体で施文され、ややあいまいな部分もあるが、こちらも無文部を意図的に残している。

15は、本住の他に、第6号住居跡や4Cや5Bグリッドなどで出土した。だが、胎土や手法の特徴より、他との識別に遺漏ないと判断し、接合関係によらず、最も多くの破片が出土した本住で報告した。

その他の山形押型文は、凝灰質の小粒子を大量に含む11・13でさえも、粘質的な器表感を漂わせ、原体の印刷も荒く、浅い。12の上辺は器表が剝落して現れた疑口縁部に成形接合前の施文が垣間見える。

17は無文の口縁部だが、山形らしき痕跡もある。また、18の底部はわずかな乳頭突起を加えるのみで、器形曲線も緩やかである。胎土の特徴は15に類似し、あるいは同一個体かも知れぬ。

第4号住居跡(第12図)

第3号と第5号住居跡を結ぶ軸線上にあるが、こちらの主軸方向だけは他の早期中葉住居の5軒と直角に交わる北東方向にむく。

竪穴開口部の形態は楕円形で、確認面からの深さは約10cmをはかる。覆土は褐色系の土でみだされ、下層や壁際に近づくほどに地山のローム層と同質の黄色味が加わる。

柱穴は計8本を検出した。しかし、壁際に集中する傾向を見てとれるほかは、深度も行き届かず、柱痕も検出できないなど、立柱の要件を満たせるまでには至っていない。

また、床面中央には径約50cmの浅いくぼみがある。柱穴などとの位置関係からすれば、竈跡との検測も可能である。しかし、他に広く分布する第2層がこのなかに流入し、焼土の集中散布が見られないなど、燃焼施設を彷彿させる要素は観察できなかった。

この他、住居内には径約70cmと約90cmの、円形で鍋底様の断面形を呈する落ち込みがある。これらが、土壌が重複した結果なのか、住居内の施設として認定できるのかは判断できなかった。

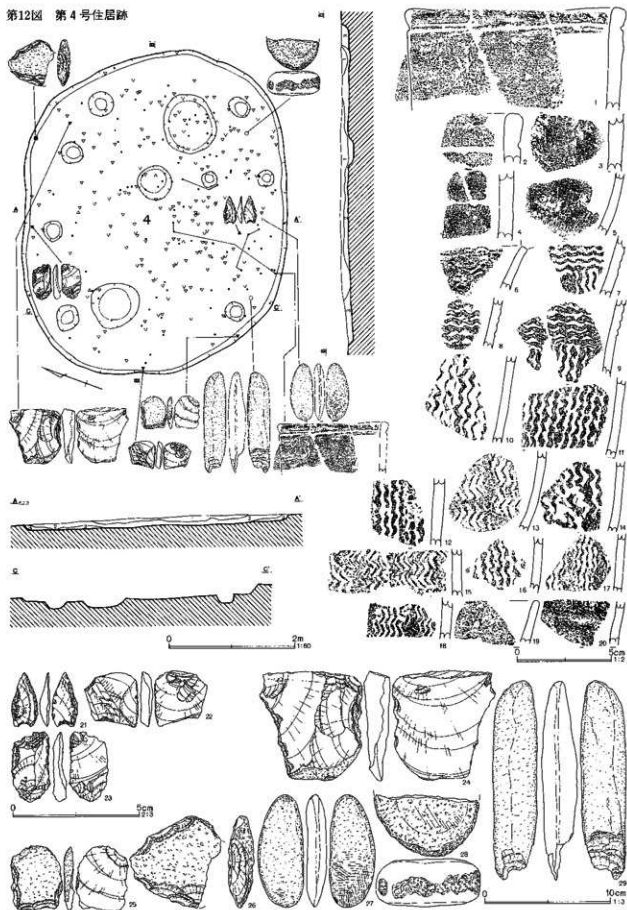
遺物は土器が98点、石器製品が9点、剥片が6点出土した。これらの分布は、際も合わせ、南方に多い傾向があるが、土器の接合関係は少なく、廃棄や堆積の状況を反映したものではないようである。また、石器製品は壁際に集中する傾向があるが、こちらの要因も判断がつかなかった。

土器の群別内訳は、東山式が44点、押型文系が54点で、沈線文系群は出土していない。

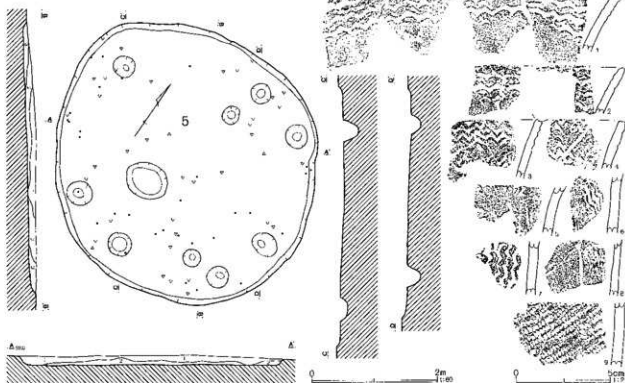
前者では、1~5の5点を示した。1・2は別の個体ながら、直立する器形の口唇が沈線を目安にやや肥厚かつ外反する点で共通する。沈線は後引きであるものの、口縁部における器形曲線の変化が乏しい本遺跡では、数少ない資料である。

これに対し、6~20が押型文系の破片で、有文はすべてが山形文を押捺している。山形原体の印刷は縦線の歯切れが悪く、9のように、波状と化してしまった

第12図 第4号住居跡



第13図 第5号住居跡



ものもある。意図的な無文帯を設定するものではなく、むしろ、15のように、同所で施文を繰り返す傾向すらある。9・11は同一個体である。

一方、石器は出土した製品のすべてを示した。21の石鏃は横長剃片の上下を簡単に調整し、側縁の二等辺を作出している。基部の挟りも同様な調整で間に合わせ、明確な脚部は存在しない。

削器は22～25で示したが、定型的なものはない。縦長の剃片を折断するものもあるが、基本的には剃片の長側縁を細加工するようである。

遺構外で多い碟器やスタンプ形石器は少なく、26の1点が検出できたにすぎない。同番は片面のみの荒い打割に終始し、機能部が尖頭となるが、上下の双方が機能部たよう、均等に打割を行なっている。

27は西地区で唯一出土した局部磨製石斧である。緑色岩の扁平角閃岩を素材とし、刃部を作出するための研磨だけが加えられる。また、28は、側縁に敲打痕をもつ磨石、29は敲石である。

第5号住居跡（第13図）

早期中葉にあたる住居群の3列のうち、中央列の最も北側に位置する住居跡である。竪穴開口部の形態はほぼ円形で、主軸の設定は不可能だが、第3号から本号までが直列化することを考慮すれば、第3号か、第4号にならう方向を重視していたと考えられる。

確認面からの深さは約10cmで、他の住居との差は見られない。また、覆土も褐色系土が大半を占め、緩やかな自然堆積で埋没したことも共通する。

柱穴は9本を検出したが、これもまた他住と同様、焼土散布に欠ける中央西の浅い落ち込みとともに、住居内施設としての根拠に欠けている。

遺物は、散漫な分布のなかで、土器36点と剃片5点を検出した。土器は東山式11点と押型文系25点で、沈線文系群は出土していない。

図示したすべてが押型文系で、7までが山形文である。印刻は荒く大型で、浅いものが多い。また、9は単節LRを横位に施文している。

第6号住居跡 (第14・15図)

今回の調査で検出できた6軒の縄文早期住居跡のうち、最も西に位置するものである。しかし、開口部形態から算定できる軸方位は、他の住居と連携を保つかのように北西に傾き、第5号・第2号住居跡と同等の間隔をもって並列する。

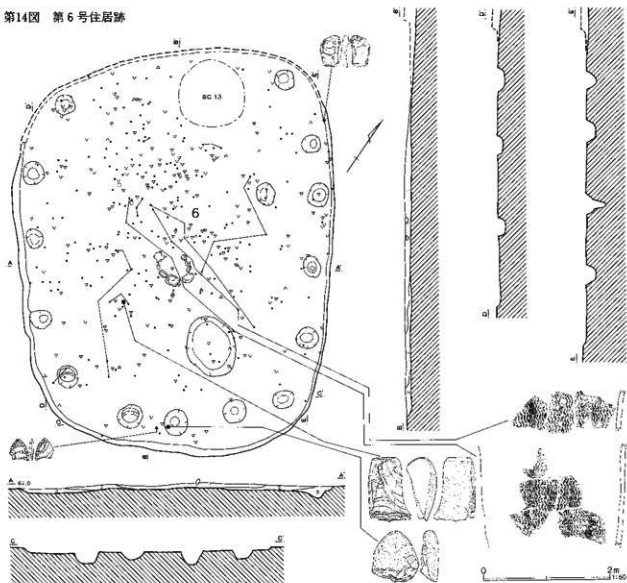
また、北の一部は、眼前にせまる南小畔川に至る斜面に影響されて、覆土が流出し、ローム地山が抉られている。だが、この流出は小規模なものであり、遺構全体の把握には支障ない。ここでは第13号集石と重複するが、同墳の集石部分が乱れることなく遺存している。しかし、想定床面との高低は微妙であり、先後の

目安とはならない。

推定できる竪穴開口部の形態は、第2号・第3号住居跡と同じく、やや直線的な楕円形である。そして、推定長軸長6.6m、短軸長5.2mと、6軒のなかでは最も規模が大きい。確認面からの深さは、最も長じる箇所約10cmと、極端に浅いが、褐色系土が黄褐色に移行する過程により都合3層に分離できた。

柱穴は、主として壁際にめぐる15本が検出できた。これらの深さは10～30cm内外で、柱痕は検出できなかった。また、北の推定壁際では柱穴列が途切れる。だが、地山層までの流出を加味すれば、2～3本が当該部分に穿たれ、その後の自然環境にさらされて消失

第14図 第6号住居跡



したことも考えられる。

床面の中央部には弧状にめぐる礫列を検出した。これは、住居内での位置関係と石の配列からすれば、石囲い壁と判断できる。しかし、石の列は、調査中に判定した床面より浮いた状態で出土している。また、埋設を仮定した掘り方も検出することができなかった。そして、内部に明確な燃焼施設たる根拠も見いだせなかった。この矛盾は、報告時までには解消することができなかった。

遺物の出土量は、検出住居のなかで最も多く、土器が267点、石器製品が7点、チャートを中心とする剥片が18点出土している。

これらの分布は、礫を含め、住居の中央にやや多い傾向があり、土器の接合関係もこれを反映した連絡線が描ける。これに反し、石器製品は、第4号住居跡と同じく、壁際に多い。

土器は、211点が出土した押型文系が主流で、45点の東山式、7点の沈線文系群が主づく。

1～7が東山式であるが、口縁下の沈線は、器形曲線の変化をもたらしつつは、一々に成形した口縁部に沈線を描き加えただけのものである。総じて押型文系より砂質感が強い。

これに対し、押型文系は8～43の36点を示した。有文の破片では、42の1点を除き、山形文が印されており、17～19など、同一個体片も多いものの、接合がなわなかった。

口縁下に無文帯を介した複数の横位施文列を設けるものは、8がその可能性をもつのみである。他は、1回の施文(9)、極くわずかな幅の施文(11・12)、無施文(10)で、下位の縦位施文帯へと移行してしまう。口唇部への施文は、口縁部片6点のうち5点に見られ、10のように施文にそなえ、口唇部形態を幅広く整えるものもある。

下位の縦位施文は、帯状化への意図をあからさまに伝えるものはない。無文帯を残す17～19なども、まばらな施文や、器面の湾曲と固い原体との兼ね合いで生じた可施文範囲の制約に左右されたものである。

山形文原体の印刻は、各条が幅広く、荒く、そして浅い。なかには、隣接する条の山形が対応せずに波状化したり(23)、さらに高じて直線化してしまうもの(20)もある。

この他、42は、同じ押型文系ながら、捺系Rを縦位に回転押捺している。また、43は、刺突が印されているようにも見えるが、器面の凹凸著しい無文土器である。そして、41は際立った乳頭状突起を加える尖底部である。

これらの胎土は、雲母・石英・長石・滑石などを含み、東山式と比して粘質感を強く受ける。また、とくに片岩質粒子を混和材として好むものは、色調が赤から橙褐色に集中する傾向がある。

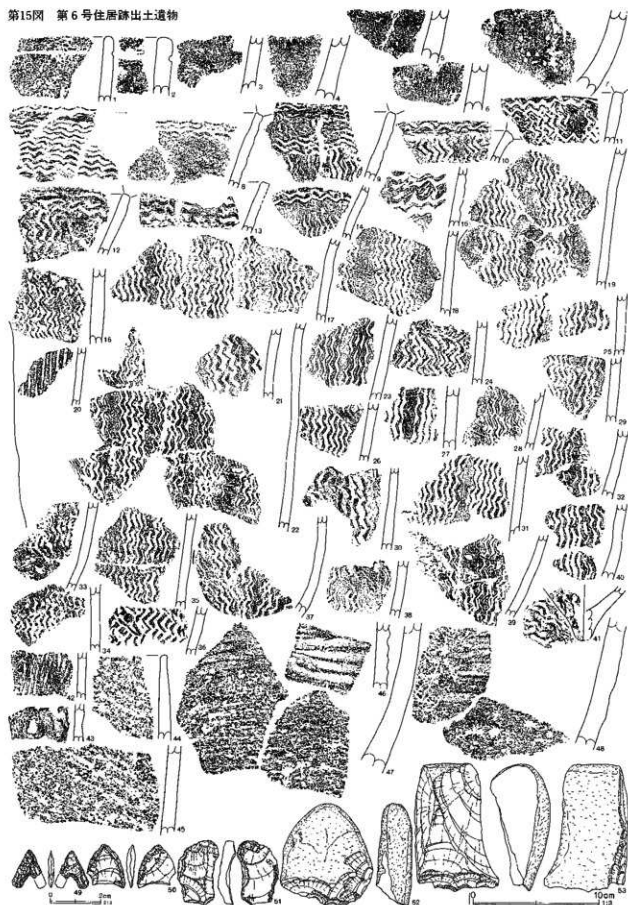
一方、44～48は捺系文系末から沈線文系初頭にかけての土器群である。44・45は斜位のケズリ調整のみを残す無文土器である。しかし、表裏における器面調整の極端な差から、器表のザラツキが意図的であることが察せられる。

また、46は明確な横位の凹線を、47・48は浅く幅広い横位凹線を施すものである。44・45を含め、これらには石英・長石の粒子が大量に混和されている。さらに、器表はこれを引きずるようなケズリ調整、内面はこれを粘土内に埋没させるナデ調整が施されることで共通している。

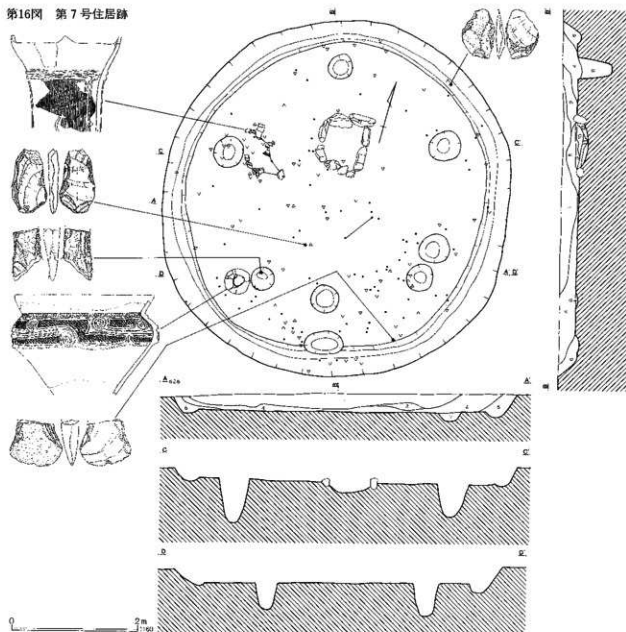
石器は5点を図示した。さらにこの他、磨石の破片が2点出土している。49・50は石錐で、前者は黒曜石製の加工の行き届いた凹基錐である。また、後者は剥片の側縁を簡単に細加工したのみで、未製品なのかもしれない。

これに対し、51はチャート製の削器、52・53は礫器である。前者は縦長剥片の両側縁を細加工し、機能部としている。また、52は凸刃を53は平刃を機能部とするが、53は側縁にも同様な加工があり、横刃型への転用も意図したものととれるが、鈍角であり、機能部とはなりえない。

第15図 第6号住居跡出土遺物



第16図 第7号住居跡



第7号住居跡 (第16・17図)

縄文早期中葉住居群とは隔絶した7Dグリッドに単独で検出できた。

竪穴開口部の形態はほぼ円形で、確認面から床面までの深さは約30cm、壁は緩やかに立ち上がる。炉跡と柱穴との配置で決定できる主軸の方向は、やや北西に振れる。

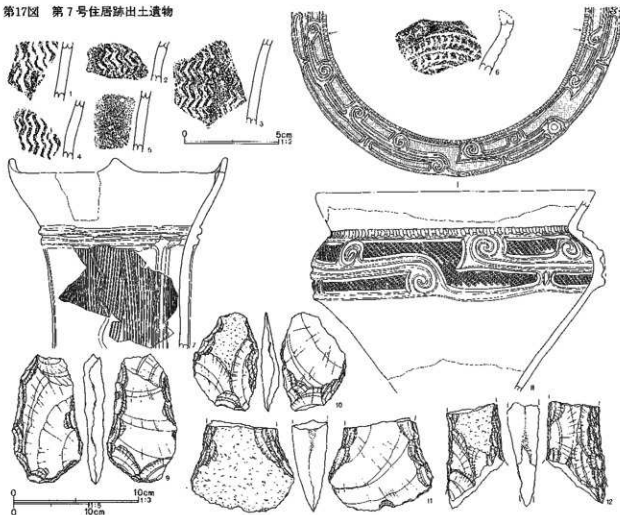
覆土は暗褐色から褐色系土で占められ、下層、そして壁際に近づくほどに黄褐色の色調を強める。床面は平坦で、壁際には壁溝が全周している。壁溝内の埋土

は壁際の覆土と分層し得ない褐色土で、矢板痕等、壁溝にともなう施設を類推させる土層の変化は観察できなかった。

炉跡は中央北よりで検出できた。大略長方形に砂岩やチャートの大石を配置する石囲いである。内部は焼土粒子が大量に混じる自然堆積の褐色土が主体で、土器埋設を意図した掘り方は存在しなかった。

柱穴もしくはこれに近い小穴は9本を検出した。このうち、壁から離れた6箇所が主柱穴の候補と見なせる。だが、南のそれは、B断面に見るように、主柱穴

第17図 第7号住居跡出土遺物



とするにはいささか心許ない。これを除いた5箇所の柱穴で立柱を支えていたのだろう。

これに対し、壁柱穴にかかる小穴は、主柱に漏れた南小穴とともに入口施設の設置部とも推測できる。しかし、埋土にそれをあらわす痕跡は認められず、断定はできない。

遺物は、加曽利E系を主体とする土器が99点、打製石斧が4点、剥片類が13点出土している。これらの分布は、が跡より南に片より、覆土の中から下層での分布が多い。加えて、第17図8に示した有文線帯の鉢形土器が南西主柱穴のかたわらで逆位かつ置かれたように出土した（図版5中段右）。

本住よりは11点の押型文系土器が混入、出土している。1～4は山形文の胴部片である。そして、5は同系の無文土器である。また、6は1点のみが混在した

竹管文系爪形文の人型波状線土器である。

一方、加曽利E系は2点を示したが、7は口縁無文の条線土器である。平縁に突起を加えて波状口縁様とし、隆帯を区画線とする。

また、8は、横S字の中央に1個を加えた3個が一組となり、3単位、合計9個の隆帯渦巻にそれぞれ趣向をこらし、流れるような展開をめざしている。渦巻の巻き、萌芽方向上下区画線との接線などに変化を求め、一つとして同じ文様が現れないよう配慮されている。なお、実測図の正面は単位の狭間にあたる。

打製石斧は4点すべてを図示した。形態は、末広がり、のび型が基本であり、小さな剥片素材を簡単に加工しただけの10でさえも、着柄のための側縁絞打が加えられている。石材はいずれも砂岩である。

(3) 土壌 (第18～21図)

今回の調査では86基の土壌を検出した。これらのうち、第13号・第23号・第26号・第47号・第48号・第65号・第73号～第76号・第78号・第83号の12基は、覆土や形態、さらに溝との位置関係から、近世期の造営と判断できる。そして、その他の74基は、縄文時代に構築されたものと考えられる。

しかし、出土遺物に恵まれないものが多く、詳しい造営期にまで判定が及ばないのが大半である。強いてこれを求めるとするならば、ほとんどは、遺跡の主休期である早期中葉か、加曾利E期に属すると推定できる。ところが、両者の土器が合わせて出土している土壌もあり、加えて、住居跡での遺物出土状況や、遺構外での散布状況を加味すれば、早期中葉の遺物が出土しても、該期として判断はできない。

もうひとつの目安として、第2号から40番台の土壌は早期住居跡の分布と重なるか、これを取り巻くように分布しており、(7)で後述する、礫群の分布とも合致する。そして、調査区南方に集中する50～70番台の土壌は小片ながらも、加曾利E系土器を出土したものが多く、時期判定の参考となるだろう。

紙数の関係上、これらのすべてを詳述するわけにはいかない。そのため、代表的な数基についてのみ以下に示すこととする。

第1号土壌 (第18図)

開口部形態は楕円形、壁面は緩やかで、浅く、墳底の高さも一定しない。覆土は暗褐色系土で占められ、下層、そして、壁面に近づくほどに黄色味を増す。円形の開口部形を呈する第5号や第59号などを含め、本遺跡で一つの類型として認定できるだろう。

出土遺物は、ない。

第4号土壌 (第18図)

開口部の平面形や浅さ、覆土は第1号と同じような特徴を示すが、平坦な墳底を擁するものである。第10号や第31号、第37号をはじめとして、本遺跡でもっとも同種のものが多く類型である。

出土遺物は検出できなかった。

第6号・第7号土壌 (第18図)

両者が重複しつつ、第6号は第2号住居跡とも重複する。これらの先後関係は、覆土の観察から、第2号住～第6号～第7号の構築順と判断した。形態の類型は、両墳ともに第1号と同類である。

遺物は出土しなかった。

第15号土壌 (第18図・第21図1・2)

略楕円の開口部形をもち、断面形は第4号と同じ類型となる。出土遺物は押型文系4点と、加曾利E系の土器が1点出土している。

1は表裏施文の山形押型文土器、2は蛇行粘土貼付で口縁部無文帯を区画する加曾利E系変形土器の頸部片である。

第17号土壌 (第18図・第21図3・4)

開口部形態は円形、第4号に代表される類型に相当する。遺物は中期土器が3点と、スタンプ形石器が1点出土している。石器は早期中葉の所産とみなせることを考えれば、第15号と同じく、ここも出土遺物の所属期が矛盾する。

3は、勝勝・阿玉台系土器の胴部文様帯と思われるが、詳しい構成の想像がつかない。区画は鋸歯状を基調とするが、隆帯ではなく、平行沈線のみで行なっている。一方、4は砂岩製のスタンプ形石器で、底面の摩耗痕は観察できない。

第19号土壌 (第18図・第21図5・6)

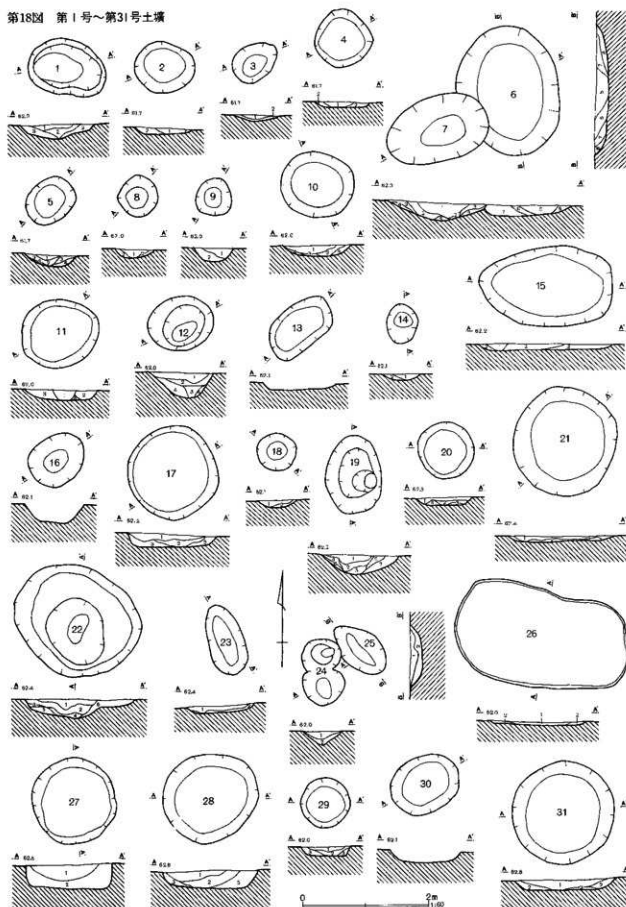
第4号住居跡に近接する、楕円、小規模な土壌である。墳底は一定せず、第1号の類型となろう。遺物は東山式無文と押型文系の土器が各1点と、削器が出土している。

5は東山式土器の胴部片であり、縦位の器面調整痕がわずかながら観察できる。また、6はホルンフェルス製の削器で、片面から最小限の形態・刃部調整のみを行なう。

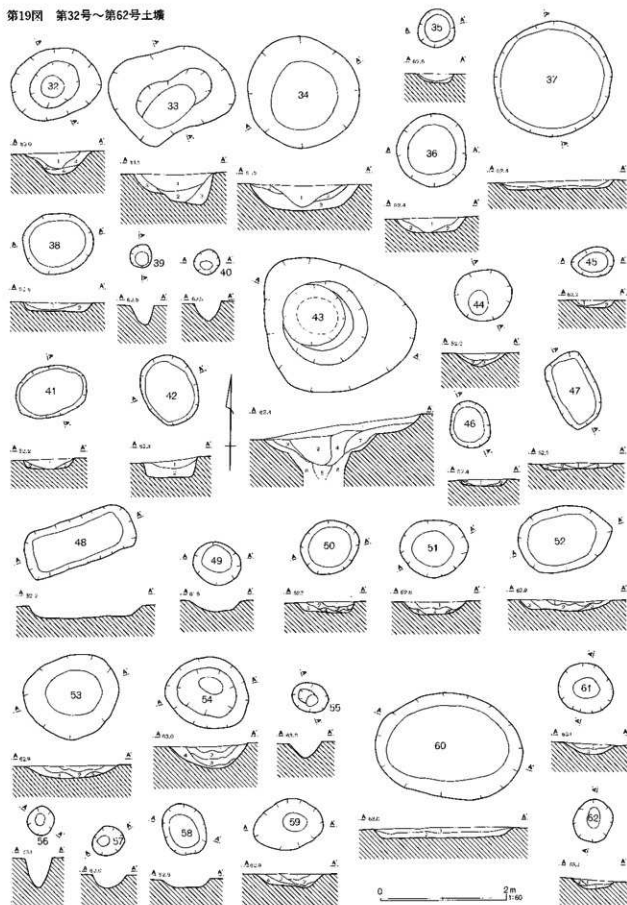
第22号土壌 (第18図・第21図7)

開口部は楕円、大方の特徴は第4号型に帰属する。しかし、墳底中央やや南にさらに一段の落ち込みがある。覆土の特徴は第1号などと同様の自然堆積で、有

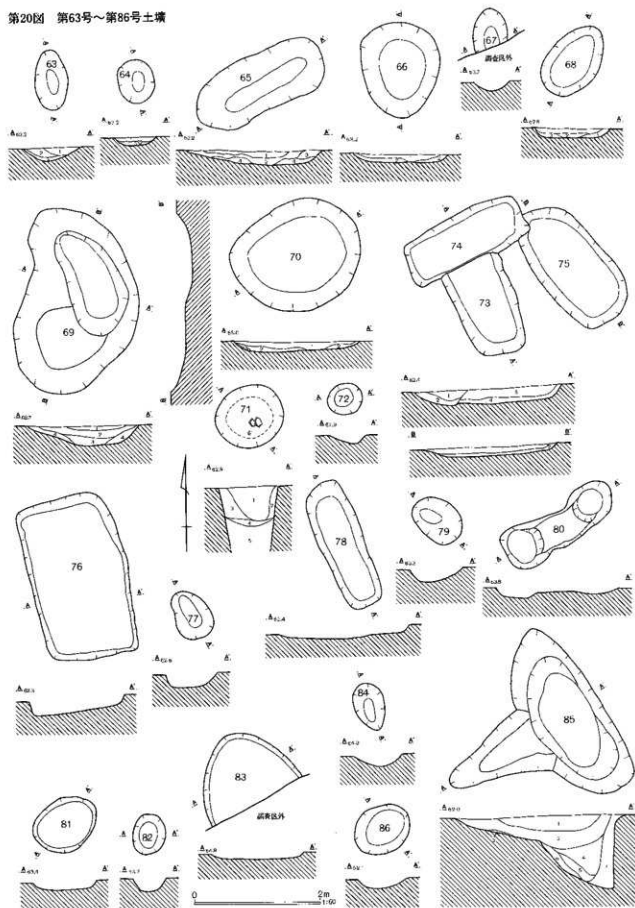
第18図 第1号～第31号土坑



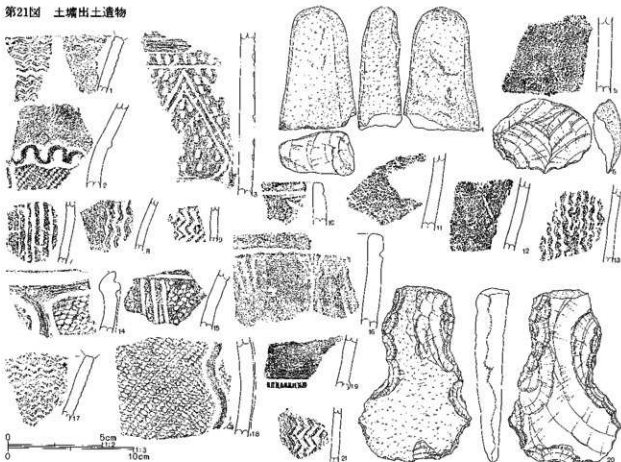
第19图 第32号~第62号土壕



第20図 第63号～第86号土坑



第21図 土壌出土遺物



段部に何らかの施設を設けた形跡はない。遺物は無文1、押型文系4、加曾利E系1の、計6点の土器と、2点のチャート製削片が出土している。

7は山形押型文土器であるが、原体印刻の手抜きが極まって、波状どころか、縦位線列と化している。破片割れ口は、磨り痕こそないものの、打割整形されたような痕跡があり、あるいは土製円盤として認定すべきかもしれない。

第25号土壌 (第18図)

ビット様の第24号と接する楕円小規模なもので、第6号住居跡に近接する。第24号との先後は判断がつかなかった。遺物は押型文系の無文土器が4点出土しているが、図示できるものはない。

第26号土壌 (第18図・第21図8・9)

第6号住居跡に接するように造営され、隅丸長方形土壌である。長軸が2.9mと、土壌としては大規模だが、検出面からの深さは5cmと、浅い。遺物は、押型文系

10点と加曾利E系1点の土器が出土している。

図示した2点は、いずれも山形押型文土器の胴部片である。8は、破片右に無文帯らしき部分がある。これが、意図されたものか否かは不明である。

第27号土壌 (第18図)

円形の開口部をもつのは第1号・第4号と共通するが、壁面は切り立ち、墳底は平坦である。所謂鍋底形で、第29号・第42号などが同類に属し、基本的な類型となる。覆土は第1号などと変化ない。遺物は出土しなかった。

第30号土壌 (第18図・第21図10・11)

4Eグリッドの、土壌が最も密集して分布する一帯で検出した。開口部の形態は楕円で、断面形は第4号と同類となる。

遺物は、東山式、押型文系、燃糸文系末葉の無文土器が、それぞれ1点ずつ出土している。

10は東山式口縁部片で、角頭状口縁部の直下に沈線

を施す。沈線を目安とした器形の屈曲はない。一方、11は胎土に石英・長石他の砂粒を大量に含み、斜位のケズリ調整痕を残す。第2号住居跡出土の14と同一個体とも思えるが、接合かなわなかった。

第33号土壌 (第19図・第21図12)

6 Cグリッドに位置し、第7号住居跡に隣接する。開口部は楕円に近い不整形で、緩やかに傾斜する壁面を経た墳底は一定しない。普遍的な類型から漏れる例外的なものとして、第67号などと共通する。出土遺物は無文東山式が1点、押型文系が4点、中期土器が2点出土している。

図示したのは東山式の胴部片で、器表はナデ調整が施されている。

第38号土壌 (第19図・第21図13)

第7号住居跡に近接し、開口部は楕円、断面形は第4号型と第27号型の中間相を示す。遺物は山形押型文土器が1点出土したにすぎない。

13がそれであるが、山形の稜線は丸みを帯び、波状文と化している。

第43号土壌 (第19図)

開口部の形態は不整形、緩やかな壁面から、中央部で急激に落ち込む。円筒に掘削された断面形は井戸のそれと酷似する。だが、一部の地山崩落層を除き、覆土は暗褐色系土の自然堆積が基本で、黒褐色が基調の井戸のそれとは一線を画せる。

下位は地山崩落の危険を感じたため、調査を断念した。だが、同じ墓き日にあった第71号とともに、井筒状の断面形を呈するものとして、形態的に一括できると思われる。遺物は出土しなかった。

第48号土壌 (第19図)

第1号溝と接するように存在し、軸方向も同溝と共通する。開口部は長方形を呈し、墳底は平坦で、覆土は黒褐色を基調とする。形態や覆土に通ずるものとして、第47号・第73号～第76号・第78号などをあげられる。遺物は出土していない。

本墳に象徴されるように、これらは第1号溝と位置や軸方向に有機的な関連が認められ、同期に共存して

いた可能性が強い。覆土や、溝の出土遺物から類推して、いずれも近世期に造営されたものと判断した。

第56号土壌 (第19図)

径50cm内外の円形で、柱穴様の断面形を示す。所謂小ビットと分類できるもので、正確には土壌と表現するべきではなかったかもしれない。開口部の円・楕円の別があるが、第55号・第57号と共通する。遺物は出土していない。

第65号土壌 (第20図・第21図14・15)

長楕円の平面形で、緩やかな傾斜をもって墳底に至る。他にはない型であるが、暗褐色系土を基調とする覆土は共通する。遺物は押型文系1点と加曾利E系2点が出土している。

図示した2点はいずれもキャリバー形土器で、15は連弧文土器の一部となる可能性もある。

第66号土壌 (第20図・第21図16)

楕円開口部と平坦な墳底をもつ。遺物は東山式1点が出土し、図示した。沈線施文の口縁部片で、沈線を目安とした器形の屈曲は意識されていない。

第71号土壌 (第20図・第21図17～20)

遺物の出土状況からして、唯一確信をもって時期判定に及べる土壌である。円形開口部から急激に落ちる断面形は第43号の下位と共通し、こちらも地山崩落の危険から下位の調査を断念した。

遺物は中央の中層より出土しており、土器は加曾利E系が17点と、最も多い。他には東山式2点、押型文系1点の土器と、打製石斧が1点出土している。

18・19は口縁無文の甕形土器と思われるが、前者の要素はキャリバー形土器にも多用される。また、20の打製石斧は、側縁を重点的に加工するだけで足りるよう、剥片素材を厳選している。

第83号土壌 (第20図・第21図21)

一部が調査区外にかかり、完掘かなわなかった。近世期の造営と思われるが、山形押型文土器1点を図示した。

(4) 集石 (第22～24図)

今回の調査では19基の集石を検出した。これらの多くは第4号から第6号住居跡を取り囲むように分布しており、第37図に示した礫の分布と一致する。

集石下の状況は、土壌をとまなうものと、集石面のみを終結するものがある。次で紹介する上原遺跡では、中期集石のすべてに土壌がともなっている。しかし、本遺跡の集石で、中期土器が出土しているのは第1号と第17号のみである。したがって、上原遺跡を基準に集石土壌の時代を限定することはできない。

また、両者は分布を隔てるわけでもなく、前記環状分布の一群をとってみても両者が共存するなど、明確な一線を引くことはできない。

集石の密度は、土壌の下層にまで及ぶもの、大石を敷きつめるもの、上層で終結するもの、あるいは疎密の差など、多様である。

集められた礫は、ほとんどがチャートであり、これにわずかな砂岩、閃緑岩、ホルンフェルス、頁岩などが混じる。すべてと表現しても良いほどに、それらは破碎した状態で、その約6割程度に被熱痕がある。

これらのなかで、礫数にまとまりのある数基で接合を試みた。しかし、接合を重ねて円礫化するものではなく、その場での受熱破碎を疑わせる結果となった。

出土遺物は少なく、直接に集石の造営期を判断するには躊躇する。しかし、早期中葉に形成されたと思われる環状礫群と符合する分布は、時期判定の有力な手がかりとなろう。このなかで、第17号は加曽利E系土器がまとまって出土しており、同期に造営期を求めることができよう。

なお、一部の、とくに土壌をとまなわない集石の認定は、周辺にそれ以上の集中を認めたり、範囲の限定に違和感がある。莫大な土器や礫の分布のなか、視覚的なまとまりを把握する過程で、戸惑いや誤認があったことを否定できない。

調査、そして整理の過程でも、これらの修正を試みたものの、報告時までに満足な結論に達することができなかった。お詫び申し上げます。

第1号集石 (第22図・第23図1)

3Fグリッドの、環状礫群とは隔絶した位置で検出した。下位に土壌をとまなう。集石は、少量の受熱ない破碎礫が中央上層で出土したのみである。これらの総重量は2.5kgであった。

遺物は、図示に満たない押型文系1点と、加曽利E系4点の土器が出土している。唯一図示可能だった1の礫器は、片面ながら四周より剥離加工を施す。加曽利E系が優勢な本墳だが、これは第40図382と同類に属し、早期のものと思われる。

第2号集石 (第22図・第23図2～24)

環状礫群東側のたぐい中で検出した。集石の範囲として認定したのは約2m径の円形だが、隣接する第6号をも交え、約6m規模で同密度の礫散布が広がっている。周辺をも含め、集石下位に土壌は存在しない。

集石材は、チャートが中心で、原石段階のものはほとんどない。だが、被熱率は相半ばし、受熱の有無で破碎率に変化はない。これらの重量は34kgである。

土器は、認定した範囲から、東山式31点、押型文系35点、捺糸文系未から沈線文系初頭にかけての無文土器が7点出土している。また、礫器など、石器製品が7点と剥片も3点検出できた。

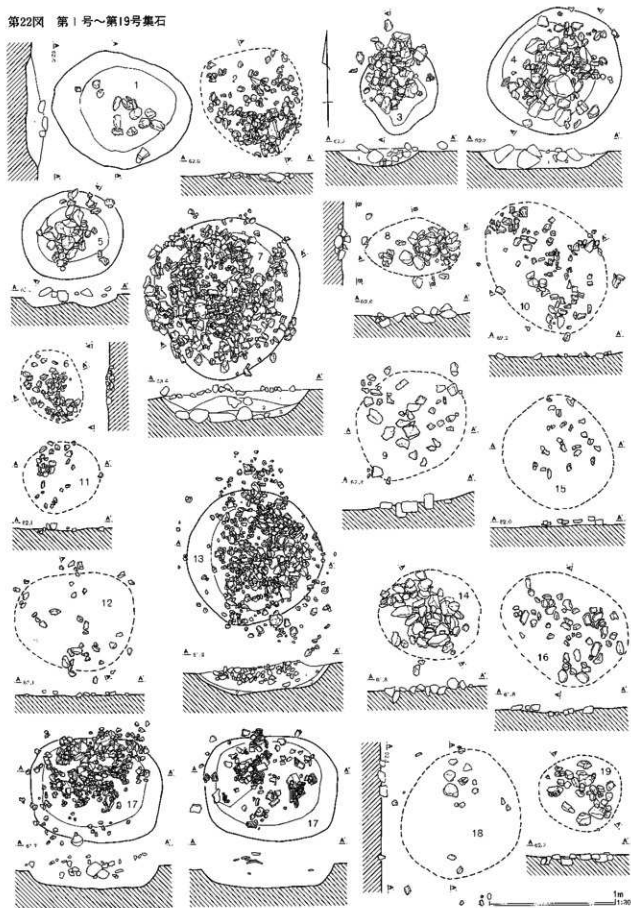
2～8は東山式無文土器として掲載した。2は、本遺跡西地区で唯一、口縁下に幅広の凹線を加えるものである。しかし、これを目安とした器形の屈曲は見られず、東地区出土の同類土器より後出的である。

9～12は同一個体で、2住の14ともその可能性があるが、接合できなかった。器厚は、外削の口唇に向かってやや外傾しつつ増す。胎土中の砂粒は細かく、器表は斜方向の調整痕が走る。その方法と視覚的印象は、表裏でかわらず、6住の45とは一線を画す。

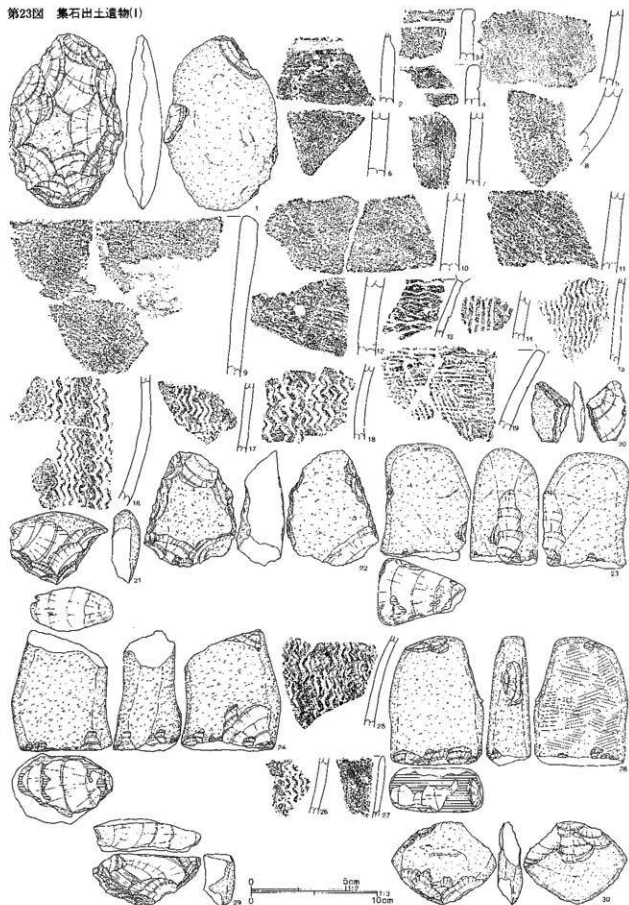
押型文系は13～19の7点を示した。18までは山形文だが、山形波長は大きく、15や14のように、波状や直線と化するものもある。対して、19は、捺糸原体不明を横斜に施文するもので、重複、雑な施文のため、いかなる構成が展開するのか判断がつかない。

一方、石器は5点を示した。20はチャート製の削器

第22図 第1号~第19号集石



第23図 集石出土遺物(1)



で、縦長一次剥片の側縁に細加工を施し、機能部としている。また、21・22は礫器、23・24はスタンプ形石器である。前者の握り部分は大きな形態差があるが、機能部はともに尖突である。

第3号集石 (第22図・第23図25～27)

第4号住居跡の南、環状礫群のただ中に位置している。下位に小規模な土壌をとまうが、集石はこの掘り込みからいくぶん飛び出している。この分布傾向は断面でも識別でき、断面A方向に間層がはいり、本来ならば、礫の分布に合わせて分層すべき状況だが、ちがいが識別できなかった。

集石材は、チャートの破砕礫で、受熱後が大半である。比較的大石が多く、総重量は30.3kgをはかる。

遺物は東山式1点と、押型文系12点の土器が出土した。このうち、山形型文土器1点のみを示した。

第4号集石 (第22図・第23図28)

第6号住居跡の南、環状礫群とともにある。下位に土壌をとまない、集石の範囲はこの掘り込みに合致する。覆土は暗褐色系土である。

集石材はチャートの原石が主体で、大きささまざまなものが集められている。受熱痕は多くの石に認められる。総重量は47.5kg。

遺物は、東山式と押型文系土器が1点ずつ出土しているが、図示できるものはない。また、石器類は図示したスタンプ形石器1点の出土であった。

28は磨石転用のものであり、平坦面の摩耗痕とともに、軸方向への剝離痕も多く見られる。

第5号集石 (第22図・第23図29)

環状礫群の範囲からは、ややはずれた位置に分布する。下位に土壌をとまうが、集石礫は墳底からは浮いた状態で出土している。

構成礫種は、10～15cmのチャートが主体で、被熱しているものの、破砕化したものは多くない。総重量は14.1kgであった。

遺物は東山式土器と礫器が1点ずつ出土した。29の平坦な頭部は欠損ではなく、意図された最終打撃で生じたものと思われる。

第7号集石 (第22図・第23図30)

礫群とはかけ離れ、調査区南端で確認した。下位に土壌をとまない、一部では墳底に10～15cm程度の大石の敷設が見られた。これに対し、上層では3～4cmの小石が敷きつめられた様に分布していた。

集石材はチャート主体で、一部煤が付着するものもある。しかし、矛盾するようだが、礫の大半は被熱していない。総重量は116kg。

遺物は、東山式土器と礫器が各1点出土した。30は表裏の対角上下で、同種の機能部を作出している。

第9号集石 (第22図・第24図31～33)

環状礫群とは離れた7Bグリッドで検出した。下部土壌はなく、10～15cmの原石類が散布する。被熱、破砕は少なく、認定範囲での礫重量は15.5kgである。

遺物はスタンプ形石器2点と石皿1点が出土した。31は、側縁に敲打痕残すが、これが下端まで及んでいる。通常の敲打は機能面の1cm程度上方で留められることより、機能面の再生をはかったことになる。

これに対し、33は、破損品ながら、本遺跡で数少ない凹部の残る石皿である。

第11号集石 (第22図・第24図34・35)

第6号住居跡の南に第10号・第12号などと集中分布し、環状礫群の一翼を構成する。しかし、3～7cmの破砕小礫が少数集まるにすぎない。被熱礫は少なく、認定範囲の礫の総重量は10.5kgであった。

遺物は、押型文系土器が6点出土しているにすぎない。図示した2点は、いずれも山形文を押捺しているが、34は下方に向かって疑い線が残っている。

第12号集石 (第22図・第24図36)

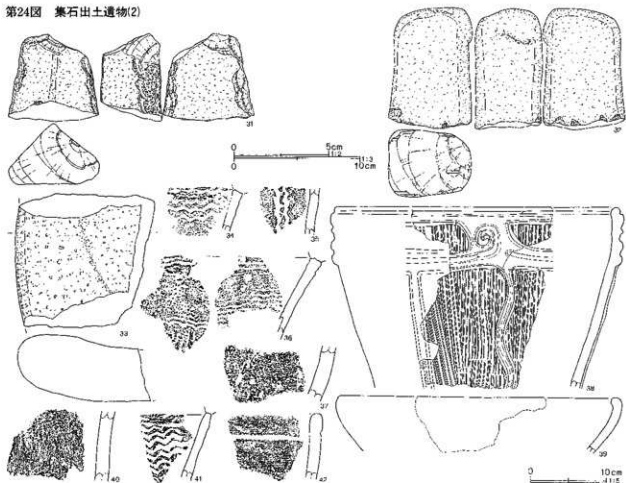
第11号とともに環状礫群を構成する。集石材は、受熱ない5cm内外の破砕礫が中心で、頁岩等、チャート以外の礫種も多い。認定範囲での礫重量は4kg。

遺物は、36の押型文系土器が1点出土した。

第13号集石 (第22図・第24図37)

第6号住居跡と重複するが、同住の想定床面はほぼ同レベルで先後の判定はできない。下位には土壌をとまうが、集石の散乱は周囲にも及ぶ。だが、これが

第24図 集石出土遺物(2)



6住との高低差を反映したのかも微妙である。

集石材は、チャートを中心に砂岩など雑多で、赤化被熱はあまりないが、炭化物の付着する礫がいくつかある。認定範囲での礫総重量は、68.9kgである。

遺物は、37の東山式無文胴部片が1点出土した。

第17号集石 (第22図・第24図38・39)

本遺跡で唯一中期の造営と断定できる集石で、下位に楕形の土壌をとまう。集石の垂直分布は中層までで、開口部の北側にも散乱は広がる。同所では、加曽利E系土器が散乱した状態で178点検出できた。

集石の礫種は、15cm以上のチャート原石と、5～10cmのチャート・砂岩破砕礫とに二人別できる。被熱は極端に少なく、出土礫の総重量は36.4kgであった。

38は条線地文のキャリバー形土器で、文様帯内の渦巻は弛緩せず、楕円文とのまじわりもない。胴部懸垂文は隆帯で描出される。39は非赤彩残鉢である。

第18号集石 (第22図・第24図40・41)

第5号集石と近接して発見した。下部土壌はなく、集石も少数が散乱する程度で、はたして集石と称するべきか判断に窮する。集石材は、5～10cmのチャート破砕礫で、認定範囲での礫総重量は3kgである。

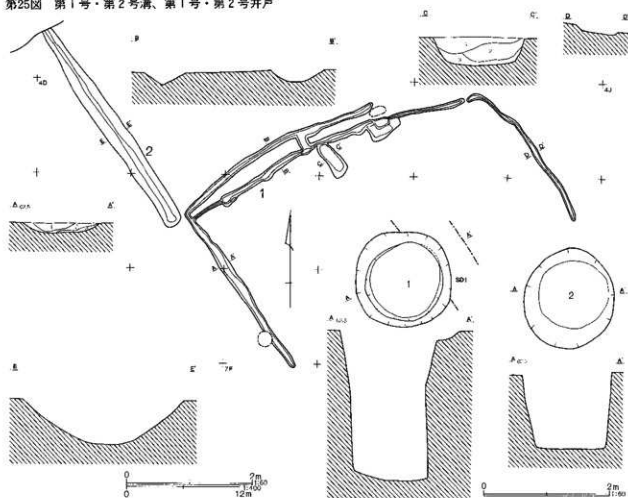
遺物は東山式1点と、押型文系2点の土器が出土している。

第19号集石 (第22図・第24図42)

第4号住居跡南で検出し、環状礫群の一翼を担う。下位に土壌はないが、5～7cmを中心とする破砕礫はよくまとまっている。石材は砂岩など雑多で、熱をあまり受けていない。礫総重量は5.4kg。

遺物は、東山式と押型文系土器が、それぞれ1点出土した。図示した前者の口縁下の沈線は、やや離れて巡る。だが、これを目安とする器形変化はない。

第25図 第1号・第2号溝、第1号・第2号井戸



(5) 溝 (第25図)

西調査区の中央で2条を検出・調査したが、両者は覆土の特徴や方向性をともにし、同時期に連携を保ちつつ造営されたものと思われる。そのため、ここでは一括して記載する。

両者とも、ゆるい傾斜を保ちつつ溝底に至る断面形を呈し、覆土はもっぱら黒褐色系土で満たされる。このなかにはローム地山のブロックや粒子が混入し、下層ほどにその量を増す。

このうち、第1号は北側で複数条に分化するが、それぞれが並行し、また、両者を連結する溝も加えられる。一部では途切れたり、土壌状の落ち込みとも重なり合う部分もある。

覆土などの特徴より、2条は近世期に土地区画等を意図して造営されたものと考えられる。

(6) 井戸 (第25図)

第1号は第1号溝と重複し、また、第2号は同溝に取り囲まれるような位置で検出した。覆土の断面観察より、第1号は溝より後出するものと判断した。

両者ともに開口部径は約1.5m、円筒の断面形を呈し、第1号は深さ2.4m、第2号は1.2mに達する。枠等の補助施設は存在しない。

至近には南小畔川の低地が広がっている。検出地との比高差からすれば、季節により水位さえ高ければ、第2号の深度でもある程度、取水の用途を達せられると思われる。しかし、下部に、湧水や取水に際しての壁面の崩落や、沈殿物の堆積層などがなく、実際に供されたかどうか疑問である。

(7) 遺構外 (第26~44図)

土器 (第26~35図)

今回の調査では、遺構内外より、総計3,528点の縄文土器を検出した。そして、そのうち3,433点が西地区より出土している。前頁までで示したとおり、主体は縄文時代早期中葉の撚糸文系末期の所産と押型文系である。

遺構出土の記載では、時々に応じ、製作期などを個別にあげた。だが、多くの拓影資料を効率よく扱うためには、さらに細かい分類が必要である。そこで、ここでは、以下に示した分類を用いることとする。

また、東地区で出土した土器・石器等については、章末に別項を設けて別に説明を加えた。

第Ⅰ群土器 隆起線文系

第Ⅱ群土器 撚糸文系 (所謂東山式周辺)

第1類 口縁下凹線

第2類 口縁下沈線

第3類 無文

第4類 胴部

第Ⅲ群土器 撚糸文系末から沈線文系初頭

第1類 無文(1)

第2類 無文(2)

第3類 沈線文

第4類 凹線文

第Ⅳ群土器 押型文系

第1類 山形押型文と沈線

第2類 山形押型文

第3類 その他の押型文

第4類 縄文

第5類 撚糸文

第6類 特殊縄文

第7類 無文

第Ⅴ群土器 条痕文系

第Ⅵ群土器 竹管文系

第Ⅶ群土器 勝坂系

第Ⅷ群土器 加曾利E系

さて、これらの分布状況だが、検出できた遺構の集中傾向と同じく、多くは調査区の北西に片よって出土している。

第26図には石器や礫をも含めた出土物全体の分布を示した。最も集中するのは、第7号と第5号住居跡を結ぶ線を長軸とする楕円形の範囲である。

当然のことながら、この分布は調査区外の北方まで伸びる気配を見せている。だが、第6号住居跡の北には空白がある。これは、南小畔川に落ちる斜面で包含層が流出してしまったものと考えられる。

一方、楕円集中以外の地区では、分布は薄まりつつも、南にも伸張している。その方向は、楕円と同じ軸線上にある。そのなかで、密度が高い箇所は集石のあらわれており、土器は散漫に分布している。

それでもなお、礫を含む出土物の分布は、10Cグリッド付近を限界に途切れてしまう。また、グリッドG列以東は、東地区に至るまで、ほとんど遺物は発見できなかった。

本遺跡の主体である縄文早期中葉の土器群も、若干の変動はあるものの、およその傾向をとにする。第28図には、第Ⅱ群から第Ⅳ群の分布を示した。

このうち、第Ⅱ群は、今回の調査で検出・分類した8群のうち、最も広範に分布する一群である。前述したグリッド第6列以南の拡散は、ほとんどが本群の仕事である。

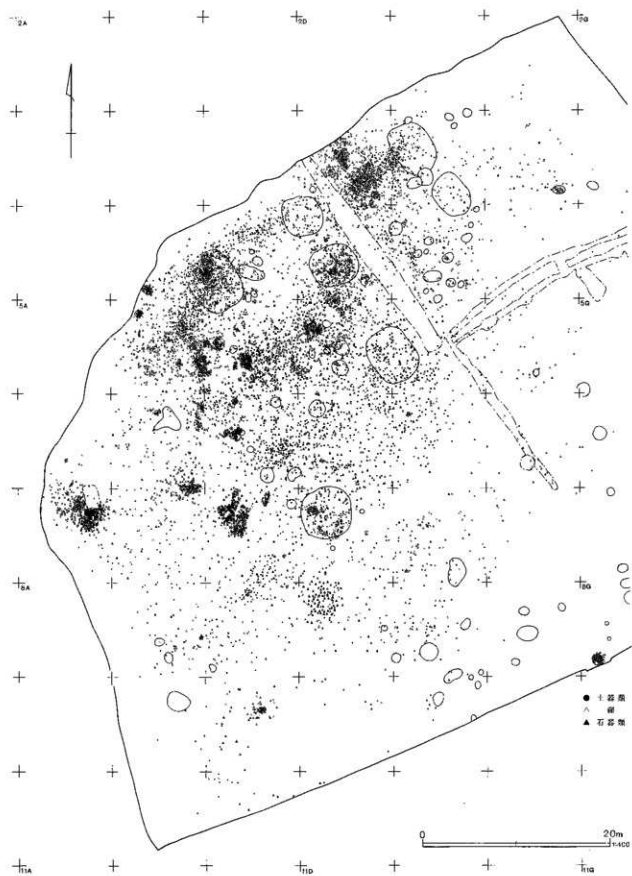
だが、東地区に集中する第1類は別として、第2類と第3類、あるいは、第2類内における口唇部形態の変化や沈線の施文位置による検討でも、群内での、これといった傾向は見いだせなかった。

これに対し、第Ⅲ群の分布範囲は、グリッド第6列以北の楕円集中地区の範囲に納まる。なかでも、4E杭周辺の一帯と、4Cから6Cグリッドを中心とする一帯とで集中の核を大きく二分できる。

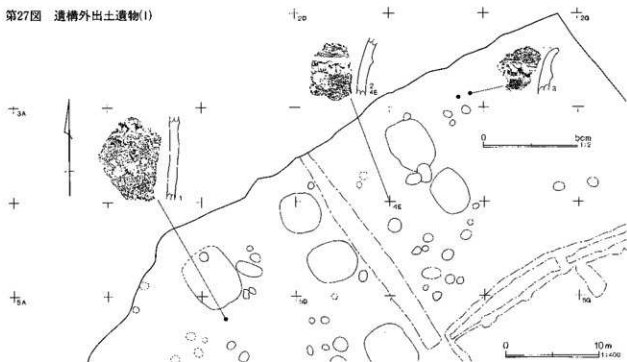
前者からは第2類無文土器が出土している。これは、第2号住居跡14と第2号集石9~12とも合わせ、同一個体の可能性が強い一群である。

対して、後者よりは第1類、第3類、第4類が出土

第26図 西地区遺物分布全体図



第27図 遺構外出土遺物(1)



している。このなかで、第4類が第6号住居跡とその周辺に多く分布する傾向がある。また、第3類はそれよりやや南の5C・Dグリッド、そして、第1類はまんべんなく出土している。

一方、第IV群は、第III群と同じく、大方がグリッド第6列以北の南門集中地区の範囲に納まる。だが、類別で際立った集中や片よりは、同一個体に起因する第4類が4・5Dグリッドに集中する他は、認められない。また、最も出土量が豊富な第2類の、構成法や胎土の変化による検討でも、これといった傾向は見いだせなかった。

ただし、同じ地区に分布をのびた第II群北半分との関係は、多くで重複するものの、5Dグリッド中央では第II群が極少であるのに対し、5・6Eグリッドではこれが逆転するなど、第6列以南の大局だけでなく、細かな箇所でも分布の食い違いがある。

これら早期土器の接合作業は、同一個体にもかかわらず、接合かなわぬ破片がいくつも残る状態で、かんばしい結果は得られなかった。当然ながら、接合関係から得られた傾向はない。

そのなかで、第II群で27m、第IV群で23mの距離間

で接合し得た例があったことが、廃業後の土器がどれだけ移動したかを怪測させる。これは、前述の、本遺跡における分布傾向の把握に対する信憑性にも関わる問題である。

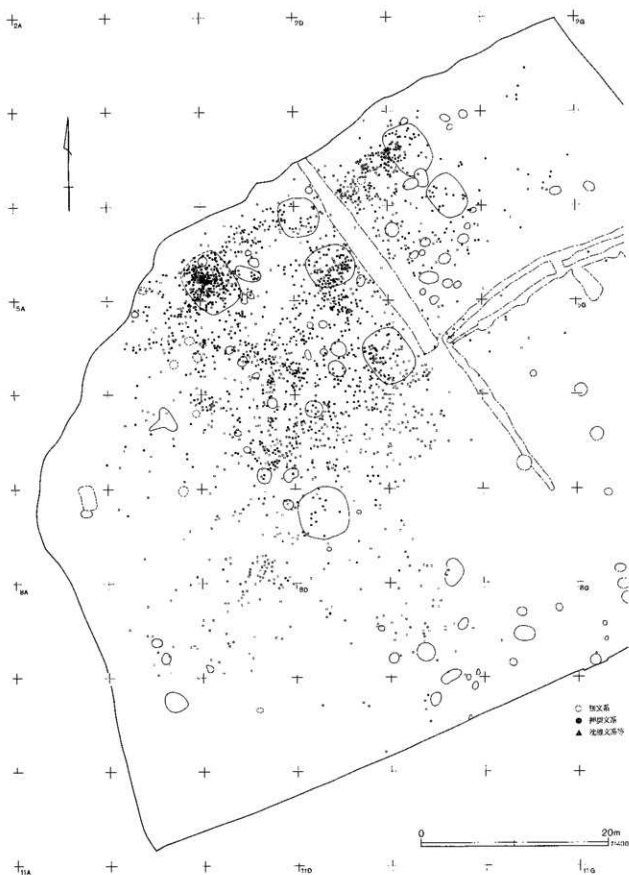
試しに、特殊な構成であるがために、接合かなわなくとも、個体識別に信頼性がおける第IV群1類を例にとれば、4E、5B・C・D・E、6C・D、8Eグリッドにまたがる広範囲で検出されている。

同様に、細かな山形斜型文と雲母の混入が特徴的な第3号住居跡15は、ほかに第6号住居跡や4C、5Bグリッドでも出土した。

第III群2類のように、遺物の近接集中が同一個体を指し示す半面、同一個体なればこそ、遺物の流動性を証明する。この両面性が同居することが、本遺跡における早期中葉土器の分布傾向を象徴している。

一方、第V群以下は、分布図を用意していないが、第VIII群が第7号住居跡と第17号集石の周辺に際立つきざしがある。また、他群も、少数ながら、いくつかの傾向が指摘できる。こちらは、各群の記載中に合わせて紹介する。

第28図 縄文時代早期中葉土器分布



第Ⅰ群土器（1～3）

草創期の微隆起線土器を本群とした。遺構外より4点が出土している。分布云々の資料数ではないが、強い傾向を表現するならば、それらは調査区北の、南小坪川に面する斜面部に片よる。しかし、集中しているわけではなく、東西で出土した1と3の距離は直線で36mと、隔たりは大きい。

4点のうち、2Eで出土した1点は、微隆起こそないものの、器厚や器面調整、あるいは色調や胎土などの面から本群に属すると思われる。しかし、風化による器表の剥落が著しく、拓影として図示することかなかった。

器面の凹凸や器厚など、拓影から受ける印象は、押型文系と非常に近いものがある。しかし、押型土器の胎上に見られる、テクルようなぬめりはなく、微砂粒を含み、ややザラつきがある。また、2・3では細かな横ナデ痕も観察できる。

ところが、一般的な特徴は共通するものの、さらに詳しく4点を見れば、器面調整や色調に細かな差異が認められ、これらが別個体であることがわかる。

1～3は、いずれも幅2mmで断面が三角形の微隆起帯を横位に貼付する。さらに、定着にあたり、その上下方向から鋭利な工具で刻み込むように粘土紐をズラすため、結果として微隆起が波打ち、文様効果を増幅させる。

3点ともに、遺存部分での微隆起帯は単数線ではない。そのため、単位構成あたりの微隆起の本数や、縦位線の有無などは不明である。しかし、2の破片上方では、極くわずかではあるが、微隆起に追加される刻みらしき痕跡が観察でき、線間の幅を推測することができる。

3は口縁部、2は極く近い部位と思われ、いずれも口端に向かい外反を強め、3では器厚を減じて尖頭状の口唇部に至る。口唇の残存する部分は極くわずかであるが、微隆起に呼応するような小波状押圧などの加工は認められない。

第Ⅱ群土器（4～103）

撫糸文系後半の無文化した一群、所謂東山式と、その直前段階にあたると思われる土器を本群とした。東山式の唯一ともいえる文様要素である口縁下の沈線や器形屈曲の有無によって三類、さらに胴部を一括して一類を設けた。

第1類

口縁下に幅広の凹線を巡らしたり、器形の屈曲によって凹線様の効果を出す手法を残す部類を一括して本類とした。

だが、西地区の遺構外よりは出土していない。器形曲線の変化の有無は不明だが、明らかな凹線を施したものが第2号集石から出土している。

また、東地区では、器形曲線の屈折を利用して凹線部を造り出す、単純凹線施文にくらべ、より古相にあたる種類が出土している。

第2類（4～52）

口縁の直下に幅2～3mm程度の単沈線を巡らすものを一括した。接合済みで、遺構内外から150点が出土した。うち129点が遺構外よりのものである。

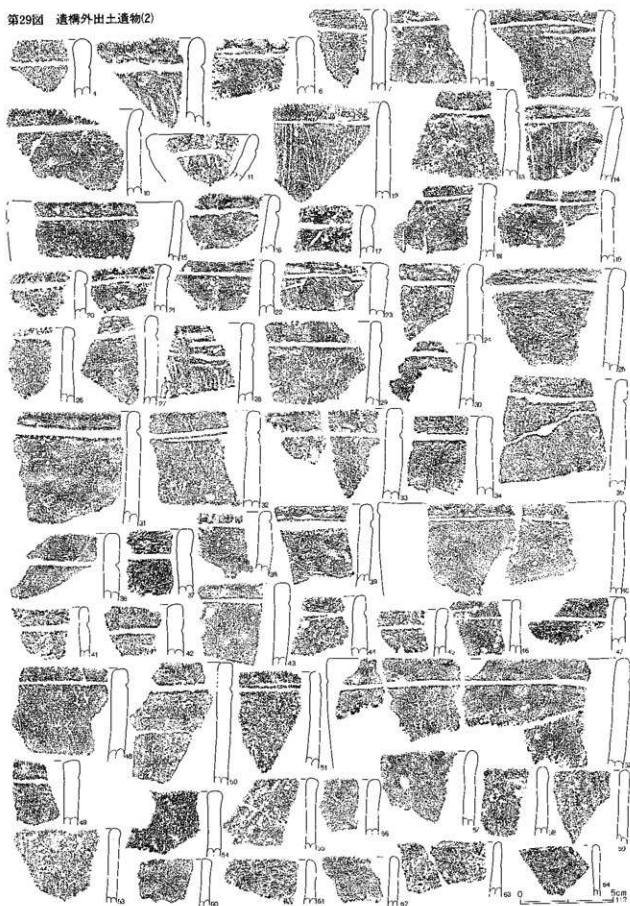
器形の全容を推し量れるものではなく、口縁部が接合し得た4点が、口径を示唆するにすぎない。また、逆に、多様な口縁部片は、はからずも、個体数の多さを示すこととなった。接合が進んだことで、出土個体数の少なさが判明した第Ⅲ群とは好対照である。

4から52までの48点を図示したが、これらは、単純な文様要素ながらも、例えば、口唇部形態や沈線の位置などの属性に着目し、さらなる分類も可能であるかもしれない。

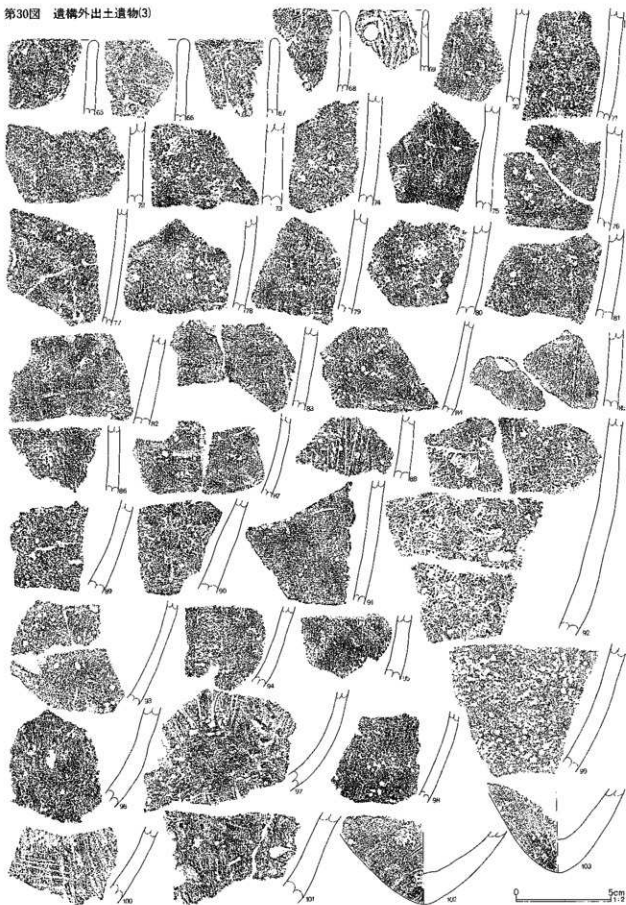
しかし、口唇部は口頭から外割きまで、あるいは沈線は口縁下3mmから15mmまで、その形態的組列は両極を間断なく結ぶ。そこに客観性を持ち込むのは困難と判断した。そのため、ここではすべてを一括して記載を進めていく。

これらの口縁部は、11のミニチュア品を除き、ほとんどが直立している。また、口唇部の形態は、円から角頭へと変化するよう拓影を配列した。このなかで、

第29図 遺構外出土遺物(2)



第30图 遗構外出土遺物(3)



17は、わずかだが、器形の屈曲を沈線に利用するための内湾がみられ、口唇部の成形は折り返し技法を用いている。

同じような技法が観察できるものに、5と25などがあり、沈線を目安とした口縁部帯の広狭によらず、前代の技法が生かされていることがわかる。また、10・31・39を含め、この技法が観察できるものに幅の広い沈線が施されている傾向も看取できる。

しかし、技法が観察できない50や52も、幅広の沈線と広い口縁部帯を擁しており、この傾向で単純に律し得ない技法の潜在継承をものかたっている。

反面、20や21など、極端に口縁部帯の幅が狭いものに関しては、折り返し技法が判別できるものは皆無である。5や16など、沈線施文後にもう一度口唇外面に粘土追加を施した痕跡が残る例も考え合わせれば、沈線が、器形屈曲と連動した折り返し技法にともなう口縁下の見映えを取りつこうために発生し、次第に平板な痕跡器官と化しつつ、口縁部を狭めていく方向性が本遺跡でも迫れるだろう。

沈線は、すべてが1本引きで、拓影上で2本が観察できるものは施文の始終が取りつこうえなかった部分のあらわれである。また、12・14・28などに残る縦位擦痕は器面調整痕であり、文様効果をてらったものかは疑わしい。

胎土は、細砂粒と、まれに雲母片を含み、50など、一部の個体では、中期土器と見まがうばかりの、化粧がけの後に器面を撫で込んだような、滑沢を残す。

第3類 (53-69)

口縁下に凹線や沈線などの加飾が施されない無文の口縁部片を一括した。接合済みの破片数で、遺構内外から25点が出土した。遺構外よりは、このうち23点が検出できた。

拓影には15点を示したが、口縁部は直立し、口唇部の形態は第2類にならいつつも、円頭やや肥厚する型に集中する傾向がある。

このなかで、63・64・69などは、器壁極端に薄く、肥厚もみられない。角頭状の口唇と口縁部の外傾、そ

して、胎土に第IV群特有の粘質感を欠くことにより本群に含めたが、あるいは同群に所属する個体であるかもしれない。

第4類 (70-103)

第1類から第3類の胴部から底部にあたる破片を一括した。接合済みの破片数で、遺構内外から1,007点を検出した。このうち823点が遺構外より出土したものである。

拓影として34点を示したが、これらの多くでは胎土に微細な砂粒をもっぱら混和しており、同じ器厚であったとしても、石英や長石が多く含まれる第III群無文土器との弁別は可能である。

ところが、73や92などの黒雲母含む一層料は、石英・長石の大粒や、ケズリ調整こそ見られないものの、固く焼き締まり、第III群の質感に酷似している。また、器厚も本群のなかでは突出している。

これらは、同様の胎土を擁する102の尖底形態を模り所として本群に含めたが、あるいは、両群の狭間に位置づけられる個体なのかもしれない。

その102と、103は尖底部片であるが、いずれも、やや丸味をもって体部へと移行しており、前者の器形曲線は、丸底に近い。

なお、99などに見られる器表面の多孔痕は、風化による器面の剥落であり、ケズリ痕ではない。

第III群土器 (104-117)

惣糸文系最終末の、所謂平坂式に類似する無文土器や最初期の沈線文系にあたると思われる無文土器、そして沈線文や凹線文が施文される土器などを一括して本群とした。

これらに共通するのは、胎土に石英や長石粒を多く混和し、ケズリ法によって器面調整を進める技法である。無文土器の表裏における器面の調整手法の差によって二類、有文土器のなかで、描かれた横位線の広狭で二類の計四類を設けた。

第1類 (104・108-110)

無文土器のなかで、表裏の器面調整法を異にするものを本類とした。

実は、整理作業当初の分類・抽出にあたっては、本群の第1類と第2類を分離して把握しようとする意識に欠けていた。そのため、両類の接合後破片数を一括して算定してしまった。

しかし、早期土器の分布傾向で前述したように、第2類は、4E杭周辺から第2号住居跡付近に分布が限られており、特定できる破片を差し引いた100点ほどが本類の出土量ということになる。

拓影図では4点を示したが、すべて胎土に多くの石英や長石を含み、110では若干の雲母も混和されている。器表は、これらを引きするように大略斜位のケズリ調整がなされる。結果、器面に固く多孔質な視覚的效果をもたらすことになる。

逆に、内面は多孔質を避けるかのように、大きな砂粒をも丁寧に撫でつけて、起伏をなくしている。表裏の調整は、明らかに意図的な使い分けによっており、胎土の粗砂粒も、ケズリの効果を増幅させんがために見つくりわれていることになる。

第2類 (105~107)

無文土器のなかで、表裏の器面調整法に意図的な変化を求めないものを本類とした。しかし、第1類と同様、具体的な破片数を示し得ない。4E杭周辺を中心として、およそ35点前後が本類となろう。

106と107は、第2号住居跡14や第2号集石9~12とも合わせ、同一個体の可能性が強い。口唇部の形態的特徴は外削ぎで、第1類の104と変化ない。

だが、胎土には第1類のような粗砂粒は含まれず、結果として、大略斜位のケズリ調整は目立つことがない。裏面も同様な調整で終始しており、調整に対する恣意的な思いこみはない。

一方、105は、胎土や質感、器厚は本群として分類できるものの、第1類には程遠く、第2類としても違和感が強い。7B出土で、本群の他の土器とは掛け離れた位置で出土している。内面は荒れており、他とくらべ細粉の混和が多い。

第3類 (111~114)

横位線を器面全面に巡らせるもののうち、これを幅

3mm程度のしっかりとした沈線で賄うものである。接合済みの破片数で、遺構内外から7点が出土した。

図示した4点は、胎土や文様から大きく二個体に別けられる。111と113は、やや斜位方向に沈線を反転させ、ゆるい鋸歯状を作出する。これを画する縦位線は見られず、沈線は1本引きである。口唇部の形態は外削ぎで、器形はほぼ直立外傾する。

これに対し、112は、変化なく横位の沈線を巡らすものである。111に比べ沈線間隔が広く、施文も深い。施文工程は短横位線を上下に並列させて器面を移動する。その点では111と変化ない。

114は、沈線の特徴から、112の底部と思われる。尖底処理のため、沈線は縦位に変化している。どの部位で縦横が差しかわるのかは不明である。

以上、4点ともに、胎土は、石英や長石を含み、ケズリ調整も行なう。しかし、これらは、器表の質感を大きく左右するものではない。また、沈線以外の表面と、内面との差異も意図されていない。これは、第2類と共通する手法である。

第4類 (115~117)

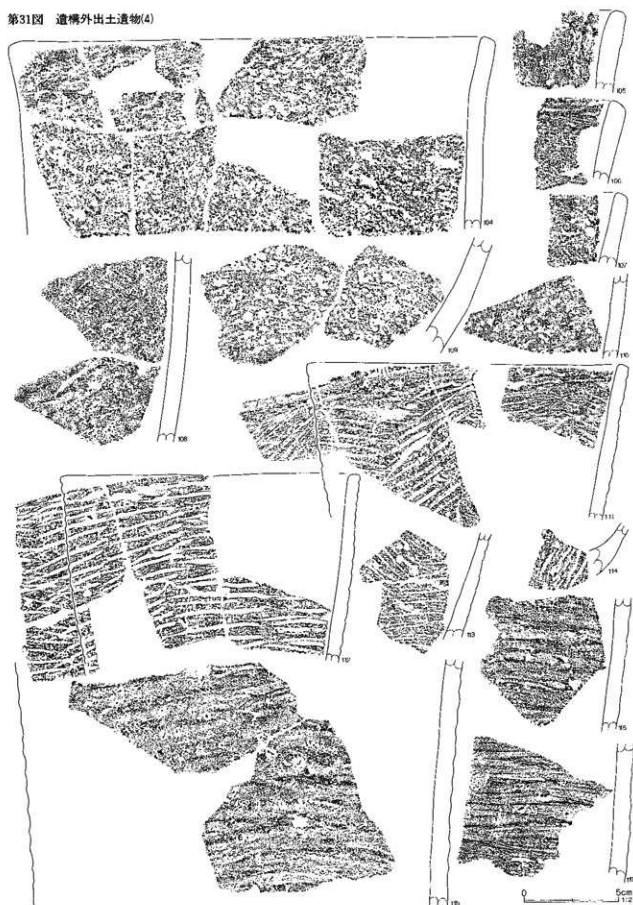
横位線を器面全面に巡らせるもののうち、これを幅1cm程度の浅い凹線で賄うものである。接合済みで遺構内外から6点が出土した。第6号住居跡47・48を含め、すべて同一個体と思われる。

凹線は際立った稜線を残すわけでもなく、条も一定しない。重複や離散を繰り返したあげく、結果として、稜線はますます識別に難しくなり、線文様としての効果は薄れてしまっている。

胎土は、石英や長石の大粒を含み、器表では、凹線施文に際してこれらが移動した痕跡が明瞭に残る。これに対し、内面では砂粒の突出が撫で付けるような調整で覆い隠されている。

この表裏の差異は、表面の視覚的效果こそあれ、第1類の手法と共通する。凹線の施文は、器表におけるケズリ調整と質感の作出をあわせて目論んだものと理解できよう。

第31圖 遺構外出土遺物(4)



第IV群土器 (118~281)

押型文系土器を本群とした。山形、格子などの押型文様要素で三類、縄文の原体種によって三類、さらに無文を一括して一類の計七類を設けた。

第1類 (118)

山形押型文と沈線文を併用する類である。遺構外から接合済みで9点が出土したが、すべて同一個体であったため、一括して器形を復元した。

沈線は、現存で二段にわたる横位山形文の間に、充填施文されている。ここは、本来ならば無文帯で残される部分である。複数線が単位となって鋸歯状を成しているが、すべてが1本引きで、半截竹管状の工具は使用されていない。

鋸歯状の沈線帯は、下段の横位山形文帯のさらに下にも観察できる。しかし、以下に、もう一段の横位押型帯が配されるのか、あるいは、縦位施文帯が直接に連なるのか、はたまた、無文として処理されるのかは判断がつかない。

本類は、本群が保持する構成法のなかでも異質な部類だが、山形文の原体製作や、片岩質砂粒を多く含む胎土の特徴は、第2類にあたる普遍的な山形押型文土器と変えない。

第2類 (119~252)

山形文のみで文様を構成するものである。遺構内外から771点が出土し、本群での圧倒的多数を占める。うち、419点が遺構外より出土している。

とはいうものの、運よく図化し得た資料でさえも小破片が多く、文様構成や原体の長さ、あるいは山形文の波長や口唇部の形態などによる細かな分類は、なし得なかった。

もちろん、器形の全容を知り得る個体は出土せず、乳頭状の底部を類推できる資料も、遺構内より2点が出土したにすぎない。観察資料の足りる唯一の部位である口縁部は、外傾かつ外反するものが大半で、142のような直立するものはまれである。

口唇部の形態は角頭状が基本である。とくに、外反器形で注意が喚起されたのか、口唇上は、大方で独自

の施文が追加されている。これがまた、口唇部の角頭化を助長している節もある。さらに、同じような効果が内面にもおよび、約半数の個体では内面での施文が観察できた。

これに対し、器表の構成は、押型が喉位に押捺されたものではなく、基本的には上方の横位と下方の縦位が構成の2類型となる。そしてさらに、その組み合わせによっていくつかの変化型がある。

口縁下に、無文帯を介在させた複段の横位帯を設定するものは、119・120・145・146などで存在が確認できるのみで、現存する破片はない。

また、下位の縦位施文帯でも無文部の設定を断定できるものはない。わずかに、159~167がその可能性をもつが、そもそも、横断面円形の器物に固い彫刻物を回転押捺するのだから、原体端は施文が途切れがちになりやすい。

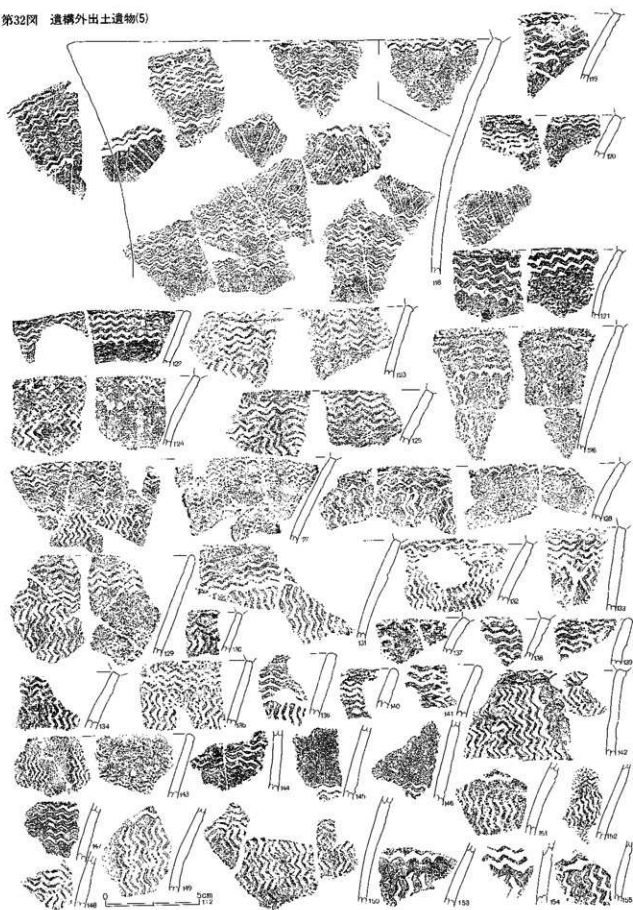
横位施文帯は、口縁直下に1帯のみが設定されるものが多い。だが、128のように、原体端の一部を押捺した程度が多く、縦位施文が横位帯にまで進出するもの(125)、省略が極まり、横位帯を失ってしまうもの(142)などもある。

これに残る山形の波長は8~10mmが最も多く、6mm以下となる245のようなものは極めて少ない。施文(原体への印刻)は浅く、山の稜線は丸みを帯びるものが一般的である。なかには、250~252のように、波状が極まって直線化してしまうものもあり、押型表現の退行がめだつ。

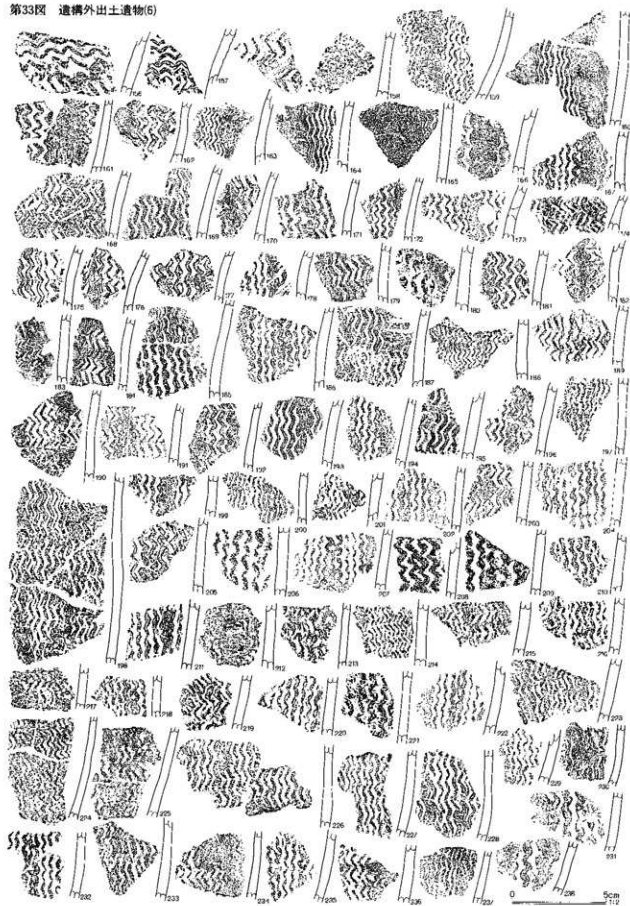
胎土は、滑石様の白色粒子が多く含まれる個体と、片岩を含む個体が目立つ。両者は相容れないが、いずれも2mmに達する小礫も含まれる点で共通する。にもかかわらず、肉眼観察時の砂質感はなく、むしろ、本遺跡出土の他群土器に比して粘質感に秀でているところに他類を含めた本群の最大の特徴がある。

器壁は薄く、疑口縁の残る破片が多くあり、上方粘土の剥落下に前段階成形時の施文痕が現れた例がいくつもあった。

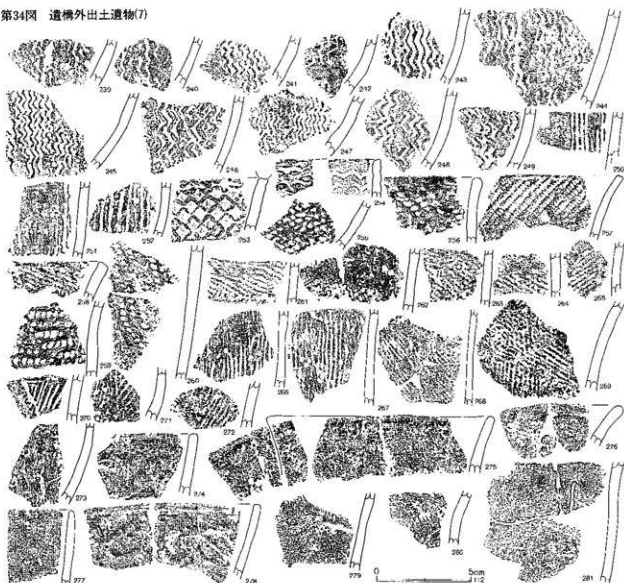
第32図 遺構外出土遺物(5)



第33图 這構外出土遺物(6)



第34図 遺構外出土遺物(7)



第3類 (253~255)

山形文以外の押型要素が押捺されるものを本類とした。第2類に比して極端に少なく、遺構外から3点が出土したにすぎない。

拓影ではそのすべてを示したが、253は波長の短い山形を連接させた原体を印刻し、格子目様の効果をもくろんだものである。

また、254は崩れた柵目文のようだが、内面には山形文が施文されており、あるいは、同原体の重複施文によって柵目効果を出しているものかもしれない。そして、255は、所謂ネガティブ文と思われるが、原体を印刻する手際が悪く、波長が一致しない。

第4類 (256~265)

押型文系土器の属性をもつが、器表に縄文が施文されるものである。遺構内より5点と、遺構外から33点の計38点が出土した。

原体はすべて単節だと思われるが、264や265は、風化著しく、あるいは無節原体を使用したのかもしれない。また、257は整然とした0段多条原体を施文している。施文位は、大方が横位を基本としている。

逆に、255・259・260は、粗い原体を使用し、施文方向も一定しない。口唇部は円頭やや外傾し、撫糸文系の形態的特徴に近い。しかし、器厚薄く、胎土に片岩含むなど、質感は押型文系そのものである。

第5類 (266~272)

押型文系土器の属性をもつが、器表に捺系文が施文されるものである。遺構内外から15点が出土したが、このうち9点が遺構外よりである。

風化のために原体観察が不可能な269・271を除き、捺系Rが施文されている。だが、同一個体である266と267以外は、施文方向が一定せず、重複して押捺されている。

また、266と267は、整然とした施文より、捺系文系に属するともとれる。しかし、267の破片上端は、成形接合粘土の剥落下に前段階の施文が現れる。このような成形法は、押型文系で一般的であるが、捺系文系では存在しない。

第6類 (273)

押型文系の胎土や質感、さらに形態的特徴を保持しつつ、第5類や第6類に相当しない特殊な縄文施文手法を用いるものである。発見できたのは273の1点にすぎない。

施文手法は、基本的には絡条体の同転である。しかし、圧痕は通常の捺系文のように密には現れず、結節部の回転痕に類似した疎らな痕跡が縦位に連なる。絡げた縄はRの2本単位で、圧痕の末端は重なり合い、そして消滅する。

管状軸の中空部に縄を縦込んだり、多軸絡条体の手法を用いれば、このような圧痕を得られるが、詳細は復元できなかった。

第7類 (274~281)

無文であるものを一括した。遺構内外から415点が出土したが、このうち291点が遺構外よりの出土である。しかし、この中には、小片があるがゆえに文様が確認できず、結果的にこの類に含めて考えざるをえなかったものもある。

拓影では確実性のあるもの8点を示したが、押型文系の胎土や質感と変化する。276は、やや円頭気味の口唇部形態をとるが、極端に外傾する器形や質感は押型文系の特徴を保持する。

第V群上器 (282~285)

早期後半の条線文系土器を本群とした。遺構外より9点が出土しているが、口縁部文様要素の観察できる破片はなく、詳しい所属期は不明である。

282~285は、いずれも器面調整のみの破片で、282は捺痕、他は条痕を残す。

いささか主観的だが、条痕の浅い施文圧、厚く一定しない器厚、大量に残る纖維底、ぬめるような胎土の質感などを考え合わせると、茅山下層期からそれ以降の所産である可能性が強い。

第V群上器 (286~291)

竹筭文系土器を本群としたが、諸磯b初頭と、諸磯c期の所産とに大別できる。

前者は、10Cグリッドを中心として7点が出土しており、図示した286の他に、第7号住居跡で混在した同6がある。いずれも、爪形文土器の口縁部文様帯部である。

一方、後者は4B・5Bグリッドにまたがって多く出土しており、26点のうち5点を図示した。287は条線を地文として短貼付文を加える。288~291は条線のみで器面を飾る構成であり、288では口縁下の横位区画条線も残る。

第VII群上器 (292~295)

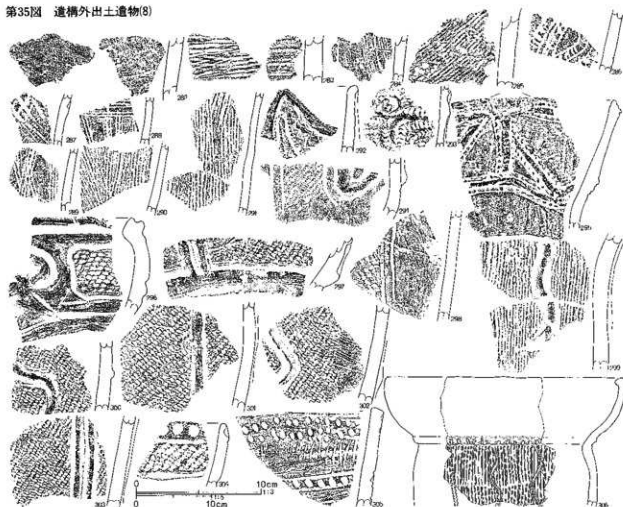
勝坂・阿万台系の土器群を一括した。西地区遺構外よりは20点が出土している。分布は4E・8C付近にいくつかまとまるが、総片数の少ない状況では、これが普遍化できるのか判断がつかない。

拓影は4点を示したが、いずれも詳しい構成を想定できない。292は口縁突起部だが、以下にどのような構成が展開するのか見当がつかない。

また、293は、爪形文と三角押文で降帯の脇を処理する楕円の区画が残る。この手法から、口縁部文様帯土器の胴部であると検定できる。

一方、294は、前前段で反捲りした視覚的な単節縄文と、垂下する降帯が閉じることによって、第VIII群ではなく、本群に属することが察せられる。しかし、詳しい構成は不明である。

第35図 遺構外出土遺物(8)



そして、295の降帯は、竹管を用いた並列刺突によって定着されている。これは、阿玉台Ⅱ式の典型的手法であり、同式の影響下に製作された個体であると思われる。

これらは、勝坂・阿玉台系のなかでも、幕内期の所産と思われる。

第Ⅷ群土器 (296～306)

加曾利E系と、これに並行して製作された各系の土器を一括した。第Ⅴ群以降では最も多く、遺構内外から784点が出土している。

拓影・実測図で11点を示したが、296～303はキャリパー形土器に相当するだろう。296の口縁部文様帯内にみる降帯は比較的平坦で、降帯優先から沈線優先の描出手法への移行過程にある。

300～303の胴部片は、縄文地に降帯の蛇行線等を加

えるが、断面三角やかまぼこ状などさまざまで、同一個体はない。口縁下に刺突列をもつ304は、降帯で楕円区画を成しているようだが、周囲の展開は判然としな

い。一方、305は、横位に巡る沈線区画の刺突列から、直線に開口する連弧土器と思われるが、詳しい構成が判断できない。口縁部には、刺突とともに、縦位短沈線列が巡っている。

また、306は、条線を地文とした曾利系の口縁無文変形土器である。頸部は相互刺突の蛇行降帯で区画され、蛇行と直線が割り振られる胴部垂下文は、降帯ではなく、半裁竹管で描出される。

石器 (第36図～第44図443)

今回の調査では東西地区合わせて総693点の縄文時代石器類を検出した。このうち、630点が西地区出土であり、調査区出土の大半を占める。

また、石器製品は、両地区合わせて212点が出土しており、こちらもまた、205点が出土した西地区に大きく片よる。これにともなう剥片・石核類は両地区で481点を発見しており、東地区の56点をさし引いた425点が西地区出土となる。

縄文時代の石器製品で、最も点数が多かったのがスタンプ形石器で、種々の礫器がこれに次ぐ。また、他に石鏃、削器、打製石斧、磨製石斧、磨石、砥石、石核、ミニチュア打製石斧などが出土している。

スタンプ形石器や礫器など、石器の多くは、遺跡の主体となる第Ⅱ群から第Ⅳ群土器がもてはやされた時期、すなわち、縄文時代早期の中葉に製作されたものだろう。また、打製石斧は第7号住居跡の存在や第Ⅲ群土器の出土量からして、縄文中期加曽利E期に製作されたものと思われる。

一方、石鏃は狩猟具という性格上、各期のものが混在していても不思議ではない。しかし、他と同じ分布の集中が見られ、その点数も狩猟途上の残置とは考えにくい。これらも、集落内での活動の結果、廃棄されたものとしてとらえられる。とすれば、主体からそうかけ離れた時期のものとはならないだろう。

また、本章の冒頭で述べたとおり、縄文時代の剥片として算定した中に、先土器時代の所産が含まれている可能性も大いにある。

さて、これら石器類の分布は、大略土器のそれと類似する。なかでも製品類に著しく、ほとんどがグリッド6列以北の楕円範囲に納まる。このなかで、打製石斧のみは、製作期を反映して、半数近くが第7号住居跡に集中し、他での分布は極少である。

これに対し、剥片類は楕円集中範囲よりははずれたいくつかの地区で、まとまりが把握できる。とくに著しいのは8 Dグリッドの北西部で、石鏃と削器を含みつつ、約50点が半径3 mの範囲に集中する。

これは、土器や礫には通じず、石鏃などの石器製作跡かとも考え、接合分類を試みた。しかし、帰属する母岩はすべてチャートであるものの、雑多で、接合も進まなかった。

一方、これらとともに大量の礫も出土しており、その数は総計7,626点にものぼる。全体の84%はチャートで、8%の砂岩を加え、9割以上を占めている。また、60%が破砕しており、節理面で破砕しているものもつばらである。

大半の7,415点は、西地区で検出しており、遺構や土器・石器の分布と同じ調査区北西に集中する。ところが、礫の分布を詳しくみると、土器や石器で今一つはつきりしなかった傾向が鮮やかに浮かびあがる。

すなわち、土器や石器製品の分布ではおほろげであった楕円集中域の中に、もう一つの円形集中範囲が見て取れるのである。

これらは集石と、それをつなぐ礫分布によって形作られ、環状の外部に拡散するきざしがある。逆に、中央は分布が希薄で、第13号集石および第6号住居跡の周辺にまとまる程度である。

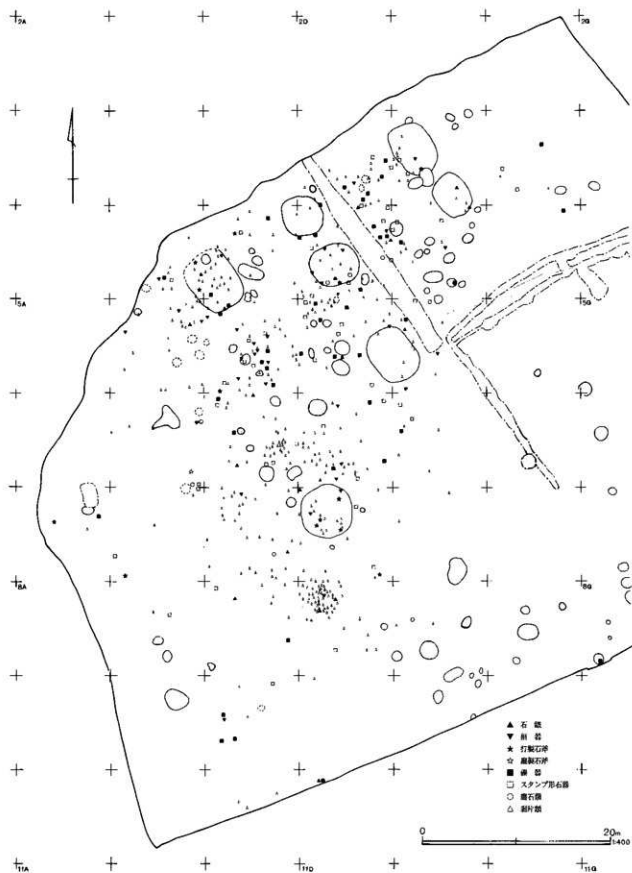
土器の分布でもそうであったが、この付近は南小畔川に向かい台地が傾斜している。第6号住居跡北の無分布地域は、地山まで流出した結果であり、付近もこの自然現象とは無縁ではいられなかっただろう。

環状環群を構成する礫も、この例外ではなく、北西方向への移動力にさらされていたはずである。これを加味すれば、環状環群の中央部の希薄さが、ひときわ際立ってこよう。

この環群が形成された時期は、ほとんどが土壌をともしない集石の造営期とあいまって、にわかには決しがたい。しかし、遺跡の主体期である早期中葉からはずれることはまずないだろう。

その他、環状外でもいくつかの集中が見られるが、7 Aグリッドのそれは中期造営の第17号集石の礫が散乱したものであろう。また、7 B、9 C、9 Gグリッドのまとまりも同様である。

第36図 縄文時代石器分布



第37図 礫・焼礫分布



石鏃 (307~322)

一部の未製品と思われるものを含め、遺構外よりは20点が出土した。

石材はやや優勢のチャートと、黒曜石で二分され、他は採用されていない。加工に易い黒曜石は、小型品の製作では珍重された形跡はないものの、319の特異な形態や、321のひときわ深い抉りを持つ個体に用いられており、316の大型品とともに、移入材の性向を示している。

これらは、形態や大きさの偏差が幅広いが、有茎の322を除き、基本的には無茎凹基をめざした加工がなされている。

307~316は、ゆるい凹基を呈するものだが、抉り奥の一段深い剥離がなされず、平基の加工法に近い。また、307・308は側縁加工が行き届いておらず、未製品の可能性がある。

一方、317~321は深い凹基を意図するもので、321はこの指向とくに著しく、長脚鏃に近い。また、320は先端に段差を作出している。

削器 (323~351)

各種の形態、および大小をあわせて、遺構外よりは33点が出土した。

石材は、小型品では黒曜石が、大型品ではチャートが優位を占めている。他には、砂岩や砂質頁岩などが大型品で利用されている。だが、礫器に多いホルンフェルスは、遺跡全体で見ても第19号土壌6があるのみで、遺構外では皆無であった。

これらは、石材の統一性のわりに、定型的なものは少なく、形態や機能部の特徴、素材の利用法は千差万別である。強いて表現しても、縦長の剥片が側縁を加工する比率が多く、調整細剥離は片面からに限られるという程度である。削ぐ、切ることを目的に周囲の素材で即席に製作されたものだろう。

このなかで、330~332の3点は、正から二等辺三角の形態と入念な加工から、規格性を認定できる。実測図上位の辺は、意図的に打削して平坦に整えられ、他の二辺を機能部として利用する。

一方、350の大型品は、表面的な形態が礫器に類似するが、これに対する厚さ、ひいては重量の比率が同大の礫器とはかけ離れており、削器として分類した。機能的には、礫器第4類などと同じ用むきで製作されたものだろう。

礫器 (352~383)

遺構外よりは39点が出土した。これは、スタンプ形石器に次いで出土点数が多い。それぞれの大きさは、後述する形態分類の差によってまちまちだが、重さは200から350gの偏差の中に多くが属する。

石材は、ホルンフェルスと砂質頁岩の二者が大勢を占め、粘板岩や砂岩がまれに選択されている。砂岩を主体とするスタンプ形石器との差は歴然で、粗略で足るものの、より鋭利な削れ口を求めていたことも推察できる。

これらは、原材に荒い打割を加えたのみのものが多く、剥片を素材としない限り、加工が両面に及ぶことは少ない。そして、刃部だけで見れば、すべてが片刃で統一されている。

このことは、刃部を作出するだけに傾注したかとも思える。しかし、詳しく観察すると、全形を含め、素材の選択から加工の方向、刃部の形態などに配慮が見られ、その意図によって7類に分類が可能である。以下、各分類ごとに事実説明を加える。

第1類 (352・353)

長い礫における短辺の一端だけを加工し、刃部とするものである。片面加工の2点を示したが、大小が極端であり、往時の基本型として認知されていなかったと判断できる。

小型の扁平礫を打削した352の刃部は、特段の思い入れを認めない。しかし、353のそれは、平刃となるよう細かい剥離が加えられている。

並列する細剥離が加えられるものは、礫器のなかでは他になく、刃部角こそ鈍いが、打製石斧の加工法に類似する。あるいは中期の所産なのかもしれない。側縁には磨り痕が残る。

第2類 (354~362)

大略三角の形態をめざし、握りに適した原材を選択するか、打割によってこれを整えるものである。

刃部は平刃ではなく、ほぼ中央の尖部を中心とし、約120から140度の角度を成するよう、左右に傾けて打割を行なっている。

素材は礫塊を持ち寄るのが基本である。だが、356は明らかに剥片を利用しており、その経緯が災いしてか、その疑いがある355とともに、他より大きさや重量が劣る。

なお、164の表裏には、わずかではあるが、磨り痕が観察できる。石材は砂質頁岩で、閃緑岩や砂岩が主体の磨石を転用したとはいいい難い。

第3類 (363~368)

第2類と類似するが、握り頂部が尖らず、全体として二枚貝様となるものである。頂部の角がとれたのに対応するのか、刃部の形態も、中央の尖部が第2類より丸味を帯びる。

363や366・367のように、楕円礫を持ち寄り、一方の側縁を取り込むように打割するのが基本だが、364では、両面を加工し、自然面を残さない。

また、同番刃部に残る細剥落は、同類の剥離法を見る限り、製作時に加えられたとは考えられない。これは、使用時の痕跡と思われる。

そして、368は、平刃に近い機能部と、両端を短縮させる打割の特徴を持つ。素材選択など、基本は第3類に属するが、373や375を介して第5類にも通ずる折衷型である。

第4類 (369・370)

刃部の形態は翼状から弧状で、第3類と共通する。ところが、握り部に自然面を残さず、逆に、くびれる類である。このため、同部には鋭利な面があらわれ、あたりは悪い。

2点のみを示したが、あるいは、372などとの共通を重視して、第5類として扱った方が良かったかもしれない。しかし、同類に見られる、刃部の片よりではなく、最大特徴の直線的な平坦面を欠く。

第5類 (371~376)

全形は第4類に類似するが、握り部分が直線的で、多くの場合、素材礫の平坦な自然側縁面を意図的に配置する類である。また、これに漏れる372も、平坦部分を作出するために、剥離ではなく、素材を大きく分割する加工を行なっている。

このような作為の結果として、長方形に近い形態を示すものが多くなる。これらは、第2類とはかけ離れた、横刃型の礫器として認識できる。

372を除き、刃部は比較的直線に近く、刃部そのものがやや斜めがちになるか、短辺が傾斜するかのいずれかを選択するようである。

第6類 (377~380)

素材剥片、あるいは礫塊の両側縁に加工を施し、機能面とするものである。これは、削器の一般的な加工法と共通する。だが、刃部の角度は鈍く、重量による破壊力が鋭利さに優先する礫器的な機能が求められたものであろう。

4点を示したが、第2類から第5類に比べ、形態や大きさ、加工法に偏差が大きい。そのため、類別以上の共通した手法を見いだすことができない。この限界は、この類が往時の基本型群に欠けていた可能性を示唆している。

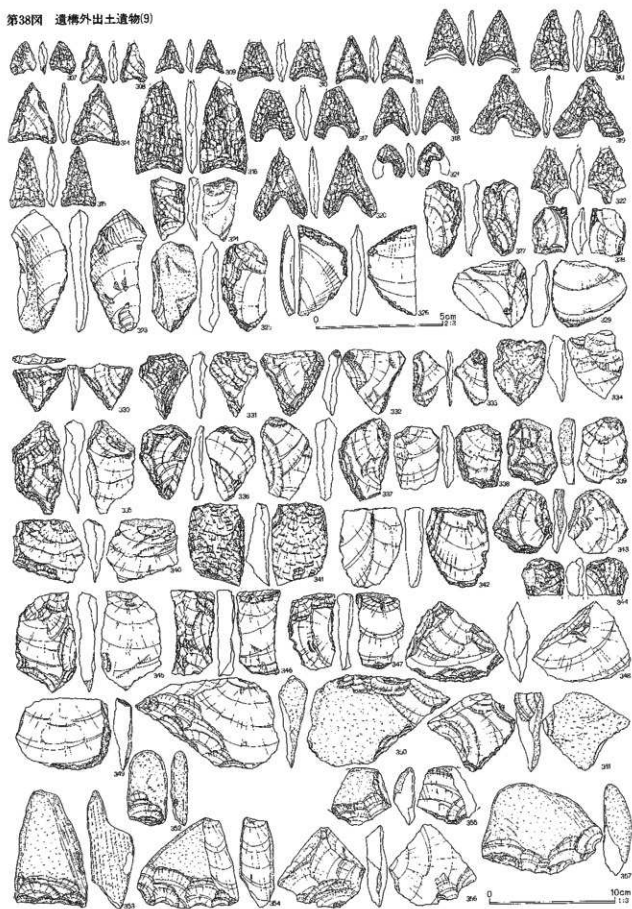
第7類 (381~383)

礫塊、あるいは剥片素材の四周に平等な加工が重ねられるものである。剥離加工の手かずは礫器として破格だが、打製石斧と同じく、長軸を運動方向と仮定した場合、機能部の角度は鈍く、礫器的要素を逸脱するものではない。

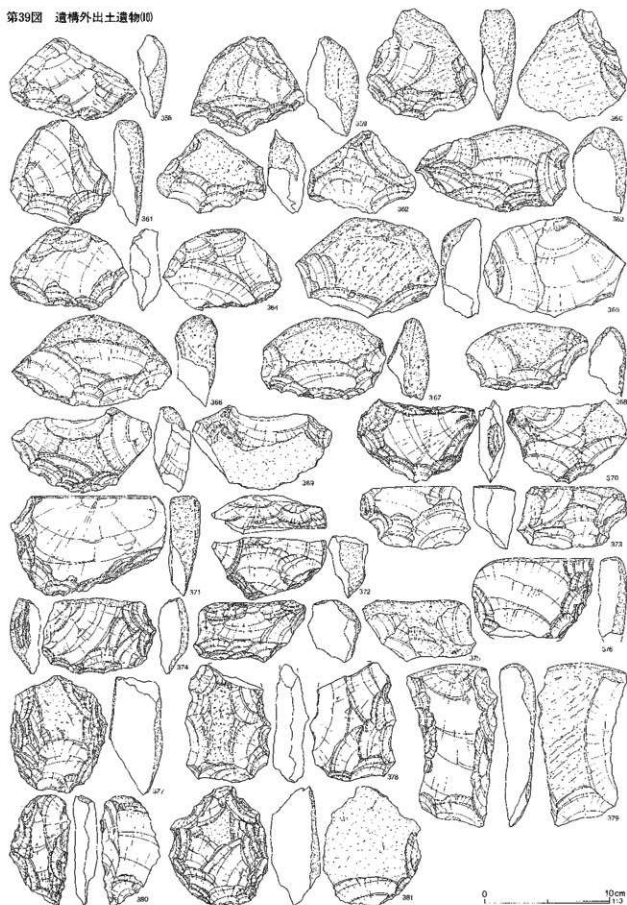
381から383の3点を図示したが、最も整った第2号集石出土の1を含めても、加工の多くは片面のみに終始し、裏面に及ぶのは形態整形に支障をきたした場合に限られている。

このなかで、381と382の想定機能部は、1・2回ではあるが、運動方向に大きな剥離が入り、両刃状となる。これが意図されたものかは判断できなかった。

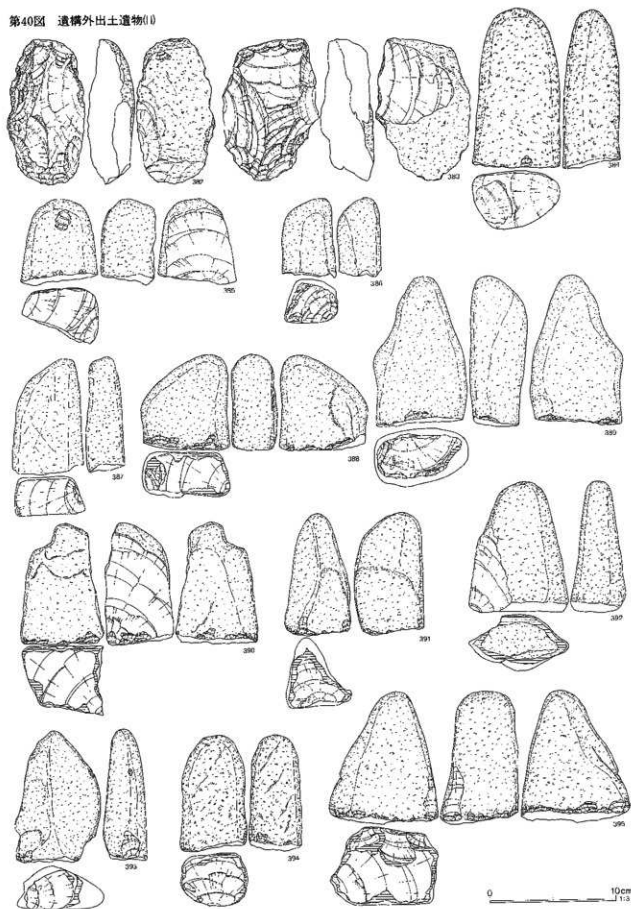
第38図 遠構外出土遺物(9)



第39図 遺構外出土遺物(10)



第40図 遺構外出土遺物(II)



スタンプ形石器 (384~428)

遺構外よりは50点が出土した。今調査で最も多く出土した石器製品である。

石材は、閃緑岩が2点、緑色岩・ホルンフェルス・砂質頁岩がそれぞれ1点ずつある他は、遺構出土も含め、砂岩が占めている。

これらの重量は、上下を分割したものを除き、159から919gまでの偏差があるが、250~500g台で大方が推移している。

製作は、素材礫を分割して行なっているが、長さや幅など計測値は、持ちよった原材の形態に左右され、一定していない。分割後の形は、二等辺三角形から台形までの変化があるが、機能部と思われる底面（分割部位の横断面）の形態も含め、さまざまである。

しかし、所謂凡字形を呈する、行き届いた製作工程をとるほどに、磨石に見られるような、楕円かつ平坦面をもつ礫に傾斜するようである。反面、基本的な機能だけを求めんとするならば、細かな形態にはあまり斟酌しなかったと言えるだろう。

以下、図示した45点を製作工程の到達度によって4類に分類し、記載を進める。

第1類 (384~411)

自然礫を打割ただけで使用に供されるものを一括した。4類のなかで最も比率が高く、出土量の6割を占める。

形態は、前述したとおりだが、第2類、第3類に比してその偏差が著しい。基本的には、打割後の形態が底面に向かいその幅を増していくものを選択しているものの、390のように、頭部に段差が残ったり、405のように、ほとんど正方形に近いものまで多少許容されている。

また、この大らかさは打割後の底面の形態にも共通する。円形や正方形、あるいは三角形から菱形、長楕円まで、この属性の機能的な蓋然性を否定するかのようである。

一方、使用の結果、生じたと思われる底面の摩耗痕は、本類の9割で認められた。しかし、摩耗とともに

底面縁に残される小剥離痕までを含めれば、打割後の活動が途切れてしまうのは、386と387の2点しか存在しない。

摩耗は底面外周に生じ易いが、打割に不足があった場合に追加される剥離加工の稜線を握り所として中央に突出している。

このなかで、392は、底面までも自然面で磨っており、外周に摩耗痕が巡ることによってこの石器として供されたことが証明できる。

第2類 (413~416)

側縁に整形加工痕を残すものである。第4号集石出土品を加えても5点しか出土していない。すべて片側縁のみの加工であり、この上に敲打を加える第3類が両側縁を求めるのと対象的である。

形態は、3者が、上下底の差が大きい台形となるだろう。これに対し、415は、石材選択の基本までを無視した逆台形を呈しており、底面機能部も極端に小さい。にもかかわらず、摩耗痕は発達しており、これにともなう底面側縁も多く残る。

これに対し、413は、415にも勝る入念な加工を残しているながら、底面の摩耗や、明らかな底側縁の小剥離が観察できない。両者が辿ったその後の扱いは、スタンプ形石器の使用に対する一般的な推測の限界を示している。

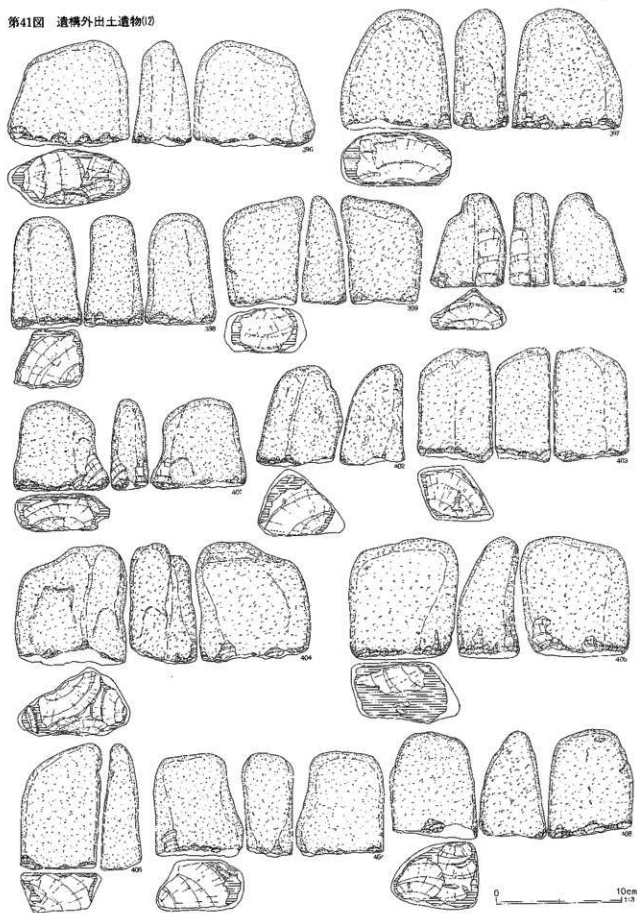
一方、側縁に対する加工は、稜線を目安とした表裏両側からの剥離が基本であり、これは第3類にも共通する。しかし、414の下位は、片面からのみ加工が施されている。側縁剥離が底側縁にまで達する特殊な加工と合わせ、再生や破損の修復を行なった痕跡かとも察せられる。

第3類 (417~419)

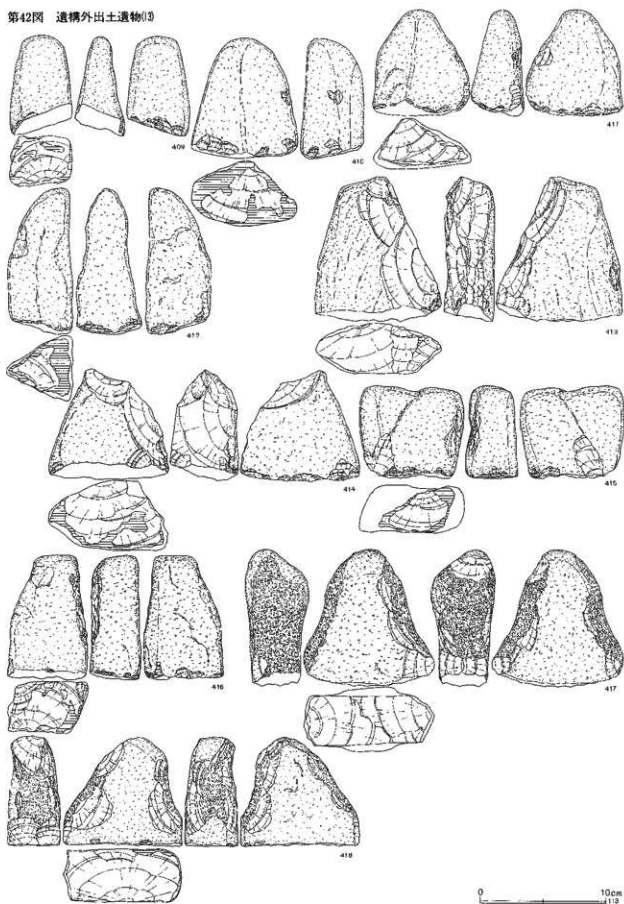
側縁に整形加工痕を残し、その上に稜線をつづす敲打を施すものである。第9号集石の31を合わせて4点が出土している。

形態は、所謂凡字形である。これは、同じ側縁加工を施す第2類では見られない、二つの形態面での欲求に起因している。

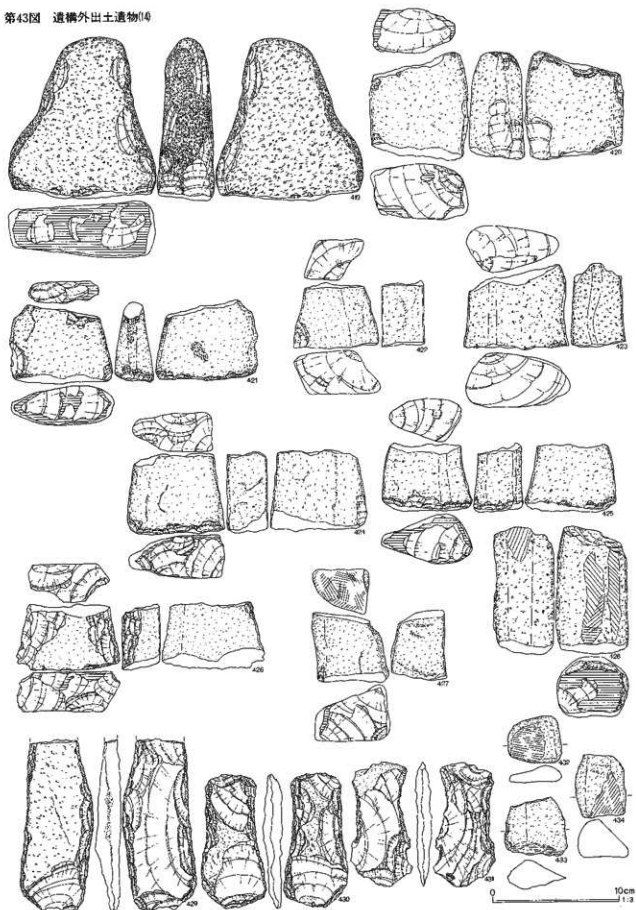
第41図 遺構外出土遺物(2)



第42図 遠構外出土遺物(3)



第43図 遺構外出土遺物(14)



すなわち、加撃は頭部を避け、両側縁の内湾するように行なわれる。また、底側縁の、下から1.5cm程度は、底面と垂直に保たれるように、内湾加工が加減される。また、例えば418や419のように、場合によっては底面方向からの剥離も行なわれるほどに、垂直を作出することにこだわりを見せる。

この角度差は、使用時の運動方向に対する慣性を押しとどめる効果をてらったものと考えられる。剥離後の敲打も内湾部を目安に終始しており、底面からの剥離は最後の補正としての意味も持つようである。

ところが、このように入念な仕掛けを用意したにもかかわらず、417と418にはほとんど摩耗度が見られない。第2類にも増して、使用時に関わる推論の大きな障壁と言えよう。

第4類 (420~428)

個体の上下に打割面を残すものを一括した。

9点を図示したが、これらのうちには欠損品の疑いをかけねばならぬものもある。しかし、424と426の上面における衝撃痕は単数ではなく、複数のものが観察できる。この痕跡が破損に起因するものでないことは明白である。

加えて、420と421では底面のみならず、上面までも摩耗度と小剥離痕が残っており、同居する両面が使用に供されたことがわかる。

一方、421と428は、それぞれ凹痕と磨り面が観察でき、両者が磨石類から転用されたことを示す。また反対に、427の上面は磨り面と化しており、破損の憂き目にあった他器種からの転用だけでなく、逆の転用も行なわれたようである。

426は、両側縁に内湾する加工痕を残すものの、敲打を加えていない。

打製石斧 (429~431)

遺構外よりは5点が出土した。そのうち3点を図示したが、形態はいずれも楕形を基調としている。しかし、431の頭部は拡大して分銅形に近づいている。

厚さは比較的薄いのが、これは、素材の石質に起因するだろう。429は片岩、430と431は粘板岩という、薄く

剥かれやすい石材を選択している。逆に、鋭利な側縁が現れるにもかかわらず、430・431には着柄のための敲打や漬しが見られない。

これらは、第7号住居跡出土の4点とともに加曽利E期の所産と思われる。

砥石 (432~434)

遺構外より3点が出土した。そのすべてを図示したが、いずれも砂岩製で、閃緑岩を多用する磨石とは原材料選択の点でも一線を画せる。また、素材は小さく、磨面の位置も一定していない。磨石のような重みを必要としない加工にあたり、代替的な条件のなかで使用されたものだろう。

これらがいずれの時期に使用されたかは断定できないが、土器の主体期に並行するものだろう。

磨石 (435~441)

遺構外よりは8点が出土したにすぎない。うち7点を図示したが、10cm前後の円形から楕円形が中心で、重さも500g前後に集中する。凹底や、側縁に敲打痕を合わせ残すものが多く、これが欠けるものは439の1点しかない。石材は閃緑岩と砂岩でまかなわれ、なかでも前者が5点を占める。

多くは縄文早期中葉に使用されたものだろう。

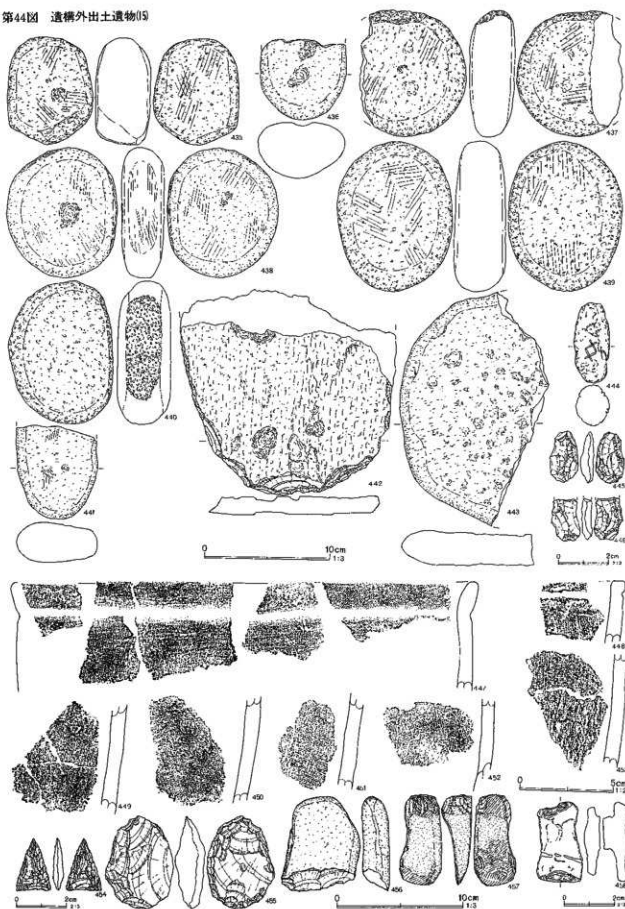
石皿 (442・443)

遺構外と井戸への混入で、わずかに2点が出土したにすぎない。集石で断片が出土している2点を合わせても、遺跡全体で4点の検出となる。

これは、加工工具としての磨石の少なさと対応するような数値だが、磨り漬しと粉砕のちがいこそあれ、スタンプ形石器に磨石と同じような機能を与えたとするならば、転用台石として重宝されてよきさうなものである。

図示した2点は、いずれも明確な窪みが残るわけではない。442は緑泥片岩の周縁を打削しつつ形態を整え、443は自然石を利用するちがいはあるが、楕円かつ扁平な素材を選択し、散発的な凹痕が印されることでも共通する。

第44図 遺構外出土遺物(5)



土製品 (第44図444)

はたして製品と称せるかどうか、握り整えられた粘土塊である。一部に二重の×が描かれているが、意図された文様としてあつかえるかどうか疑わしい。

石製品 (第44図445・446)

2点を示した。445の長さは2cm、厚さは0.5cmで、小剥片のようにも見える。だが、撥形を呈する445の形態や、四周より打割を加える細加工の入念さなどからして、いずれも打製石斧のミニチュア製品と判断して大過ないと思う。

445は砂岩、446はホルンフェルスという、打製石斧では一般的な石材を利用している。

東地区出土土器 (第44図447～453)

東地区よりは97点の土器・陶磁器類が出土した。このうち、85点が縄文土器であり、35点が第II群、11点が第IV群、13点が第V群、16点が第VII群、8点が第VIII群という内訳であった。

これらの分布は散漫で、群別、あるいは類別で、とくに集中が片よる地区は存在しなかった。

第44図には7点の資料を示した。いずれも第II群に相当し、447・449～453が同一個体である。

447は、これらのうち器形曲線の共通が断定できる口縁部片のみを一括し、口径と器形を推定した。同番は推定口径25cmで、器形曲線から類推できる器高は35cm程度である。

口唇部は成形粘土の折り返しの結果、肥厚外反するかに見える。口縁下1.5cmにある強い器形屈曲部は、粘土折り返しの限界を示すとともに、肥厚曲線とあいまって一筋の段差を作出する。さらに、その部分を軽くなぞることにより、一見で識別できる凹線がめぐることとなる。

胎上は滑石粒を主として石英・長石を含む。器表の上位は横方向、下位は縦方向に磨き込まれ、風化を免れた部分では滑沢すらある。

押型文系や沈線文系との鼎立を重視する本遺跡のなかでは、便宜上、第II群土器第1類とするが、同類でもっぱら念頭においた第2号集石第23図2よりも古

相を示し、別考が必要な個体である。

一方、448は、本遺跡の主体である同群の第2類に相当し、角頭状の口唇直下に沈線がめぐる。胎上を構成する混和材粒子の種類は447と変化しないが、器面調整の入念さでは見劣りがする。

東地区出土石器 (第44図454～457)

東地区よりは縄文時代の所産と思われる石器製品が4点出土している。出土位置に片よりはない。

454は平基かつ等辺の石鐮で、側縁を中心に細剥離を加えている。また、455は長さ3.7cmのチャート製小型削器で、全周にわたり、細剥離の加工を行なっている。形態や剥離の範囲は尖頭器の一種にも通ずるが、軸方向に直交するような剥離も加わるため、削器としてあつかった。

これに対し、456は砂岩製の磨器で、わずかな打割のみで刃部の作出を終了している。そして、457は局部磨製石斧と分類できるが、頭部にたび重なる加撃の痕跡が残る。これは石器製作時ではなく、使用時に生じた痕跡と思われ、たがねと似たような用途を担っていたものと推定できる。刃部の片及ば素材の形態に起因するが、調査当初よりの選択の可能性もある。

東地区出土土製品 (第44図458)

1点のみ出土している。略円柱形の中央に焼成前の穿孔が見られる。また、横位にめぐる沈線らしき痕跡が残るが、文様を意図したかは不明である。

造りは精巧なものとはいかず、垂飾などとは考えられない。詳しい用途は不明である。

第2表 石器観察表(2)

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	備 考
1 住-5	1号住居	石鏃	(2.5)	1.4	0.4	(1.0)	チャート	
1 住-6	1号住居	石鏃		2.4	1.6	0.3	0.6	チャート
2 住-15	2号住居	削器	7.0	5.7	1.3	57.2	チャート	
4 住-21	4号住居	石鏃	2.2	1.0	0.4	0.9	チャート	
4 住-22	4号住居	削器	2.2	2.1	0.5	2.2	黒曜石	
4 住-23	4号住居	削器	2.7	1.6	0.6	1.9	黒曜石	
4 住-24	4号住居	削器	8.5	8.1	2.1	135.0	砂岩	
4 住-25	4号住居	削器	5.1	4.1	0.8	22.0	粘板岩	
4 住-26	4号住居	礫器	7.3	(7.3)	2.0	(120.8)	砂質頁岩	
4 住-27	4号住居	磨製石斧	8.8	3.6	1.5	81.9	緑色岩	
4 住-28	4号住居	磨石	(4.8)	8.3	3.8	(242.6)	閃緑岩	
4 住-29	4号住居	敲石	15.8	3.1	2.8	220.1	粘板岩	
6 住-49	6号住居	石鏃	1.5	(1.2)	0.3	(0.3)	黒曜石	
6 住-50	6号住居	石鏃	1.7	1.6	0.4	0.7	チャート	
6 住-51	6号住居	削器	2.5	1.6	0.5	20.0	チャート	
6 住-52	6号住居	礫器	8.0	7.4	2.9	233.4	砂岩	
6 住-53	6号住居	礫器	10.0	5.6	4.5	276.6	ホルンフェルス	
7 住-9	7号住居	打製石斧	10.3	5.6	1.6	110.2	砂岩	
7 住-10	7号住居	打製石斧	7.8	5.2	1.4	50.2	砂岩	
7 住-11	7号住居	打製石斧	(7.2)	8.2	2.8	167.5	砂岩	
7 住-12	7号住居	打製石斧	(8.2)	(4.7)	2.5	(98.2)	砂岩	
17上-4	17号土壌	スタンプ形石器	9.8	6.0	3.5	283.3	砂岩	
19上-6	19号土壌	削器	4.8	7.8	2.3	84.7	ホルンフェルス	
71上-20	71号土壌	打製石斧	13.8	9.0	2.6	306.2	砂岩	
1 集-1	1号集石	礫器	13.8	9.0	3.0	426.6	粘板岩	
2 集-20	2号集石	削器	4.8	3.2	1.0	13.8	チャート	
2 集-21	2号集石	礫器	5.8	7.8	2.3	121.8	砂質頁岩	
2 集-22	2号集石	礫器	9.2	7.3	3.9	291.2	ホルンフェルス	
2 集-23	2号集石	スタンプ形石器	9.0	6.9	5.3	487.1	砂岩	
2 集-24	2号集石	スタンプ形石器	9.5	7.9	5.4	541.1	砂岩	
4 集-28	4号集石	スタンプ形石器	10.2	7.5	3.5	391.9	砂岩	磨石転用
5 集-29	5号集石	礫器	4.0	8.6	2.5	106.5	安山岩	
7 集-30	7号集石	礫器	6.5	8.2	1.9	115.2	砂岩	
9 集-31	9号集石	スタンプ形石器	6.9	7.1	4.8	232.8	砂岩	
9 集-32	9号集石	スタンプ形石器	9.3	6.6	5.3	619.9	砂岩	
9 集-33	9号集石	石皿	(9.4)	(10.0)	4.9	(819.3)	安山岩	
G r-307	4 D Grid	石鏃	1.3	1.1	0.4	0.4	黒曜石	
G r-308	1号溝	石鏃	1.6	1.1	0.4	0.4	チャート	
G r-309	9 D Grid	石鏃	1.3	1.2	0.3	0.3	チャート	
G r-310	5 E Grid	石鏃	(1.5)	1.5	0.4	(0.9)	チャート	
G r-311	6 D Grid	石鏃	1.9	1.3	0.4	0.7	チャート	
G r-312	表採	石鏃	2.2	1.7	0.3	0.7	黒曜石	
G r-313	5 D Grid	石鏃	2.5	1.6	0.4	1.3	チャート	
G r-314	6 D Grid	石鏃	2.4	1.9	0.5	1.6	チャート	
G r-315	5 T r	石鏃	2.4	1.4	0.5	1.2	チャート	第1次調査出土
G r-316	6 C Grid	石鏃	(3.7)	1.9	0.5	(2.7)	黒曜石	
G r-317	5 D Grid	石鏃	(2.1)	1.8	0.6	(1.2)	黒曜石	
G r-318	10 D Grid	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.6	チャート	
G r-319	5 D Grid	石鏃	2.5	2.8	0.3	0.9	黒曜石	
G r-320	3 H Grid	石鏃	(2.8)	2.2	0.4	(1.2)	チャート	
G r-321	4 B Grid	石鏃	1.4	(1.1)	0.3	(0.3)	黒曜石	
G r-322	8 C Grid	石鏃	2.2	1.5	0.7	1.3	チャート	
G r-323	5 B Grid	削器	4.9	2.3	0.7	6.1	黒曜石	

第3表 石器観察表(3)

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	備 考
G r -324	4 C Grid	削器	2.5	1.4	0.5	1.2	黒曜石	
G r -325	8 E Grid	削器	3.6	1.8	0.8	3.3	黒曜石	
G r -326	5 B Grid	削器	3.6	2.0	0.6	2.9	黒曜石	
G r -327	8 D Grid	削器	3.0	1.5	0.6	3.1	チャート	
G r -328	3 F Grid	削器	1.9	1.4	0.7	1.2	黒曜石	
G r -329	6 B Grid	削器	2.7	3.0	0.8	4.3	黒曜石	
G r -330	5 D Grid	削器	3.6	4.3	0.9	9.4	チャート	
G r -331	6 D Grid	削器	5.2	3.8	1.9	18.7	チャート	
G r -332	5 C Grid	削器	5.1	5.1	1.1	22.1	チャート	
G r -333	6 D Grid	削器	4.4	2.6	0.5	4.9	チャート	
G r -334	5 C Grid	削器	5.3	4.3	1.7	25.3	チャート	
G r -335	5 C Grid	削器	7.4	3.8	1.5	44.6	チャート	
G r -336	5 B Grid	削器	5.9	4.0	0.9	21.1	チャート	
G r -337	5 C Grid	削器	6.5	4.1	1.8	37.1	チャート	
G r -338	5 E Grid	削器	5.0	3.7	1.0	19.5	チャート	
G r -339	5 C Grid	削器	5.2	4.0	1.3	28.8	チャート	
G r -340	6 D Grid	削器	4.8	5.7	1.7	41.2	チャート	
G r -341	4 D Grid	削器	6.5	4.4	1.8	54.0	チャート	
G r -342	6 B Grid	削器	6.2	5.0	1.6	52.3	チャート	
G r -343	5 C Grid	削器	5.1	4.7	1.0	27.2	チャート	
G r -344	6 D Grid	削器	(3.0)	3.4	1.4	(15.7)	チャート	
G r -345	5 C Grid	削器	7.8	4.8	1.6	62.7	チャート	
G r -346	5 C Grid	削器	6.8	3.4	1.4	36.7	チャート	
G r -347	6 D Grid	削器	6.0	4.8	1.2	27.0	チャート	
G r -348	5 E Grid	削器	6.5	7.8	1.8	88.2	砂岩	
G r -349	5 C Grid	削器	5.7	7.5	1.5	83.8	砂岩	
G r -350	5 D Grid	削器	7.2	10.3	2.2	150.5	砂質頁岩	
G r -351	5 C Grid	削器	6.2	7.0	2.3	68.6	安山岩	
G r -352	6 E Grid	礫器	5.8	3.2	1.3	42.1	ホルンフェルス	
G r -353	6 D Grid	礫器	9.3	5.8	3.8	222.9	砂岩	
G r -354	5 D Grid	礫器	7.1	8.0	2.7	185.5	ホルンフェルス	
G r -355	5 C Grid	礫器	4.5	(4.7)	1.7	(141.2)	砂質頁岩	
G r -356	4 F Grid	礫器	6.4	7.0	1.6	72.9	ホルンフェルス	
G r -357	5 D Grid	礫器	7.3	9.6	2.2	197.1	ホルンフェルス	
G r -358	4 E Grid	礫器	6.5	10.0	2.3	126.4	ホルンフェルス	
G r -359	3 D Grid	礫器	7.9	9.0	4.1	289.6	砂質頁岩	
G r -360	5 D Grid	礫器	8.7	8.8	2.8	246.1	砂質頁岩	
G r -361	4 D Grid	礫器	8.4	8.0	2.5	198.7	ホルンフェルス	
G r -362	6 D Grid	礫器	6.6	8.6	3.0	194.4	砂質頁岩	
G r -363	5 D Grid	礫器	6.8	12.2	4.4	465.8	砂岩	
G r -364	9 C Grid	礫器	6.5	9.4	2.5	186.2	チャート	
G r -365	5 E Grid	礫器	7.8	10.4	3.2	368.0	ホルンフェルス	
G r -366	5 C Grid	礫器	7.2	12.7	3.3	350.4	ホルンフェルス	
G r -367	4 D Grid	礫器	6.4	9.9	3.3	235.5	砂岩	
G r -368	5 C Grid	礫器	5.4	9.7	2.8	190.4	ホルンフェルス	
G r -369	4 C Grid	礫器	6.7	11.1	3.0	251.5	ホルンフェルス	
G r -370	9 C Grid	礫器	6.5	9.6	2.0	135.9	チャート	
G r -371	4 D Grid	礫器	7.9	12.3	2.3	343.7	ホルンフェルス	
G r -372	3 D Grid	礫器	4.9	9.1	3.2	141.5	ホルンフェルス	
G r -373	7 A Grid	礫器	4.8	8.7	3.3	190.0	安山岩	
G r -374	4 B Grid	礫器	6.0	9.1	2.4	146.5	粘板岩	
G r -375	5 D Grid	礫器	5.0	8.9	4.2	237.5	砂質頁岩	
G r -376	5 C Grid	礫器	(6.2)	9.7	2.3	(236.5)	ホルンフェルス	

第4表 石器観察表(4)

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	備 考
G r-377	4 DGrid	礮器	9.2	7.7	4.3	379.9	ホルンフェルス	
G r-378	8 EGrid	礮器	(9.4)	6.8	2.5	(196.7)	ホルンフェルス	
G r-379	10 DGrid	礮器	13.0	7.1	2.9	314.6	ホルンフェルス	
G r-380	4 CGrid	礮器	8.5	4.8	1.9	87.9	安山岩	
G r-381	6 DGrid	礮器	9.5	7.8	3.9	332.9	粘板岩	
G r-382	5 DGrid	礮器	11.5	6.1	3.7	334.8	ホルンフェルス	
G r-383	8 CGrid	礮器	10.2	7.6	4.1	392.6	砂質頁岩	
G r-384	4 DGrid	スタンプ形石器	12.5	7.0	4.6	687.3	閃緑岩	
G r-385	6 DGrid	スタンプ形石器	6.8	6.2	4.3	238.9	砂岩	
G r-386	6 CGrid	スタンプ形石器	5.2	4.2	3.4	159.8	砂岩	
G r-387	3 FGrid	スタンプ形石器	8.0	5.7	3.0	246.2	砂岩	
G r-388	5 DGrid	スタンプ形石器	7.6	7.0	3.6	299.8	砂岩	
G r-389	4 DGrid	スタンプ形石器	11.3	7.4	4.5	549.9	砂岩	
G r-390	5 DGrid	スタンプ形石器	9.5	6.6	5.4	456.2	砂岩	
G r-391	5 DGrid	スタンプ形石器	9.5	5.2	5.5	302.0	砂岩	
G r-392	6 CGrid	スタンプ形石器	10.3	7.9	4.4	360.2	砂岩	
G r-393	7 DGrid	スタンプ形石器	10.4	6.9	3.4	279.9	砂岩	
G r-394	6 CGrid	スタンプ形石器	9.1	4.2	5.3	307.4	砂岩	
G r-395	8 BGrid	スタンプ形石器	10.4	8.6	6.3	666.1	砂岩	
G r-396	4 EGrid	スタンプ形石器	8.4	9.7	4.6	485.8	砂岩	
G r-397	4 DGrid	スタンプ形石器	9.6	8.7	4.3	562.0	砂岩	
G r-398	5 DGrid	スタンプ形石器	7.7	5.7	4.5	327.3	砂岩	
G r-399	5 DGrid	スタンプ形石器	8.5	6.4	3.5	273.4	砂岩	
G r-400	5 DGrid	スタンプ形石器	7.4	6.1	3.2	159.1	砂岩	
G r-401	5 EGrid	スタンプ形石器	7.1	7.6	3.0	240.0	砂岩	
G r-402	4 DGrid	スタンプ形石器	7.9	6.8	5.2	286.3	砂岩	
G r-403	4 DGrid	スタンプ形石器	9.1	6.0	4.4	385.1	砂岩	
G r-404	4 BGrid	スタンプ形石器	9.4	8.8	5.3	561.0	砂岩	
G r-405	3 EGrid	スタンプ形石器	9.5	8.6	4.9	579.1	砂岩	
G r-406	4 EGrid	スタンプ形石器	9.9	6.2	3.2	272.7	砂岩	
G r-407	4 DGrid	スタンプ形石器	8.3	6.9	4.0	402.4	砂岩	
G r-408	9 CGrid	スタンプ形石器	8.5	6.8	5.3	445.8	砂岩	
G r-409	6 CGrid	スタンプ形石器	7.9	5.0	4.0	171.3	砂岩	
G r-410	3 FGrid	スタンプ形石器	9.5	8.5	5.2	524.6	砂岩	
G r-411	5 EGrid	スタンプ形石器	8.3	7.7	4.2	262.8	砂岩	
G r-412	5 CGrid	スタンプ形石器	11.5	5.2	5.2	334.1	砂岩	
G r-413	6 CGrid	スタンプ形石器	11.4	10.0	4.0	399.2	ホルンフェルス	
G r-414	5 DGrid	スタンプ形石器	8.7	9.5	5.5	505.7	砂岩	
G r-415	5 EGrid	スタンプ形石器	7.3	8.3	4.2	407.3	砂岩	
G r-416	5 CGrid	スタンプ形石器	9.8	6.3	4.0	393.3	砂質頁岩	
G r-417	7 DGrid	スタンプ形石器	10.8	9.9	5.0	668.0	砂岩	
G r-418	4 EGrid	スタンプ形石器	8.6	9.4	4.1	468.6	砂岩	
G r-419	8 DGrid	スタンプ形石器	12.7	11.8	4.5	919.3	閃緑岩	
G r-420	6 EGrid	スタンプ形石器	8.5	7.8	4.5	456.3	砂岩	
G r-421	7 DGrid	スタンプ形石器	6.3	8.1	3.1	206.5	砂岩	
G r-422	3 EGrid	スタンプ形石器	5.2	6.8	3.3	179.1	砂岩	
G r-423	8 CGrid	スタンプ形石器	6.6	8.4	4.3	317.2	砂岩	
G r-424	5 EGrid	スタンプ形石器	6.2	7.8	3.3	257.3	砂岩	
G r-425	6 EGrid	スタンプ形石器	5.5	7.1	3.9	218.5	砂岩	
G r-426	6 DGrid	スタンプ形石器	5.2	3.2	3.2	222.7	砂岩	
G r-427	6 DGrid	スタンプ形石器	5.5	6.0	4.4	193.1	砂岩	
G r-428	5 DGrid	スタンプ形石器	10.0	5.7	4.8	557.3	緑色岩	磨石転用
G r-429	51 T r	打製石斧	(13.5)	5.5	1.9	(182.7)	石晶片岩	第1次調査出土

第5表 石器観察表(5)

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	備 考
G r-430	7 A Grid	打製石斧	10.6	5.2	1.6	83.5	粘板岩	
G r-431	4 J Grid	打製石斧	9.8	4.9	1.3	62.8	粘板岩	
G r-432	5 C Grid	砥石	3.7	4.2	1.2	29.9	砂岩	
G r-433	5 C Grid	砥石	4.6	5.0	2.3	53.1	砂岩	
G r-434	5 C Grid	砥石	4.9	3.0	3.0	94.7	砂岩	
G r-435	4 D Grid	磨石	6.8	8.5	4.4	461.3	閃緑岩	
G r-436	8 C Grid	磨石	(6.3)	6.8	4.3	(289.3)	砂岩	
G r-437	7 C Grid	磨石	10.0	(8.0)	3.6	(501.7)	閃緑岩	
G r-438	8 E Grid	磨石	10.2	8.8	3.4	571.7	閃緑岩	
G r-439	6 B Grid	磨石	11.4	9.1	4.2	823.6	閃緑岩	
G r-440	6 B Grid	磨石	11.3	8.3	4.2	762.4	閃緑岩	
G r-441	4 C Grid	磨石	(7.3)	6.5	3.1	(236.0)	砂岩	
G r-442	1号井戸	石皿	(13.8)	(16.5)	1.4	(763.6)	緑泥片岩	
G r-443	4 C Grid	石皿	(18.5)	(11.8)	2.6	(927.6)	礫岩	
G r-445	4 B Grid	ミニチュア打製石斧	2.0	1.2	0.5	1.3	砂岩	
G r-446	3 E Grid	ミニチュア打製石斧	1.7	1.1	0.4	0.9	ホルンフェルス	
G r-454	東5 C	石鏃	2.1	1.4	0.4	0.9	チャート	東地区出土
G r-455	東5 C	削器	3.7	2.7	1.2	10.7	チャート	東地区出土
G r-456	東6 D	磨器	7.4	6.3	2.1	143.4	砂岩	東地区出土
G r-457	東6 D	局部磨製石斧	7.1	3.3	2.4	63.1	粘板岩	東地区出土

V 上原遺跡の調査

1 遺跡の概観

上原遺跡は南小畔川右岸の台地上に位置し、南と西を向原遺跡にとり囲まれている。北は小畔川が蛇行する低地に面し、その境は崖線ではなく、ゆるやかな斜面がすべるように水田につらなっている。

安定した遺構確認面と現水田との比高差は約4m。しかし、その落差も遺跡北半の範囲で傾斜の率をゆるめ、南半ではほぼ平坦となり、確認面で75.5m前後を維持しつつ、向原遺跡に至る（第45図）。

調査区は、遺跡のほぼ中央を約400mにわたり南北に貫く形となった。排土の都合上、2回に分けて行なった表土削除の総面積は約20,440㎡におよぶ。

調査の結果、検出できた遺構は、住居跡が7軒、土壇が23基、集石土壇が19基、単独の埋裏が5基、溝が13条である。広大な調査面積のなかでは分布が散漫な印象を受けるが、各期・各遺構について、いくつかの集中や傾向が存在している。

これらのうち、13条の溝（第58・59図）は、覆土の特徴や、陶磁器の破片が出土したことなどから、近世期に造営されたものと判定した。また、第3号・第6号土壇（第52図）および第13号土壇とその周辺の掘り込みは、軸方向や覆土の特徴に、溝との有機的な関連をうかがえるため、同時期と判断してもさしつかえないものと理解した。

その他の遺構は、出土土器や覆土・形態から、すべて縄文時代中期に構築されたものと判断した。中期遺構は大きく勝坂系と加曾利E系に分離でき、前者は藤内を中心とする時期に、後者は加曾利EⅡからⅢ期にかけて、盛んに構築されたようである。

この両極の差は、遺構分布にも少なからずあらわれる。勝坂系で調査区の南半に進出する遺構はなく、集石は南小畔川際の斜面地に集中する。これらは、いくつかの群を成しながら、南に行くにつれ分布が散漫となり、第5号・第6号住居跡（第50図）の地点を日安に台地内側への進出を終える。

これに対し、加曾利E系の分布は第18号・第19号土壇（第52図）や第7号住居跡（第51図）、第4号埋裏（第57図）らが並ぶ一線を時期判定可能な遺構の北限とし、いくつかの土壇・住居・埋裏群を経つつ、南に接する向原遺跡まで、とぎれることなく続く。

7軒を調査した住居跡は、向山・向原の両遺跡とは異なり、確認面より下部の掘り込みがはっきりと識別できたものが多い。しかし、南に分布する第1号・第2号住居跡（第47図）は、向原遺跡の傾向と共通し、炉と柱穴のみが検出されたにすぎない。

また、これらは概して規模が小さく、たとえば、第6号・第7号住居跡（第50・51図）は3mほどの長軸長でしかなく、加えて、炉を屋内に残していない。前者は、遺物をふくめて、阿玉台系列の竪穴構築法にあたるかとも鑑測できる。

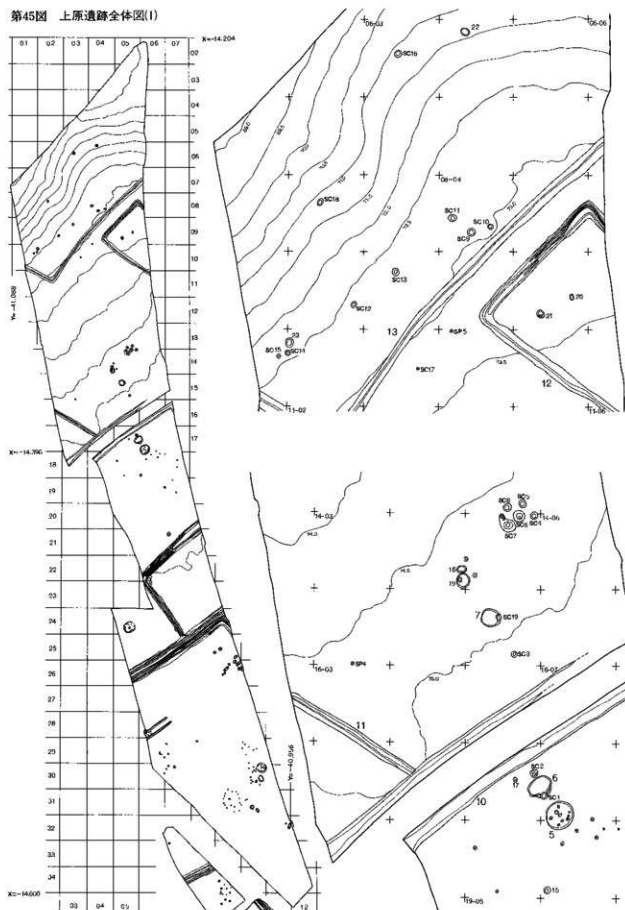
これに対し、土壇・集石・埋裏は、時期判定に窮するものもあるが、判明するものの間では鮮やかな対比を見せる。すなわち、土壇は出土土器のすべてが加曾利E系であり、集石は一部で加曾利E系が検出された（第56図）にすぎず、他はすべて勝坂系であった。そして、埋裏は、第5号埋裏（第57図）だけが勝坂系であるなど、分布を反映した構築期となっている。

このなかで、集石は土壇をともなうものだが、底石の敷設は見られない。また、北側斜面部に分布する20番台の土壇は出土遺物に恵まれず、勝坂系期の構築である可能性も残されている。

一方、遺物は縄文中期の所産がほとんどで、土器は勝坂・阿玉台系と加曾利E系が多い。遺構内への大量の一括投棄は見られず、散漫な出土状態である。

また、石器は撥形の手製石斧が中心で、大方がこの二時期に製作されたものだろう。先土器時代の石器は検出できなかった。また他に、小型磨製石斧と垂鉤りが1点ずつ出土している（第62図）。

第45図 上原遺跡全体図(1)



2 遺構と遺物

(1) 住居跡 (第47~51区)

第1号住居跡 (第47区)

第6号・第7号溝に破壊された上に、表土削除の後、すでに炉跡と埋嚢が露出していた状態で、掘り込みは検出できなかった。

柱穴の配置から類推すれば、平面形はほぼ円形で、直径3.5m程度の小規模な竪穴となろう。炉跡と埋嚢とを結ぶ線を主軸とするならば、約45°東に傾く。しかし、隅丸長方形を呈する平面形はこの軸よりずれて、北に振れている。

また、いづれの軸線を用いたとしても、柱穴の配置は対称とはならず、たとえ一部が2本の溝で破壊された想定しても、設定に別の規格が存在したことをうかがわせる。

埋嚢は正位に設置され、個体の下半は掘り方に合わせて切断されている。同じく上半も欠損するが、切断によるものか、後世の擾乱によるものかは判断できなかった。

遺物は加曾利E系の土器が37点出土したが、図示できたのは埋設されていた1のキャリバー形土器のみである。同番は幅広の沈線で文様を区画するが、懸垂文と口縁部文様帯との区画線が明確で、EⅡ式の範疇に属するだろう。

第2号住居跡 (第47区)

向原遺跡E区に程近い、調査区最南端で検出した。向原遺跡の傾向と同様、竪穴の掘り込みは検出できなかった。

表土削除後すでに炉跡が確認でき、周辺を精査した結果、13本の柱穴を検出した。これらの配置から想定できる竪穴は直径8.5mの円形と、かなり大規模なものである。

炉跡は中央2箇所で見出したが、炉辺の施設は存在しない。また、先後は確認できなかった。

遺物は加曾利E系の土器3点が出土したが、いずれも小片で図示できるものはない。

第3号住居跡 (第48区)

調査区最南端にあり、第2号住居跡の北東約10mで検出した。周辺には、第5号土壇や、いくつかのピット群も点在しており、今回の調査区のなかでは最も遺構が集中する一帯である。

2住と異なり、こちらは確認面から床面までの深さも20cmほどあり、竪穴部分の形態もまがうことなく把握できた。

開口部の形態は、直径約4.5mの円形で、やや北東から南西方向にひしゃげている。そのため、隅丸方形にも見える。

覆土は自然堆積の暗褐色系土で占められ、下層ほどに黄色味を増していく。

主たる柱穴は、断面図B・Cにかかる4本が深さに秀でており、棟を支えていたものと判断できる。しかし、それらを結ぶと正四角形とはならず、やや菱形になってしまう。このほか、壁際に浅い柱穴列があり、一部は連結して壁溝化している。

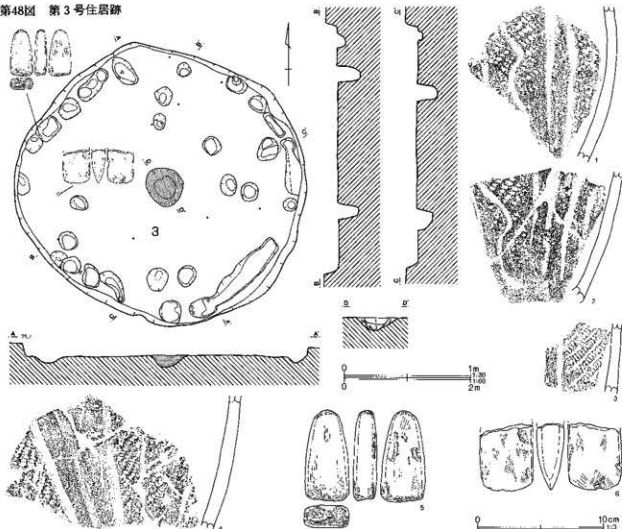
燃焼施設は中央の地床が、石囲いなどの炉辺施設やその痕跡は残していない。また、埋嚢も設置されていなかった。

遺物は、加曾利E系土器が15点、磨製石斧が2点、チャート剥片が2点出土しているが、図示できたのは6点である。

1・2・4は同一個体のキャリバー形土器胴部から底部片で、縄文部に蛇行沈線を加えている。また、3も同様だが、こちらの縄文は逆掛けの附加条原体を施文している。

一方、石器は磨製石斧の2点のみを示した。5は刃部に割傷や敲打痕を残したままで、6のような鋭利で弧を描く先端を作出していない。このままでは使用に耐えないが、製作途中というよりは、刃部再生の途中で放棄されたものと思われる。

第48図 第3号住居跡



第4号住居跡 (第49図)

24—05で検出した。調査区の限りでは、周辺に縄文時代の遺構はなく、単独で存在している。

平面形は長軸方向5.8m規模の楕円形で、主軸は北東方向に傾く。覆土は暗褐色系土の自然堆積で、下層ほどに黄色味を増す。

炉跡は住居のほぼ中央で検出した。開口部はほぼ円形で、鍋底状の断面形を呈する。さらに、南には燃焼部域を区切る炉辺石が設置されていた。

柱穴は10本検出できた。しかし、主柱を支えるに十分な規模のものはA断面にかかる1本のみで、主軸を対称軸にするなど、配置関係で見ても、規則性は得られない。

遺物は加曾利E II期の土器が377点、土製円盤が1

点出土したが、石器はチャート剥片が5点出土したのみであった。

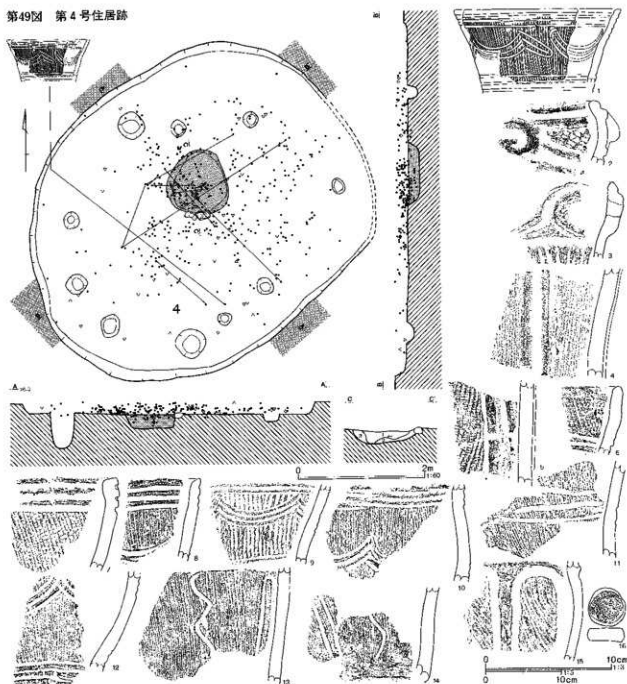
土器はキャリバー系深鉢（1—5）と連弧文系（6—14）に大別できる。前者の口縁部は隆帯区画がはつきりしており、渦巻も小さく巻いている。

一方、後者の描出線は、3本を1単位としており、口縁と胴屈曲部にめぐる横位線や、これから垂下する蛇行線もE II前半期の特徴をあらわしている。13・14は同一個体。

また、15は櫛状工具による条線を地文とし、U字状の区画を設ける。器形は鉢形と思われるが、判然としない。

16は土器片利用の土製円盤である。

第49図 第4号住居跡



第5号住居跡 (第50図)

調査区中央やや北よりの、斜面地直上に位置している。第6号住居跡とは約2mを隔てるのみで、両者並列するように構築されている。

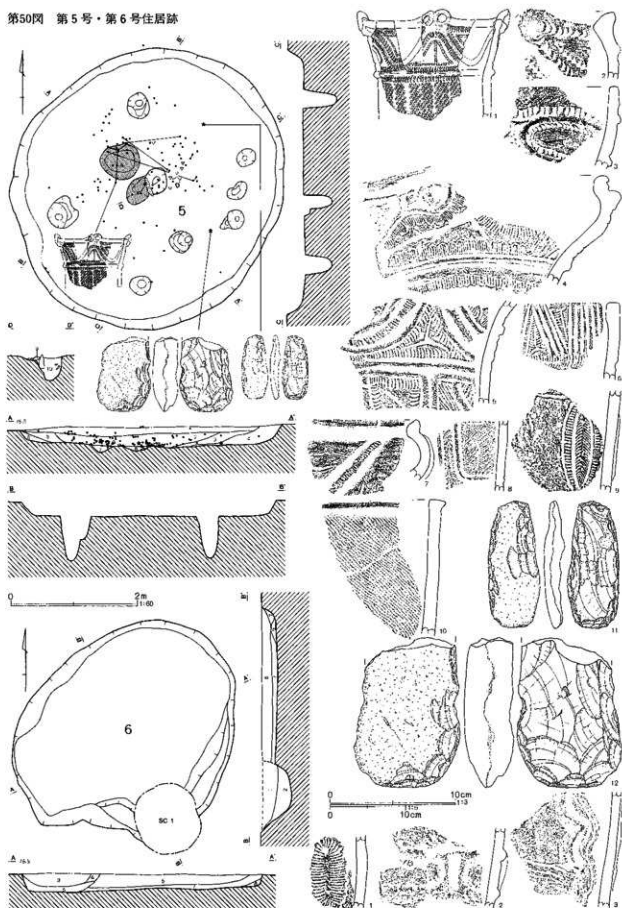
平面形は約4.5mの円形、壁面は緩やかで、確認面からの深さは約30cmをはかる。覆土は暗褐色系土の自然堆積で、下層ほど黄色味を増す。

炉跡は2箇所で見出したが、中央のそれは深さ40cm

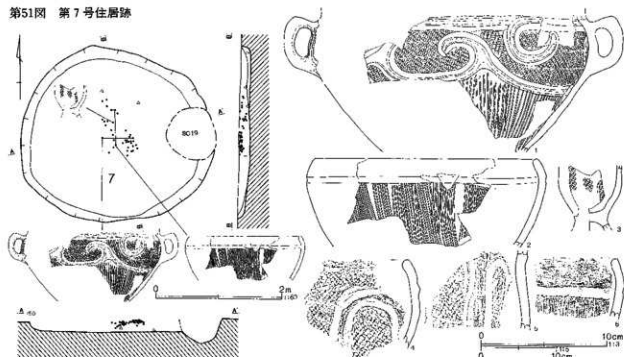
ほどのピットと重複しており、両者の境に炉辺石が埋め込まれていた。炉床はこのピットの上まで進出しているが、炉辺石の掘り方なのか、なにかの埋置施設なのか、はたまた炉改築の際に放棄された柱穴なのか判断がつかない。

柱穴は、この小穴を含め、8本を検出したが、いずれも深さに不足はない。このうち5本が南東側で列になるが、北西の2本と対になることを考えれば、両端

第50図 第5号・第6号住居跡



第51図 第7号住居跡



の2本を用いて立てた4本の主柱で上屋を支えていたと考えられる。

遺物は、勝坂・阿玉台系の土器が103点、打製石斧が2点出土している。

1から5は口縁部に文様帯を設定し、鋸歯を主描線とする構成が展開する型である。1は単段、4・5は変化を加えながら複段におよぶものである。また、2は阿玉台系列の口縁部片かも知れない。隆帯鰭の処理は三角押や爪形、平行沈線で行なわれ、半截竹管が主たる施文具となる。

これに対し、6は小型円筒土器、9は抽象文土器の一部と見なせよう。

一方、打製石斧は2点とも楕形で、12は現存でさき約520gもある大型品である。

第6号住居跡（第50図）

第5号住居跡の至近で、第1号集石と重複する。同集石の石が上層まで遺存していることから、こちらが後出するものと判定した。

平面形は長軸約4mの楕円形で、炉や柱穴等の施設はない。覆土は他と同じ暗褐色系土だが、3から5層は他の重複遺構の存在を示唆している。しかし、報告

までに見解を整理することができなかった。

遺物は勝坂・阿玉台系土器が29点出土している。3点を図示したが、1は藤内期抽象文土器の胴部片、2と3は阿玉台Ⅱ式土器である。

第7号住居跡（第51図）

調査区北の15—05で検出した。周辺には同期の上層や埋藏が散在している。また、第19号集石と重複するが、集石礫が上層に遺存することから、同号集石が後出すると判断した。

形態は約3.2mのはほぼ円形で、炉や柱穴などの施設は一切ない。覆土は暗褐色系土の自然堆積で、下層ほど黄色味を増す。

遺物は、加曾利E系土器が76点と、剥片2点が出土した。これらは中央上層に集中しており、他の箇所では皆無に等しい。

出土土器はEⅢ期の特徴を兼ね備えるもので、4と5は連続波状区画文土器である。また、1は文様帯を設定する両耳壺、2と6が鉢形土器、そして、3が台付き土器である。

(2) 土墳 (第52・53図)

今回の調査では23基の土墳を検出した。これらは、覆土や形態の特徴から近世期の造営と判断できる第3号・第6号・第13号・第20号の4基を除き、すべて縄文時代中期に構築されたものである。

出土土器から見れば、なかでも加曾利E系が多く、勝坂系が主体となるのは第23号の1基のみである。

紙数の関係上、これらのすべてを詳述するわけにはいかない。そのため、代表的な数基についてのみ以下に示すこととする。

第1号土墳 (第52図・第53図1～6)

調査区南に位置し、第2号土墳と近接する。円形の開口部から急激な壁面を経て、平坦な墳底に至る鍋底形の断面形状は、たとえば第12号・第14号・第16号や第21号など、中期土墳の基本型である。

さらに、この傾向は隣接する向原遺跡でも認められる。しかし、上原群の方が一般に深く、遺物の出土点数も豊富である。

本墳よりは68点の中期土器が出土したが、このうち64点が加曾利E系である。遺物は中から下層より、まっぴんなく出土しているが、大型破片は下層に多く、また、壁際に少ない傾向がある。

出土土器は6点を示したが、1・3～5が連弧文系土器である。1は、連弧を彩るはずの渦巻や縦位連絡線が横位文と化した連弧本体をしのぎ、優先的に蛇行垂下する。

第2号土墳 (第52図・第53図7)

第1号とはほぼ同位置、そして形態の特徴もともにする。覆土は暗褐色系土の自然堆積であるが、第10・11層は埋没初期の段階で周辺地山が崩落した層で、これが確認面近くの開口に反映されていると考えた。

遺物は、7に示した、縦位沈線进行全面に施した鉢形土器が1点出土したにすぎない。

第3号土墳 (第52図)

軸長に秀でた長方形や長楕円の開口部形をもち、覆土は黒褐色系土が単純に堆積する特徴をもつ土墳である。同列に分類されるものとしては、第6号・第13号・

第20号がある。

本墳周辺で土墳番号を付与しなかった数基を含め、近世期と判断される溝の方位軸との有機的関連がうかがえる。同期と判断しても大過ないだろう。

第4号土墳 (第52図・第53図8・9)

調査区南半で、第12号と近接して検出した。

開口部の円形を基調とするが、西に同形の張りだしをもつ。重複ともとれるが、土層観察の結果は分離に難く、足場ととらえてもよいのかも知れない。

遺物は中央部の中から下層にかけて、加曾利E系土器が10点と、打製石斧が出土した。

8は連弧文系土器だが、口縁と胴屈曲部の横位区画のみで連弧そのものは描かれていない。また、9は撥形平皿の欠損品である。

第5号土墳 (第52図・第53図10～16)

第3号住居跡と近接し、隅丸長方形の小壁穴様の掘り込みをもつ。

覆土は住居跡の埋土と共通し、遺物出土の傾向も類似する。51点の加曾利E系土器と、削器が出土しているが、土器は連続波状区画文がもっぱらで、EIII期の所産となるだろう。

第7号土墳 (第52図)

円形鍋底は他と共通するが、掘り込みは浅く、墳底に小穴を加える。だが、この部分の覆土である第4層からは、施設の設置などの所作を読みとることができなかった。

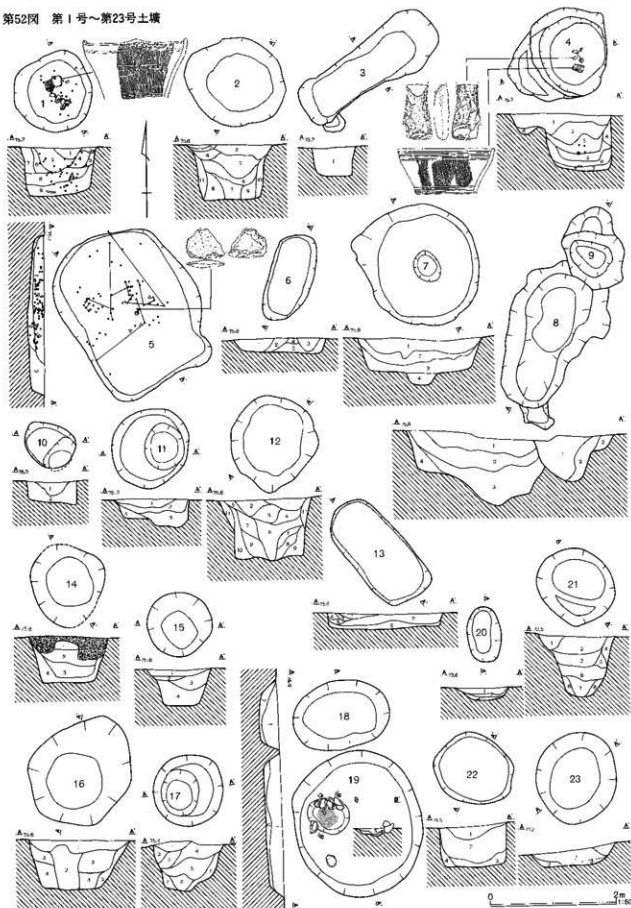
遺物は加曾利E系土器が34点出土しているが、図示できるものはなかった。

第18号土墳 (第52図・第53図17・18)

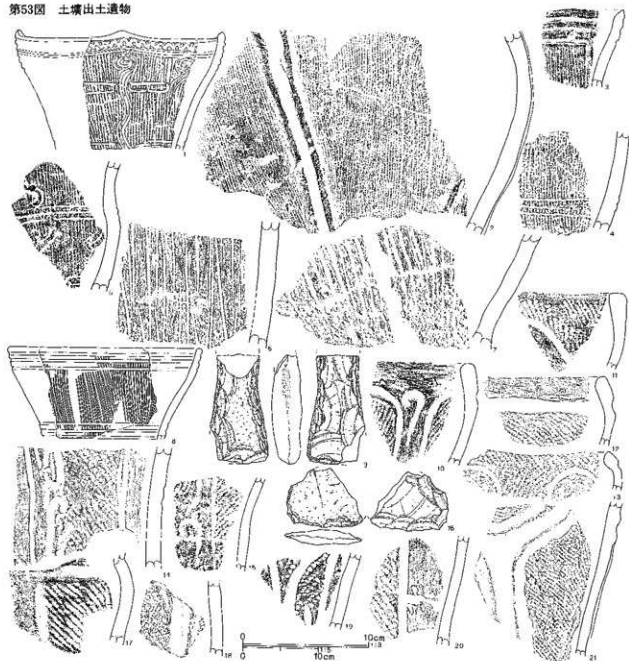
調査区北に位置し、第19号と接せんがばかりに構築されている。開口部は楕円で浅く、第19号の断面形と類似する。証明はできないが、同号の付属的施設の可能性も想定できる。

遺物は、加曾利E系土器7点が出土した。図示したのは、いずれも太く浅い沈線で懸垂文を区画するキャリパー形土器胴部片である。

第52図 第1号～第23号土塊



第53図 土壌出土遺物



第19号土壌 (第52図・第53図19～21)

第7号住居跡と近接し、連携をもつと思われる遺構である。径2mほどの円形鍋底土壌であるが、西よりに燃焼施設をもつ。縁辺に設けられた碟を見れば、これは炉辺石を備えた地床炉そのものといえる。

他に際立った特徴はないが、燃焼施設の存在より、住居跡として報告すべきであったかもしれない。

遺物は、加曾利E系土器が20点と打製石斧の根片が1点出土している。21は渦巻文系の胴部片である。

第23号土壌 (第52図)

調査区北端の斜面地に位置し、集石群のただ中にある。形態は、円形かつ鍋底だが、壁傾斜がゆるく、確認面からの深度もやや浅い。

遺物は、5点の勝坂系土器のみであるが、今調査で検出した土壌のうち唯一同系が優勢な土壌である。また、分布位置から判断すると、第22号も同様な構築期が与えられる可能性もある。

(3) 集石 (第54～56図)

今回の調査では19基の集石を検出した。これらはいずれも集石下に掘り込みをもつ、いわゆる集石土壇であり、分布や形態、出土遺物などから、すべてが縄文時代中期に構築されたものと判断できる。

分布は調査区北半に集中し、いくつかの群を成するが、北端斜面地にもっとも多く、次いで、14-06グリッド付近にまとまりがある。

遺物は、土壇と異なり、勝坂系の土器が多い。大方がこの期に造営されたものだろう。ただし、第18号は小片ながらも、明らかに加曾利E系が卓越し、同期に属する疑いがもたれる。

土壇の形態は、円形を基調とし、断面形は緩やかな壁をもつ椀形になるものが多い。集石の状況はいくつかの型にわかれるが、多少の差こそあれ、墳底までに間隙があり、平石などを敷きつめた型は存在しない。集められた石の大きさは5～10cm大が多く、受熱赤化したものは少ない。また、これだけの石を持ち寄りながら、石器・剥片類は1点も出土していない。

紙数の関係上、これらのすべてを詳述するわけにはいかない。そのため、代表的な数基についてのみに以下に示すこととする。

第1号集石 (第54図・第56図1～5)

第6号住居跡と重複するが、本壇の集石部が遺存している。このことより、本壇が新期に構築されたものと判断した。

集石は、下部にある上壇開口部の範囲全体に散乱する。しかし、垂直分布は上層どまりで、下層には至らない。第2号・第8号・第15号などが同じ型で、集められた石は小ぶりのものが多い。

遺物は、中央上層より62点の土器がまとまって出土した。すべてが勝坂・阿玉台系である。

1は一端のみに突起をもつ小型の円筒土器である。竹管で施した平行沈線で上下を区画し、縄文を地文として縦や斜位の基幹線内を線分や三又印刻文で充填する。墓内パネル文型の初期型だろう。

一方、2は把手つきの全面縄文土器、3は蛇体文つ

きの浅鉢、5はその底部である。また、4は阿玉台系の土器で、隆帯脇と文様帯内の波状線を単列の角押で描出している。

第3号集石 (第54図)

第1号と同じく、集石の垂直分布は上層にとどまるものの、下部土壇の中央にまとまるものである。

第4号・第9号・第11号などが同型で、個々の石は第1号の類型より大きい。遺物は出土しなかった。

第5号集石 (第54図・第56図6～8)

14-06グリッド付近でまとまる5基のうちの一つである。集石の型は第1号と同様だが、やや大きめの石が多い。

遺物は出土したすべてを図示した。6から8は同一個体で、隆帯による槽門区画の脇や内部を角押文で埋めつくす。

第6号集石 (第54図)

集石の平面分布は第1号の類型と同様だが、こちらは下層にまで垂直分布が達する。他に類似するものはないが、強いて求めるとするならば、第14号がこれに相当しようか。遺物は出土していない。

第7号集石 (第54図)

19基のなかで唯一円形ではない開口部を擁する。複数基の重複ともとれるが、集石の散乱は開口部形を反映した範囲に広がっている。集石型は第1号と同型に属する。遺物は出土していない。

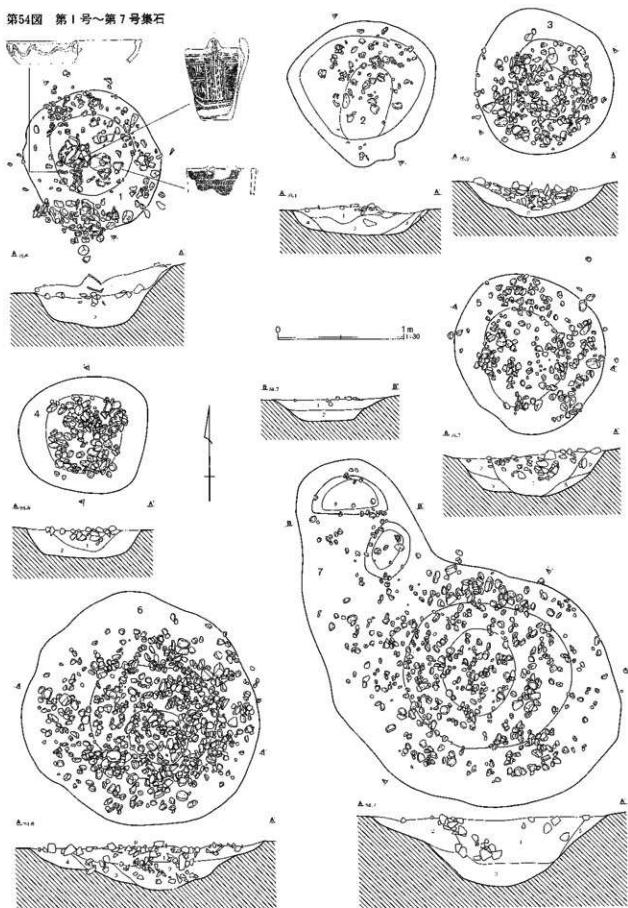
第10号集石 (第55図)

集石とは称したもの、下部土壇の中央上層にわずかな量が集積されただけのもので、第18号が同じ類型に属する。分布は北端斜面地の集石群内にあり、同じ日途をもって構築されたものとしてよいだろう。加曾利E系土器の小片が1点出土している。

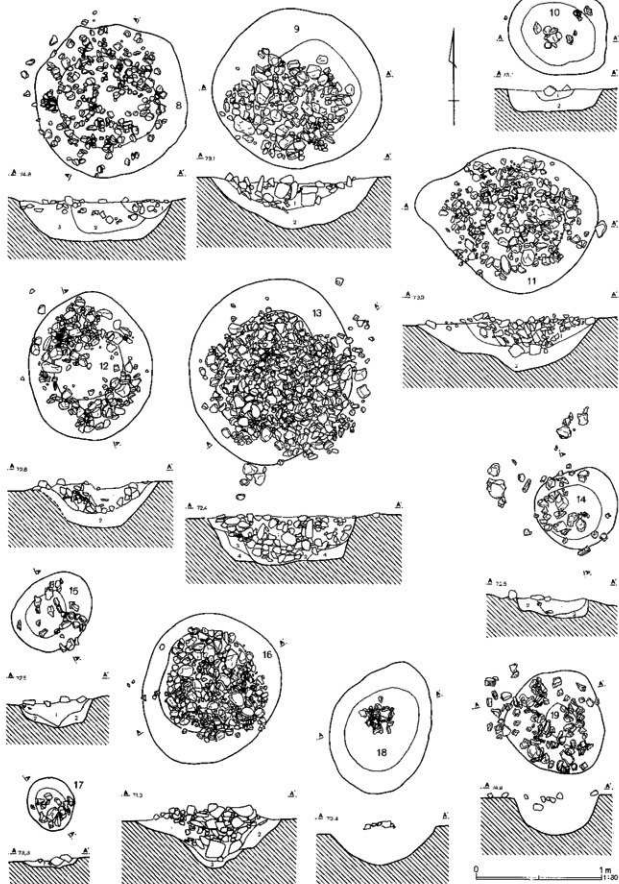
第12号集石 (第55図・第56図9)

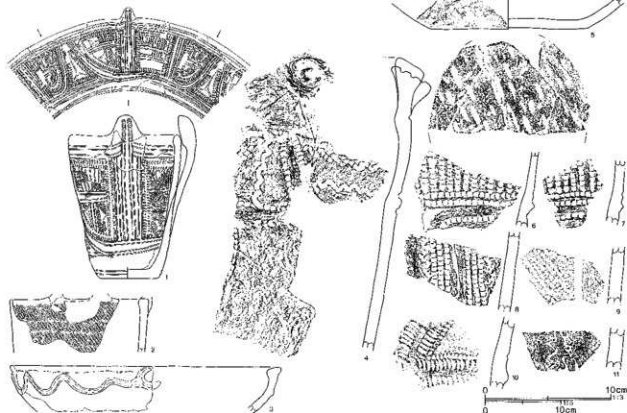
中央上層にまとまりを有する、第3号と同じ類型であるが、さらにその内部では極端に石の数が少ない。同じような視点で見ると、第1号があり、第4号・第8号などもそのきざしがある。現状では判断つかないが、第1号の土器出土状況なども鑑みると、空白部に

第54图 第1号~第7号集石



第55図 第8号~第19号集石





器物を設置したあらわれとも検測できる。

遺物は勝坂系4点と加曾利E系2点の土器が出土した。9は後者のキャリバー形土器の胴部片である。

第13号集石（第55図）

集石が、下部土壇開口部の中央にまとまり、しかも下層にまで密に充塞されているものである。同様な型として第16号があげられる。

集められた石は、各類型のなかでは最も大きいものが多いが、これらが意図的に組まれた様子は確認できなかった。

遺物は加曾利E系土器が1点出土したのみである。

第18号集石（第55図・第56図10・11）

第10号集石と同類型に属し、土器も同じ箇所から出土している。土器は13点が出土しており、うち11点が加曾利E系であった。拓影では勝坂系2点を図示したが、より後出する可能性もある。

（4）埋篋（第57図）

第1号埋篋（第57図1）

調査区南で検出した。埋篋は正位で、下半分を切断する一般的な型だが、掘り方は広く、かつ土器の下にもう一段の掘り込みをもつ。焼土はなく、土器埋設炉とは考えられない。しかし、この異様がなにを反映するのは判断がつかなかった。

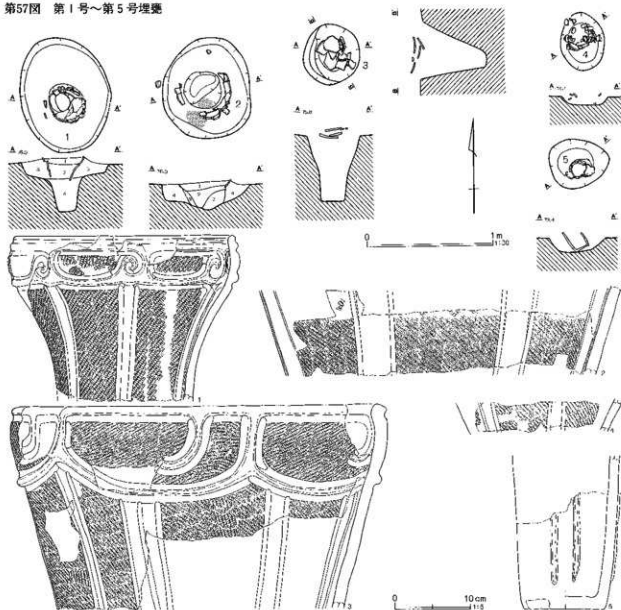
埋置土器は加曾利EⅡ期のキャリバー形土器で、現存部での渦巻は小さく、同方向で統一されている。しかし、沈線はやや幅広く、文様帯下位区画陰帯も楕円文に合わせて蛇行する気配を見せている。

第2号埋篋（第57図2）

第1号と10mほどの距離をおいて検出した。埋篋は正位で個体の上下が切断されている。掘り方はやや大ぶりで、土器内外から焼土を検出した。あるいは住居跡の土器埋設炉として供されたものかもしれない。

埋置土器は散乱著しく、多くの部分を欠く。大型のキャリバー形土器の胴部である。

第57図 第1号～第5号埋壺



第3号埋壺（第57図3）

調査区南で検出した。第1号・第2号埋壺とは約15mの位置にある。

出土状況は個体を正、あるいは逆位に埋置したのではなく、意図的な破壊の後に、半面分の大型破片が並べられたような状態であった。

果たしてこれを埋壺と称すべきかには疑問が残る。しかし、現存の資料は、胴下位を切断した痕跡を残しており、こちらは埋壺で多用される手法である。

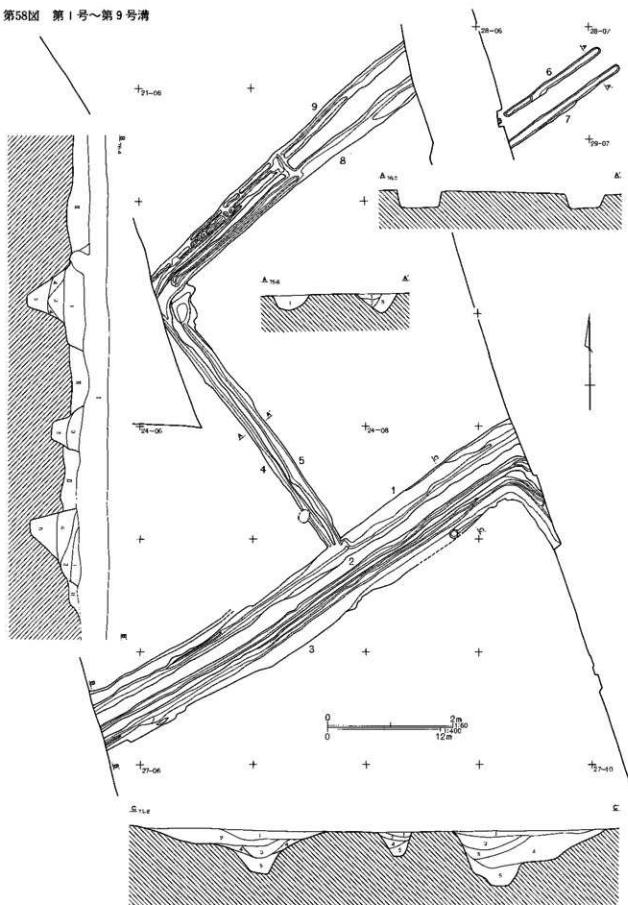
掘り方は、深さ約50cmの柱穴状で、埋壺のそれとは

かけ離れている。土器はこの小穴を封鎖するかのようには横たわっていた。

残念ながら、報告時までにこれら諸状況を吟味し、整合性のある解釈を導き出すことかなわなかった。

出土土器は、キャリパー形土器の大型品で、実測図前面の半面のみが遺存していた。口縁部文様帯内の渦巻文は退化し、隆帯の痕跡を残しつつも、楕円区画文と完全に融合している。また、下位区画線は、楕円区画文の形を反映して連弧化している。加曾利EⅢ期の所産である。

第58図 第1号～第9号溝



第4号埋甕 (第57図4)

16—03の他と隔絶した位置にある。掘り方は浅く、上下を切断した埋置土器にほぼ見合うだけの大きさであった。土器はキャリバー型土器の胴部である。

第5号埋甕 (第57図5)

調査区北端の斜面地で検出した。埋甕と称したもの、土器は斜位に出土し、断面観察の限りでは土壌か埋甕かの判断がつかなかった。土器は無文地に隆帯が垂下することから、勝坂・阿玉台系いずれかの底部と思われる。

(5) 溝 (第58・59図)

溝は、計13条を調査したが、付番号にはあいまいな部分もある。例えば、第4号と第5号は、第1号を目安にとぎれ、屈曲しつつ、第8号と合流する。また、第8号と第9号との間には、両者を連結する溝が加えられている。

このように、これらが時期をたがえて別個に機能していたとはいえない。そのため、ここではすべてを一括して説明を加える。

各溝がめざす方向性は、南西—北東方向でほぼ一致するか、これと直交する。この傾向は、南に接する向原遺跡とも共通し、これらが単機能ではなく、普遍的な用途として供されていたことを示している。

複数条が平行するものも特徴であり、間隔をあけるもの(第6号・第7号)、接せんがばかりに近づくもの(第4号・第5号)、出合っては別れるもの(第12号・第13号)などがある。

各溝の断面形は、漏斗状から箱築研状のなかで推移し、たび重なる掘り返しや補修などのためか、片流れになるものも多い。覆土は黒褐色土系の自然堆積がもっぱらである。

造営期を示す遺物は、若干が出土しているものの、図示できなかった。向原遺跡の成果や覆土の特徴なども合わせ、近世に構築されたものと考えられる。おそらく、敷地や農地境の確定に関わるものだろう。

(6) 遺構外 (第60—62図)

土器 (第60図・第61図37—60)

上原遺跡よりは、表面採集を含め、計8,084点の土器や陶磁器類が出土している。このうち、平安時代土師器が26点、陶磁器類が150点を占めるが、主体となるのは7,908点の縄文土器であり、そのすべてが縄文時代中期の所産である。

中期前半の勝坂・阿玉台系は1,009点が出土した。調査区内の分布で見ると、これらは現道を境とした北半に片より、南半では遺構出土以外皆無に等しい。とくに南北列7から10グリッドの斜面地に集中し、そこには集石群が分布する。

1から31が同系の土器で、極端な古新はなく、大方が墓内期に製作されたものだろう。多くは断片的な構成が観察できるのみで、それぞれを詳しい器種で特定することはできない。

主要模図を練どる隆帯脇の処理は、角押、三角押、爪形の刺突系列が占める。平行沈線は9と13に見られるが、竹管施文で、1本引きや単沈線で隆帯脇をなぞるものは存在しない。

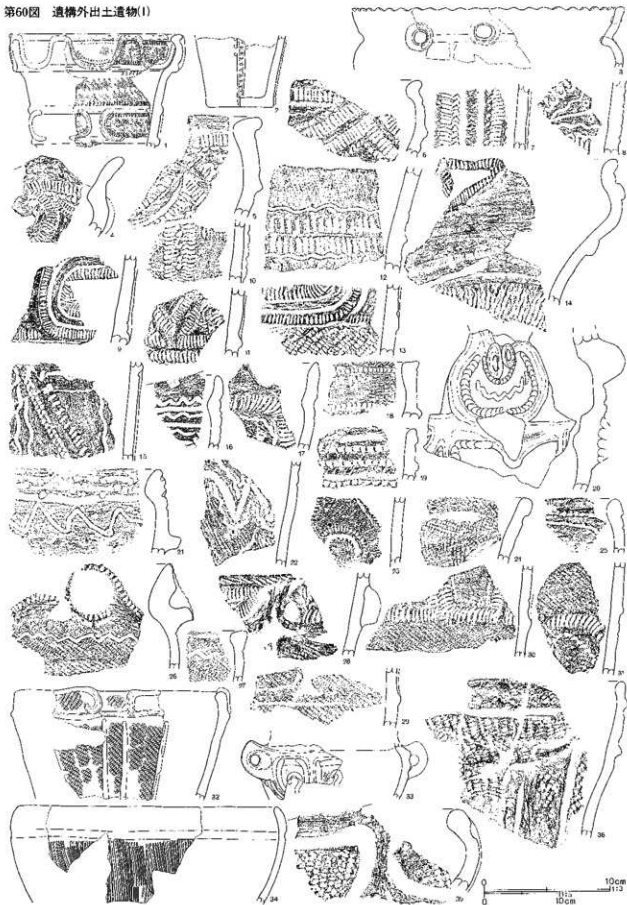
1は、粗文帯をはさみ、鋸歯や楕円を基調とする複段の文様帯を重層させる構成だが、縄文地文を施している。また、4から6は同じような構成の破片と思われるが、こちらには地文縄文がない。

3の有孔土器は、粗雑なつくりと孔部製作の技法は器台と見まがうばかりである。しかし、さざ波状の口縁と、胴上位に屈曲部をもち、これが反転、器台となるとは思えない。屈曲下の丸味を帯びた器形曲線からすれば、浅鉢の上位である可能性が強い。

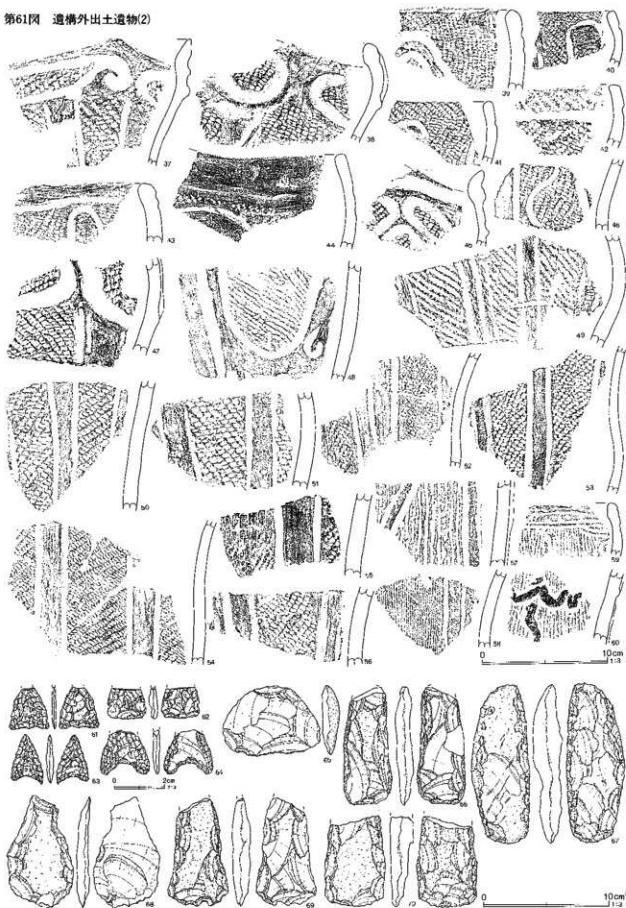
これに対し、26から31は同一個体片であり、縄文地に爪形の隆帯脇処理を施す。抽象文土器の系列と思われるが、核心部分が欠落し断定はできない。25は阿玉台Ⅱ式口縁部片である。

一方、中期後半の加曾利E系は、6,899点が出土した。こちらの分布は、勝坂・阿玉台系とは逆に、南北列20グリッド以南の調査区南半に多い。とくに28から31列に集中し、ここには第1号から第3号住居跡など

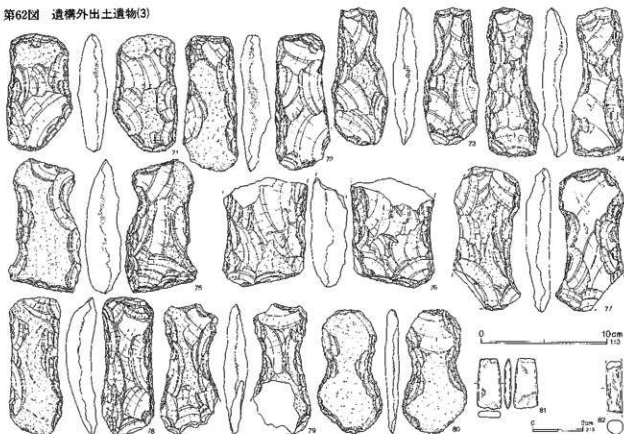
第60図 遺構外出土遺物(I)



第61图 遗物出土物(2)



第62図 遺構外出土遺物(3)



の同期遺構の集中がある。

32から60が同系と、それにとりまう土器で、多くは加曾利EⅡ中段階からⅢ期にの所産にあたる。

32の口縁部文様帯は、渦巻と楕円を繰り返す、同系キャリパー形土器の一般形をとらず、降帯脇の沈線なぞりも省略されている。胴部懸垂文は無文帯となるべき部分にも縄文が施文されており、違和感の多い資料である。連弧文系の繁栄でキャリパー形の構成が乱調をきたしたEⅡ中段階の典型例となろう。

他のキャリパー形土器は楕円と渦巻の融合が進んでおり、37を除き、EⅢ期に降るだろう。胴部破片も、39から44までの連続波状区画文の系列と見分けのつかないものもあるが、捺糸文地に降帯懸垂文を貼付する57を除き、おおよそ同じ地期の所産だろう。

この他、45の渦巻文系土器、59の連弧文系土器、33の両耳壺、34の条線全面施文鉢、60の曾利系甕形土器などが出土している。

石器 (第61図61～70・第62図71～81)

上原遺跡よりは、表面採集を含め、111点の石器類が出土した。このうち、剥片類62点を除いた49点が石器製品である。すべて縄文時代のもので、先土器時代に属する石器は検出されていない。ほとんどは土器の主体期にとりまうものとして大過ないだろう。

石鏃は遺構外より7点が出土した。同じ時期が主体となる向原遺跡と比較すると、少ない感を受けるが、これか狩猟具であることを考えれば、より台地の内部にある同遺跡の卓越が納得できる。

4点を図示したが、凹基と平基が拮抗する。61から63が黒曜石製、64がチャート製であるが、前者の方が小さく、調整剝離も入念である。

削器は遺構外より大小3点が出土した。うち1点を示したが、1次剥片を利用した横刃形のもので、第5号土壌出土品と類似する。

一方、向原遺跡と同じく、縄文石器群の主体をなすのは打製石斧である。遺構内外より計31点が出土した

が、このうち27点が遺構外と溝への混入品である。

15点を図示したが、短冊から楕形が主流を占め、着柄を意図した縁加工との兼ねあいで、略分銅形に近づくものがある。

71・73・78は、勝坂系土器が火勢の南北列07や11グリッドより出土した。したがって同期に製作されたものだろう。だが、これらと他とで、形態や技法での明

らかなちがいは見られない。

81は小型の磨製石斧で、刃部にわずかな欠損があるが、利器として用いられたかは判断できない。

石製品 (第62図82)

1点が出土した。蛇紋岩製の垂飾りで、欠損品のため詳細は不明である。

第6表 石器観察表

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	備 考
3 住 - 5	3号住居	磨製石斧	7.2	3.5	1.9	115.5	緑色岩	
3 住 - 6	3号住居	磨製石斧	(5.2)	4.3	2.2	(93.9)	緑色岩	
5 住 - 11	5号住居	打製石斧	10.0	4.1	1.6	75.4	砂岩	
5 住 - 12	5号住居	打製石斧	(11.8)	8.5	3.9	(517.6)	砂質頁岩	
4 土 - 9	4号土壇	打製石斧	(8.6)	(4.6)	2.4	(123.0)	砂岩	
5 上 - 15	5号土壇	削器	(4.8)	(6.1)	1.3	(36.7)	砂質頁岩	
G r - 61	31Grid	石鏃	(1.7)	1.6	0.2	(0.5)	黒曜石	
G r - 62	32Grid	石鏃	(1.2)	1.5	0.3	(0.7)	黒曜石	
G r - 63	12Grid	石鏃	2.0	1.3	0.3	0.6	黒曜石	
G r - 64	32Grid	石鏃	(1.7)	2.0	0.3	(1.0)	チャート	
G r - 65	34Grid	削器	5.5	7.8	1.3	68.8	砂岩	
G r - 66	1・2号溝	打製石斧	(9.4)	3.9	1.3	(69.8)	泥岩	
G r - 67	表採	打製石斧	12.5	4.7	2.3	142.7	砂岩	
G r - 68	24Grid	打製石斧	8.8	5.3	1.0	46.8	砂質頁岩	
G r - 69	表採	打製石斧	(8.5)	4.9	1.5	(65.0)	砂質頁岩	
G r - 70	29Grid	打製石斧	(7.1)	4.8	1.8	(77.2)	砂岩	
G r - 71	11Grid	打製石斧	9.3	5.2	2.3	131.4	砂質頁岩	
G r - 72	2号溝	打製石斧	10.8	4.3	2.3	137.7	砂岩	
G r - 73	11Grid	打製石斧	10.9	4.4	1.9	107.3	ホルンフェルス	
G r - 74	21Grid	打製石斧	11.8	4.2	1.8	121.3	砂岩	
G r - 75	17Grid	打製石斧	10.6	5.8	2.9	200.5	ホルンフェルス	
G r - 76	1号溝	打製石斧	(8.5)	(6.7)	2.9	(209.4)	砂質頁岩	
G r - 77	2号溝	打製石斧	11.3	(5.2)	2.0	(139.3)	砂質頁岩	
G r - 78	07Grid	打製石斧	10.9	4.2	2.0	136.4	ホルンフェルス	
G r - 79	表採	打製石斧	10.3	(4.7)	1.9	(86.8)	砂質頁岩	
G r - 80	3号溝	打製石斧	9.8	5.2	1.1	67.4	安山岩	
G r - 81	30Grid	小型磨製石斧	4.0	2.0	0.5	9.3	蛇紋岩	

VI 向原遺跡の調査

1 遺跡の概観

向原遺跡は、生活道路をはさんで北に上原遺跡、西に飯能市芦刈場遺跡、そして、南では西久保遺跡と隣接する。今回の調査区より見た至近の低地は、上原遺跡をはさんだ南小畔川岸であり、周辺に窪地や、水源となる湧水等はない。調査区内はほぼ平坦で、遺構確認面の標高は76m前後で推移する。

調査は遺跡の東を南北に貫く約11,700㎡が対象である。だが、全面で精査が可能であったわけではない。近年の攪乱は広範におよび、埋設管などへの配慮も相まって、表土削除を断念した箇所がいくつもある。

その結果、細かくわかれてしまった調査区に対しては、第63図に示したような、A～E区の呼称をもちいて調査を進めた。だが、工程の進行とともに区名を付与したため、順列が前後してしまった箇所もある。

検出した遺構は、住居跡が5軒、土壇3基、集石1基、単独存在の埋壕2基、竈穴10基、溝7条である。そして他に、住居跡と同時期に属すると思われるビット群をA・D区で多く検出している。

これらのうち、溝(第75図)と、第34号土壇(第71図)のような、長方形から長楕円の形態をとる一部の土壇は、覆土の特徴や、陶磁器の破片が出土したことから、近世期に構築されたものと判断できる。また、第27号土壇からは平安時代の古付甕が出土した。

これに対し、その他の遺構は、縄文時代に帰属し、炉穴(第74図)が早期後半にあたる条痕文系期であるほかは、無数のビットもふくめ、出土土器から、中期後半の所産であると判定した。

だが、縄文遺構の確認は困難がともない、とくに住居跡は3軒までが確認面からの掘り込みを検出できなかった。また、これを検出できた2軒にしても、当該期の通念からかけ離れた形態で報告に及んでいる。

このうち前者は、埋設土器や焼上の散布、柱穴の配置などの総合的な判断によって認定したものである。また、他にいくつかの地点で遺物の集中出土が見られ

たが、その場に遺構の存在を確認できなかった。このような状況からすれば、集落分析には若干の憂いを残す結果となったことを認めざるをえない。

その上で、中期後半における遺構や遺物の分布を総括するならば、調査区の北半分は片よりが見られ、北に接する上原遺跡の南側と同質の集落であると判断できる。両遺跡の線引は大字の境となる道路を目安としており、遺跡範囲を確定する根拠に乏しい。両者の統合か、分離に対する再検討が必要だろう。

出土遺物は加曾利E期、なかでもEⅡからEⅢ期のものが大半である。土器はキャリバー系の深鉢を主体とし、連続波状文、連弧文系の個体がこれに混じる。また、大甕や鉢形土器もわずかながら出土している。

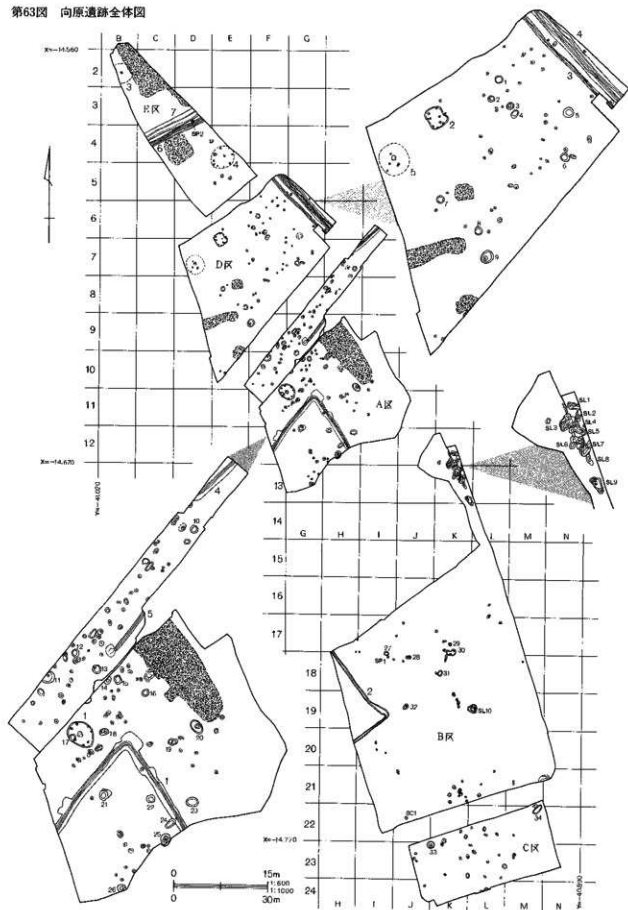
一方、石器は、先土器時代のナイフ形石器なども出土している(第77図)が、大半は土器の主体期と同一期の所産であろう。楕形の打製石斧を主体とし、磨製石斧・磨石・石皿などがこれに加わる。また、第4号住居跡では、石棒の断片が出土した(第67図)。

前述したように、隣接する上原遺跡でも同じような集落が検出されており、両遺跡を隔てる根拠はない。しかし、向原遺跡の出土土器は一般に、上原遺跡のそれよりは若干新しい傾向がある。これらより、時代とともに台地の奥へ進出した継続的な集落変遷を想定することも可能である。

その他、特記すべきものとして、第1号住居跡では打製石斧の素材になるだろう剥片がまとまって出土している(第64図)。また、集落と隔絶したB区で中期前半期の単独埋壕も検出している(第73図)。

そして、第14号土壇(第70図)出土土器の内部は、他の覆土と異なる小礫で満たされており、他遺構で実施した炭化材や種実類の同定とともに、礫種の判定委託を実施した。付録もあわせて参照されたい。

第63図 向原遺跡全体図



2 遺構と遺物

(1) 住居跡 (第64～69図)

第1号住居跡 (第64～66図)

A区北で検出した。ほぼ同期の第17号土壇と重複しており、同土壇の方が新しいものと判断したが、墳底の深さは住居跡のそれより浅く、また、壁際の重複も最小限のものであった。したがって、平面形態などの把握に支障はない。

平面形は北西—南東に長い楕円形で、やや歪みがある。また、この方向性は、炉の軸方向と対比するとかなりの傾きがある。

覆土は暗褐色系土で充たされており、下層ほどに黄色味を増す。床面はほぼ平坦だが、一部がとくに踏み固められたような痕跡はない。

燃焼施設は約80cm規模の方形を呈する地床炉で、埋設土器や礫は検出していない。しかし、焼土の形成面は中央に集中し、方形の掘り方すべてに広がるわけではない。そして、周囲の非赤化部分には、いくつかの小穴が検出できた。

この小穴は石囲炉の礫設置部の掘り方と思われる。加えて、住居跡内より出土した礫にはこの小穴に合致するような形態や大きさのものはない。これらより、本来は石囲炉であったものが、住居の廃絶後、なんらかの事情により、その礫を人為的に抜き去られたものと判断した。

柱穴は壁下にめぐる7本が検出できた。このうち、東の小穴を除いた6本がそれぞれ封関係となり本来の用途に供されていたようである。だが、これらの対称軸は炉の軸方位ではなく、竪穴平面形の軸方位に符合している。

遺物は、土器が接合後で234点、打製石斧が17点、剥片が11点出土している。打製石斧と分類した17点のうち、6点はその製作を意図して留保しておいた素材と思われるものである。

これらは北西に片よって分布しており、中央に向かうにしたがい希になる。床面に接するものはほとんどなく、壁際ほど覆土の高い位置に分布している。土器

の接合関係も、北西を基底とし、中央に向かう三角形の範囲がもっとも多い。

このほか、南側の覆土中には20cm大の砂岩礫がまとまって投棄されていた。これらは、前述したとおり、炉辺石とは見えない。そして、炉内の覆土からオニグルミの炭化種実が42点出土している。

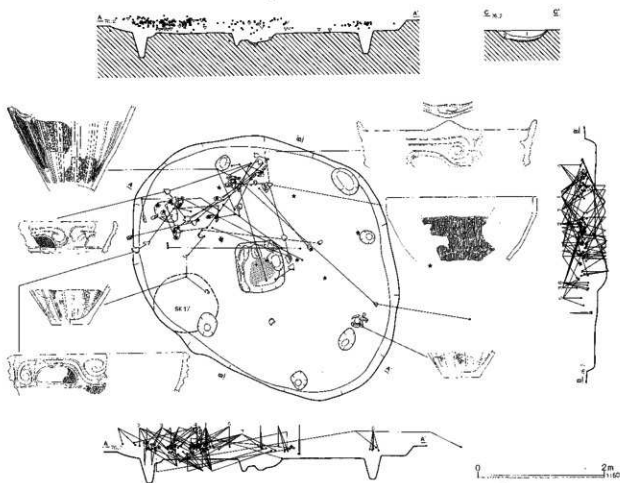
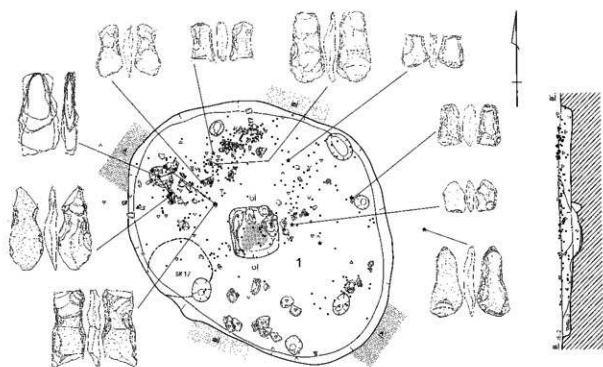
土器は、すべてが加曾利E系で、なかでもEⅡ末期のものが多い。器種は、口縁部文様帯を擁するキャリパー形が主体で、連弧文系や鉢形土器がわずかながら混じる。地文を沈線がまかなう曾利系の影響を受けた器種は少ない。

キャリパー形土器の口縁部文様は、沈線が幅広となり、楕円文も渦巻部をからめる形で配置されるものが多い。懸垂文は、いくつかが上端で連結し、13のように、そのみで構成を完了するものもある。17・18・21～24は同一個体で、1・3いずれかの胴部となる気配だが、特定はできない。

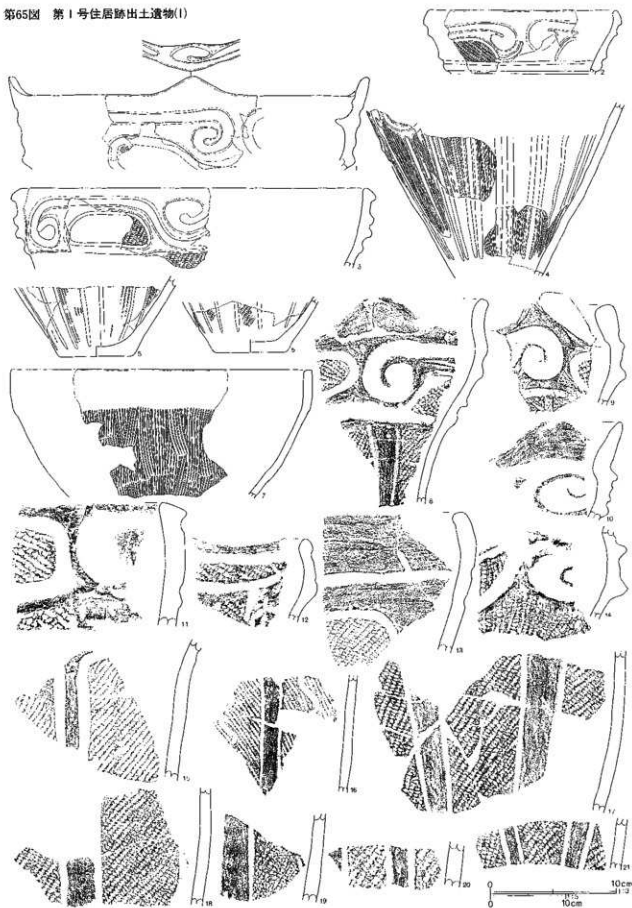
また、4・7は、それぞれ、唐草文系の大甕と、鉢形土器であるが、いずれも条線を地文としている。後者の口縁下には条線帯と無文帯を区画するべき横位の沈線がない。

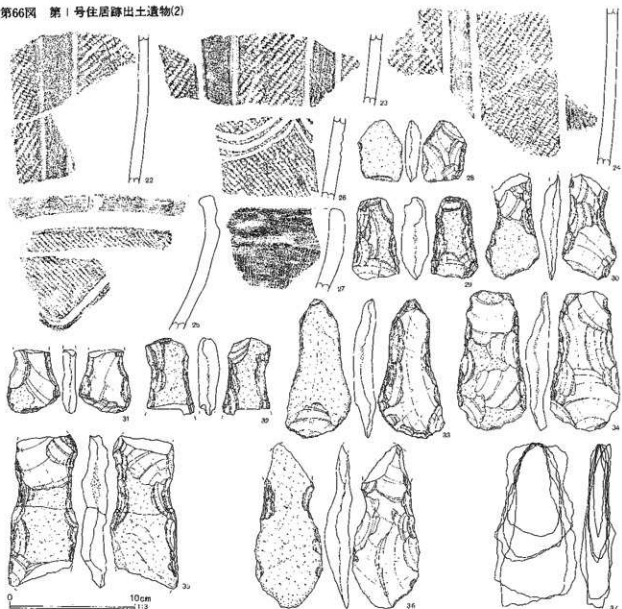
一方、打製石斧は、9点を図示した。覆土中への投棄を反映してか、半数以上が破損の憂き目にあっている。形態の基本は楕形の偏型で、着柄を前提とした側縁の敲打が加えられている。刃部に対する入念な加工は見られず、剥片素材の選択時にある程度の吟味が完了していることを示唆している。

37は打製石斧の素材として保持されていたと思われる5点の外形を重ねて示した。石材は片岩から砂岩系まで雑多だが、すべて1次剥片である。うち2点では楕形をくもろむ若干の剥離が加えられている。また、大きさでは大・中・小のまとまりがうかがえる。この偏差は、打製石斧製品のそれと符合している。



第65図 第1号住居跡出土遺物(1)





第2号住居跡(第67図)

D区北で検出した。第1号住居跡と同じく、北西に主軸を傾ける。形態は、隅丸方形が基調と思われるが、北辺が湾曲している。

覆土は暗褐色系土で占められ、下層ほどに黄色味を増す。床面は平坦だが、とくに踏み固められた様子はない。

炉に相当する中央部には、これにあてはめられる小穴が存在する。しかし、覆土中に含まれる焼土粒子の量は、炉跡と判断するには躊躇する程度しかない。

柱穴に相当する小穴は、壁際に8本を検出したが、

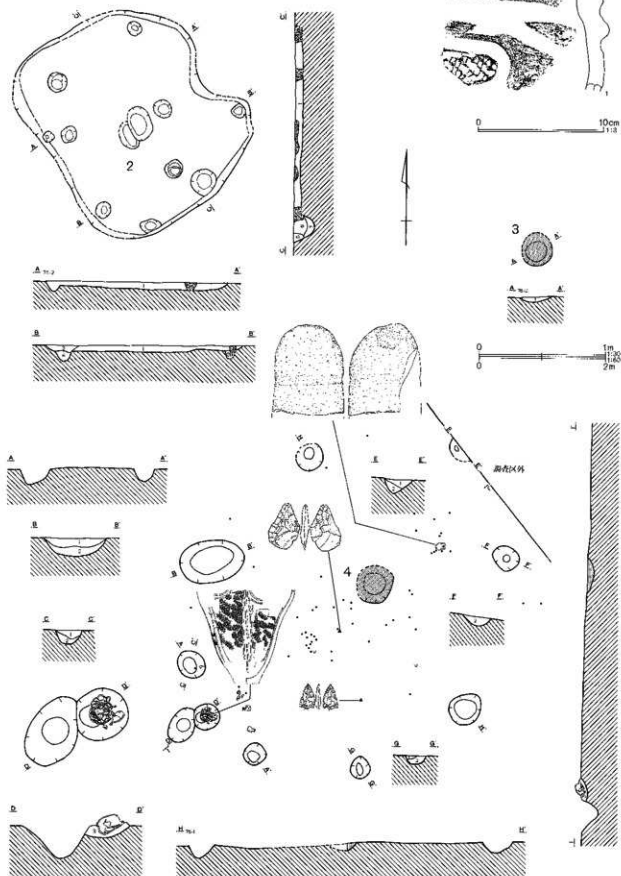
これらに規則性はなく、その用途を担っていたかは判断つきかねる。

遺物は、図示した加曾利E系のキャリバー形深鉢の破片が1点出土したにすぎない。

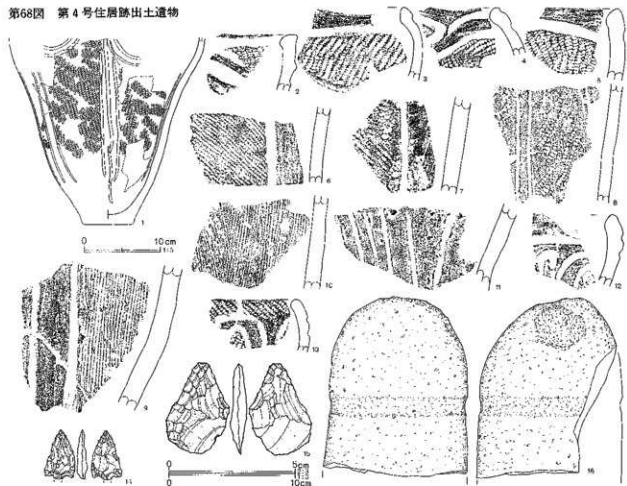
第3号住居跡(第67図)

E区で検出した。表土削除後、浅い地床炉を発見したため、周辺を精査したが、柱穴その他の付属施設は発見できなかった。炉床面の硬度や覆土に含まれる粒子の状態から、縄文早期の炉穴ではなく、中期の住居跡と判断した。

第67図 第2号～第4号住居跡



第68図 第4号住居跡出土遺物



第4号住居跡 (第67・68図)

E区中央に位置する。表土削除後、埋嚢と炉跡が至近にあるのを発見したため、周辺を精査し、本住の認定に至った。そのような経緯であるため、遺構確認面からの掘り込みは検出できなかった。

主軸方向は、炉跡と埋嚢を結ぶ線をこれにあてる場合、北東を指し示し、第1号・第2号住居跡とは逆になる。また、柱穴の配置から想定できる竪穴開口部の平面形は楕円形となる。

炉跡は想定できる住居範囲の中央北よりに位置し、付属施設は存在しない。これに対し、埋嚢は住居中央に向かって傾いた状態で埋置され、炉床との高低差からは、居住時に口縁の一部が床面上に露出していた可能性も考えられる。

柱穴は9本を検出したが、これらは前記住居跡と同じく壁際にめぐっていたものだろう。これらの対称軸

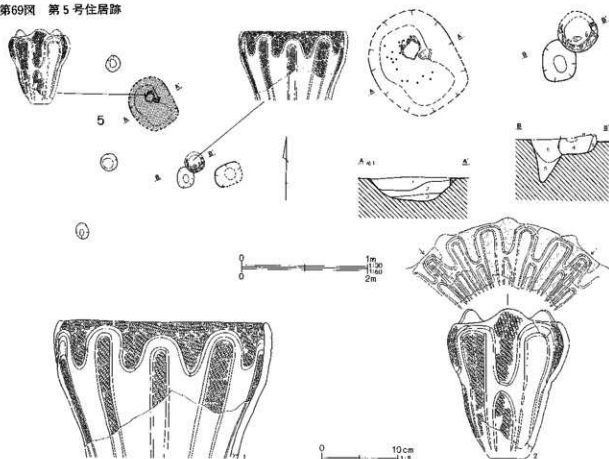
と主軸方向はおおむね合致する。

遺物は、わずかに残しえた中央の褐色覆土部分より出土しているが、その分布に細かな傾向を見いだすまでには至っていない。

土器は加曾利E系EⅢ期初頭の所産が多い。1が埋嚢として供されていた個体であり、連弧を目安に垂下線を追加している。キャリバー・連弧文・連続波状文系の3系の中間相を示す個体である。また、2～5のキャリバー形土器の口縁部文様帯は退化し、隆帯を貼付せず、沈線のみで横展開の文様区画を構成する。

一方、石器は石鏃2点（うち未製品1点）と石棒の頭部が出土したにすぎない。後者には織材痕らしき円形の剝落があるが、これが意図されたものなのかは判断がつかなかった。

第69図 第5号住居跡



第5号住居跡 (第69図)

D区西端に位置し、第2号住居跡と至近の距離にある。炉跡や埋甕など、調査当時には別個に扱っていたものを整理の際に統合し、認定した住居である。そのため、確認面からの掘り込みは検出しておらず、詳しい形態等は不明である。

炉跡と埋甕は間近にあり、両者を結ぶ線を主軸線と仮定すると、炉堀り方の長軸や第2号住居跡の主軸とはほぼ平行する。

前者は隅丸長方形の掘り方をもつ地床炉で、中央北よりで2の完形土器が出土している。この個体は、炉の軸線上にあり、しかも南の埋甕をめざすかのように傾いて発見された。というものの、土器埋炉の材料とするには小さすぎ、かつ、埋置作業の痕跡も見られなかった。そのため、炉の付属施設として機能したものではないと判定した。

これに対し、埋甕は、口縁部を下にした、いわゆる

伏甕である。胴下半が床面を目安に断ち切られていたのか、はたまた床面上に個体がそびえていたのかは、判断がつかなかった。

遺物は土器がすべてで、図示した2個体を含め、すべて加曾利EⅢ期の所産であった。

1は伏甕に供されていた個体で、連続波状文系の構成を残す。下位の無文帯は広く残されており、その間を充たす文様は追加されていない。

2は3単位の波状口縁となる小型で、1の構成に加えて上位波状文と対となる逆U字区画を追加している。波状文は5単位で、口縁部の単位数とは符合しない。また、正面図右の逆U字区画部には縄文が施されておらず、意図的な所作か推測される。

(2) 土壌 (第70～72図)

今回の調査では、縄文集落の時代的特徴に起因するためか、居住跡にはみない多くの落ち込みを検出した。調査時は作業の効率を高めるため、これらを土壌として一括して扱っていた。

今回の整理に際し、規模、形態、遺物の出土などで再検討を行ない、34基を土壌と認定し、報告する。

しかし、頁数の関係上、これらのすべてを詳述するわけにはいかず、代表的な数基についてのみ以下に示すこととする。

第1号土壌 (第70図・第72図1)

円形かつ鍋底状の形態的特徴を示す。これは、第2号以下、本遺跡における縄文土壌の底流となるものである。覆土は暗褐色系土を基調とし、下層ほどに黄色味を増す。遺物は加曽利E系の土器が10点、覆土中から出土している。

第5号土壌 (第70図)

規模は異なるものの、第1号と形態的に共通する。遺物は、加曽利E系の土器が29点と、チャート剥片が2点出土しているが、小片が多く、拓影で図示できるものはなかった。しかし、栗をはじめとする炭化材やオニグルミの炭化種実などが、本遺跡の遺構では最も多く出土している。

第7号土壌 (第70図・第72図2)

円形鍋底状の形態的特徴を示す。覆土は暗褐色系土を基調とし、下層ほどに黄色味を増す。遺物は加曽利E系の土器が4点、覆土中から出土している。2はキャリバー形土器の口縁渦巻部分である。

第8号土壌 (第70図・第72図3・4)

円形鍋底状の形態的特徴を示す。覆土は暗褐色系土を基調とし、下層ほどに黄色味を増す。遺物は加曽利E系の土器が5点、敲石が覆土中から出土している。3の敲石は上端に磨痕もあわせて残されている。

第9号土壌 (第70図)

円形の開口部と、平坦な墳底は第1号などと共通するが、墳底に小穴を加える型である。これは、第11号のように中央であったり、第13号のように片よりが見

られたりそれぞれだが、20cm内外で収束するのが一般的である。覆土は鍋底土壌とかわることはない。

遺物は石製の破損品が1点出土している。

第12号土壌 (第70図・第72図5)

円形鍋底状の形態的特徴を示す。覆土は暗褐色系土を基調とし、下層ほどに黄色味を増す。遺物は5の礫器が出土したにすぎない。

第14号土壌 (第70図・第72図6～8)

開口部は円形だが、一般の鍋底土壌より深く、第15号・第16号土壌と型式的に共通する。いわゆる袋状土壌の転化型であろう。

第15号とともに、遺物もまとまって出土している。覆土は周開に地山崩落層が加わるほかは、他の土壌の色彩的特徴とかわりない。

遺物は中層より多く出土し、墳底ではほとんど見られない。土器は17点が出土し、このうち6～8の3点を図示した。

6は、出土遺物のなかでも最下部で、横たわるようにあらわれた。個体上部を欠くが、現存のかぎりでは破損や散乱はなく、発見時の内部はチャートを主とする3mm前後の小礫で充たされていた。これらの詳しい観察結果は付録を参照されたい。

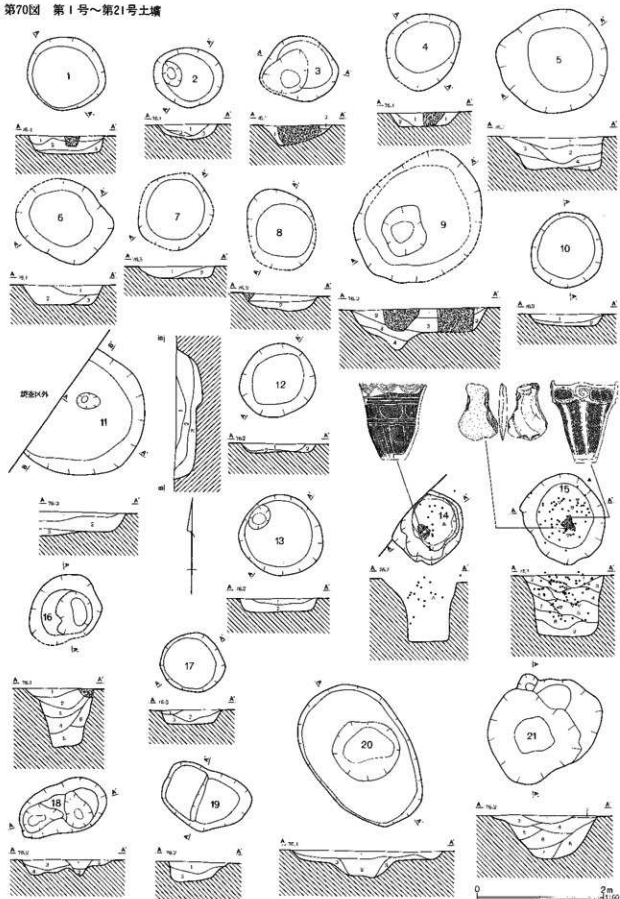
文様は、3本線を単位とする横位区画やこれに溶け込む弧状やU字状の区画、地文の燃糸文など、連弧文系の基本的な構成を踏襲しており、そのなかに、出土状況とのかかわりで強調できるような特異な要素は見られない。他にチャート剥片が1点出土している。

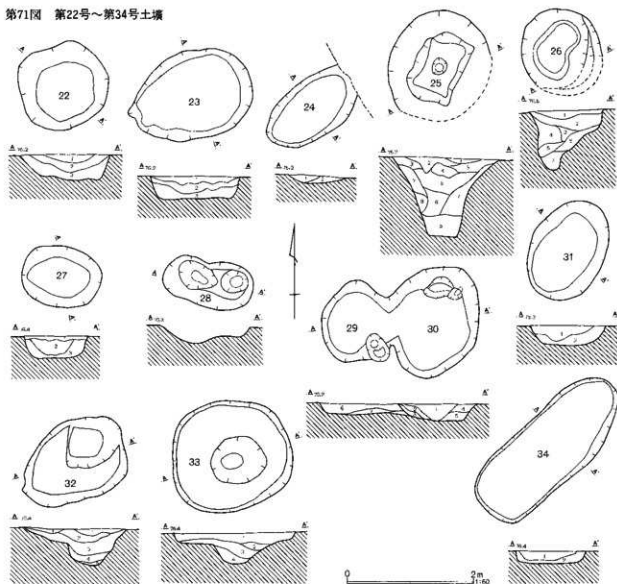
第15号土壌 (第70図・第72図9～13)

第14号と共通する形態的特徴を示す。覆土は9層に分層したが、自然堆積の所産と判定した。黒から暗褐色系土が主体を占め、下層ほどに地山ローム層の影響をうけて黄色味を増していく。

遺物が中層や上層より多く出土するものの、墳底ではほとんど見られないのも第14号と共通する特徴である。土器は67点が出土し、このうち9～12の4点を図示した。いずれも口縁部文様帯を擁するキャリバー形土器である。

第70図 第1号～第21号土坑





このうち、9は、底部の円盤を欠失するのみで、他の破損・散乱等は一切ない。第14号の6と通じるかのように、覆土の遺物のなかでも最下層で、横たえられたように出土した。だが、こちらの内部には、若干の炭化材の他は、覆土と同じ土が充填していた。

このような両者の共通を考え合わせると、底部円盤の欠損は、土壇造営に関係する意図的な所作ともとれる。しかし、観察のかぎりでは、脆弱部の自然剥落かを決することはできなかった。

9の文様は加曾利E II式の典型的な口縁部文様帯構成で、4単位の波状口縁を呈する。波状に対応する4単位の渦巻のうち、実測図正面のみが下方からの巻き

込み（隆帯）で、楕円文との関わりを唯一持たない部分でもある。また、6単位ある懸垂文無文部は、この下と背面のみが渦巻に対応している。

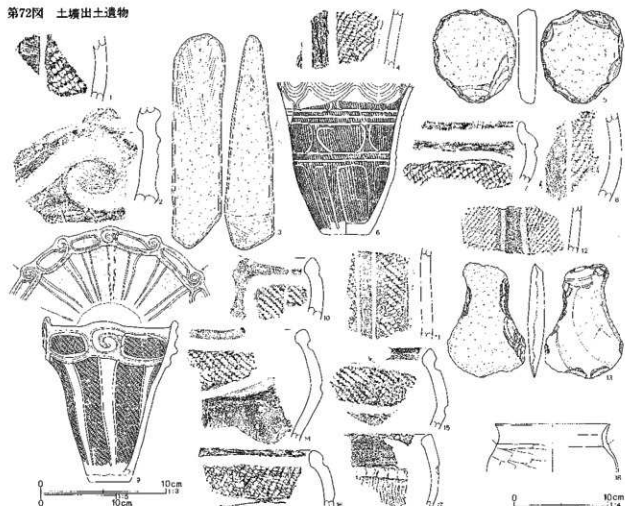
遺物はほかに、石鏃の破損品、打製石斧（13）がそれぞれ1点、剃片が4点出土している。

第17号土壇（第70図・第72図14～17）

円形の開口部で鍋底状の墳底を形態的特徴とする。覆土は暗褐色系土で占められ、下層ほどに黄色味を増し、ロームの粒子も大型化していく。

遺物は覆土中で、土器28点、剃片1点が出土した。このうち土器4点を図示したが、14～16はキャリバー形土器片で、17は条線施文の鉢形土器である。

第72図 土壌出土遺物



第20号土壌 (第70図)

第9号と同様に墳底に小穴をうがつ型であるが、こちらは平面形が楕円となっている。第33号とも共通するが、覆土の堆積は小穴部とその上層で特殊な変化が見られない。このことは、第25号の墳底小穴とは異なり、機能時は開口していたことを示唆している。

第25号土壌 (第71図)

開口部は楕円形でありながら、急斜面で推移した墳底では長方形に変化する。また、墳底中央には第9号などの型より小さい小穴を加えている。断面形態や墳底の特徴などからは、落とし穴を推測させる。

遺物は加賀利E系の土器が1点出土したにすぎず、ほかの多くの土壌と同じような縄文中期の所産とは決したい要素もある。

第27号土壌 (第71図・第72図18)

円形かつ鍋底状の、他の縄文土壌と形態的には似ているが、覆土は黒味が強く、焼土の混入も多い。加えて平安時代の土師器が4点出土している。

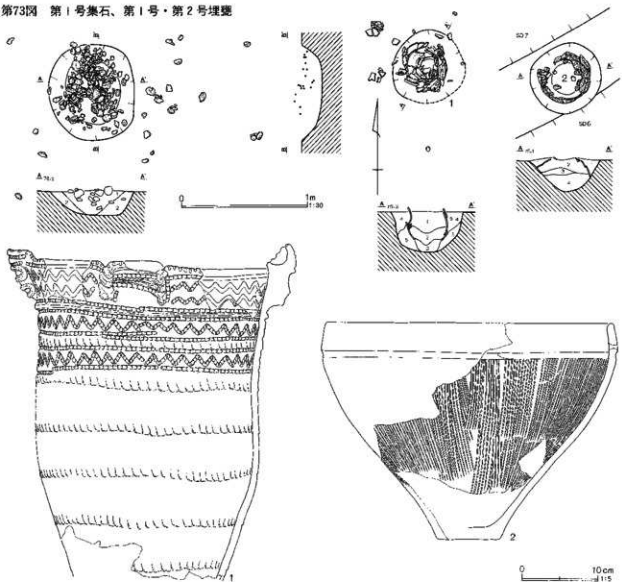
図示できたのは1点で、台付甕の口縁部である。

第34号土壌 (第71図)

長楕円、あるいは長方形を意図した開口部で、墳底は浅く平坦である。覆土は黒褐色から暗褐色系土がもっぱらで、やわらかい。2層に分層したが、そのいずれにも地山のローム粒子が多く含まれている。

出土遺物はないが、覆土の特徴や、北東に傾く長軸方向が竈の多くと共通することなどから、近世期に構築されたものと判断した。

第73図 第1号集石、第1号・第2号埋甕



(3) 集石 (第73図)

B区の最南端で1基のみが検出できた。下部に土墳をとまう。

集石は、下位の土墳形態に限定されており、周囲で出土した石は、後世の擾乱で散乱したものだろう。断面形で見ると、集石は覆土下層には至らず、とくに上層に集中する。礫構成は、チャートを主体とする5～10cmの円から角礫で、被熱はない。

このような特徴は、上原遺跡の中期集石と特徴が合致する。出土遺物はないが、同期の所産と判断して大過ないだろう。

(4) 埋甕 (第73図)

第1号埋甕 (第73図1)

B区北側で発見した。縄文中期の構築ではあるが、A・D区などの遺構集中部とは隔絶した地域にあり、埋設土器も遺跡の主体期よりかなり先行している。

個体の下位を断ち切り、正位に埋設されていたもので、上位は擾乱によって周辺に散乱していた。

埋設土器は、平縁に2対4単位の把手を附加し、横位に展開する角押波状文を4段にわたって施文する。波状は全周し、栴円区画とはならない。

一方、下半は粘土瘤が現存で5段めぐり、波状文間にも粘土瘤を残している。横位隆帯区画は口縁下の1

帯のみで、これを境とした上下で波状文の趣向をかえている。整沢・阿玉台Ⅰb期の所産であろう。

第2号埋甕 (第73図2)

第6号・第7号溝にはさまれた、わずかな間隙にころうじて遺存していた。いわゆる伏甕であるが、住居跡の可能性も想定し、周辺を精査した。しかし、これを裏づける遺構の存在は確認できなかった。

埋設は必要最小限の掘り方でまかなわれ、鉢形器形の土器との間で算盤形の空間が形成される。土器は、耕作による攪乱で、遺存率には長じないが、口縁から底部までが発見できたことから、埋置に際しての加工はなく、そのままに埋設され、密閉空間を作り出していたと理解できる。

素材とされた個体は条線全面施文の鉢形土器で、加曾利EⅢ期に製作されたものだろう。

(5) 炉穴 (第74図)

すべてがB区で検出されており、このうち9基が北東部に集中している。出土遺物は、第7号から出土した条状文のみの破片1点 (第74図1) にすぎないが、構造の共通性から、すべてがこの破片の属性が指示する野島から鶴ヶ島台期に造営されたものとしてさしつかえないだろう。

第1号～第8号炉穴 (第74図)

第1号から第8号はそれぞれが複雑にからみ合い、分離するのは困難である。そのため、第9号、第10号を除く8基は一括して記述する。

これらは、それぞれ複数の足場と燃焼部をあわせもつことでも共通し、調査の過程でその先後を逐一把握することは困難であった。覆土は暗褐色系土で占められ、下層ほどに黄色味を増す。また、これにともない焼土粒子の混入も増大し、燃焼部直上ではブロックを含有する箇所もあった。

一群は、浅い掘り込みで連結されているが、詳しく見ると、第1号・第2号、第3号から第5号、第6号から第8号の3群に分けることができる。

さらに、これらの燃焼部と作業足場との関係は、改

築法の面から分類することも可能である。すなわち、前二者は足場を支点として燃焼部の方位を旋回させている。そして、後者は足場そのものが後退していく型として位置づけられる。

また、旋回は、第1号・第2号のように、足場をふくめて本格的に掘り方を掘削して行なうもの、第3号のように、燃焼部のみを応急的に追加するにとどめるものがある。

もちろん、4・5のように、旋回ののちに後退を行なうなど、この分離がそのままに改築法の復元に通ずるわけではない。しかし、足場の方位が東に統一されていることを考え合わせると、生活主体の定点化とともに、やみくもにこの改築が行なわれたとはいえないだろう。

また、炉穴内にいくつかの小穴が発見できたが、これらの用途は判断としない。第2号では燃焼面がこの小穴によって破壊されている。

第9号炉穴 (第74図)

第8号炉穴の南、約2mを隔てて検出した。浅い掘り込みで連結されていないが、前記8基と一連のものだろう。

こちらも複数の燃焼部を残しているが、改築にともなう掘り方の追加はない。これは、旋回や後退ではなく、作業の方向を反転し、足場と燃焼部の位置を逆転させることにより、掘削の省力化をはかったものと理解できる。

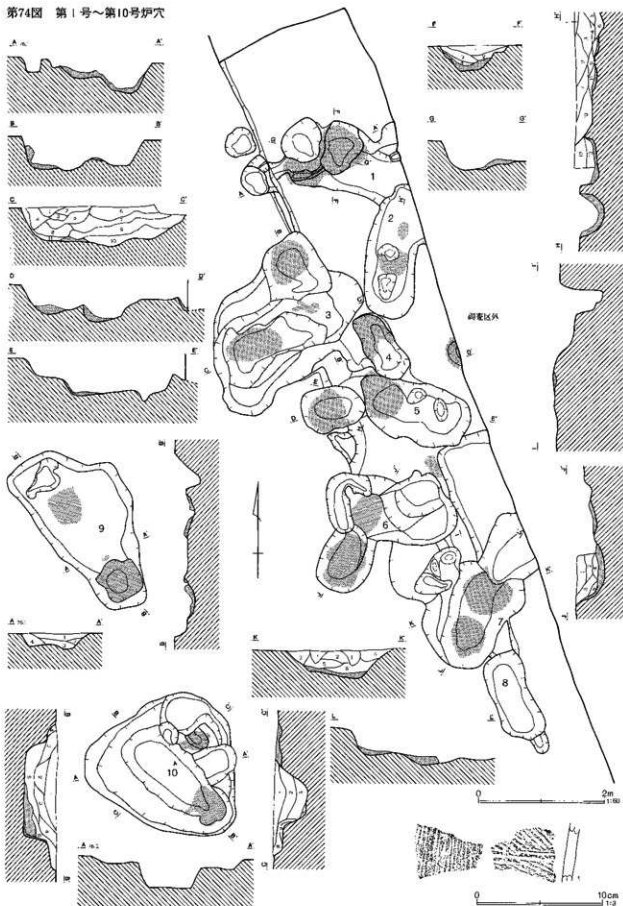
また、第2号や第3号の足場中央に残る小規模な焼土跡も、反転前の燃焼部がその後の足場として踏み荒された残骸とも考えられる。

第10号炉穴 (第74図)

前9基とは隔絶したB区中央に位置するが、主軸方向は第8号、第9号と共通する。

覆土その他の特徴は他と同様で、複数の燃焼部を残すことも共通する。改築法は、土層観察所見と矛盾するが、第3号と同じ省力旋回と考えられる。

第74图 第1号~第10号炉穴



(6) 溝 (第75図)

ほぼ全区で検出されている。遺構番号としては7条までを命名したが、調査区が分断されているため、一連のものを重複して把握してしまった可能性も残されている。

いずれも側壁は直線状に検出されており、流水に見まわれた痕跡はない。地区や敷地を画する日塗で設けられたものだろう。

第1号・第2号溝 (第75図)

B区北の擾乱部をはさみ、向かいあうL字形の軌跡として調査区にあらわれる。両者とも約1m幅の浅い断面形を基本とし、前者ではさらに一段の落ち込みがある。方向性は現在の道路や字境と平行、あるいは直交するが、合致するものはない。

覆土は黒褐色系土で占められ、造営期を判断できる遺物は出土していない。

第3号・第4号・第6号・第7号溝 (第75図)

それぞれ二本が並行し、A区北東の現道下から、D区東の地境道に沿い、E区中央を横切りクランク様に連結されると検出できる。少なくとも、E区の東に接する上原遺跡最南端の調査区では第6号・第7号の延長は検出していない。

第3号・第6号の断面形は、急な傾斜の箱葉研となり、深さも一致する。また、第4号・第6号は片流れで緩やかな箱葉研となり、修復や掘り直しの痕跡が残ることも共通する。

覆土は黒褐色系土が主体だが、第7号7層ではローム地山のブロックも多く包含されていた。あるいは、掘り直しの際に、未埋没部分を意図的に埋め戻したのかも知れない。

第5号溝 (第75図)

A区の現県道下で検出し、その方向性は一致する。一部を調査したのみで、一方は消滅し、他方は擾乱部へと消える。箱型の断面形で、覆土は黒褐色系土で占められる。遺物は出土していない。

(7) 遺構外 (第76～78図)

土器 (第76図1～第77図42)

他期に属する遺構への混入や、遺構外よりは4,499点の縄文土器と13点の平安時代土器が出土した。このうち、4,479点が縄文中期の所産であり、なかでも加曾利E系が4,469点と群を抜いている。うち、42点を拓影、実測図で示した。

6・7は、遺跡内で19点が出土した条痕文系土器である。沈線や微隆起で文様を描くものは出土しておらず、両者はいずれも条痕のみの口縁部片である。

これに対し、他の主体は加曾利EⅢ期に製作されたものである。キャリバー形の土器は、口縁部文様帯が退化し、2のような横位区画線が欠失するものや、胴部U字状区画文が口縁部まで進出する1のような構成が許容されている。

これにかかわるべき連続波状区画文土器の系列も、19のように、互いに接するべき無文帯と縄文帯の入り組みがくいちがってしまったり、24や25のように、区画内に縄文を施文しないなど、統一化におよんでいないことを示している。なお、29の縄文は、軸繩と逆方向に絡げた附加条痕体を押捺したものである。

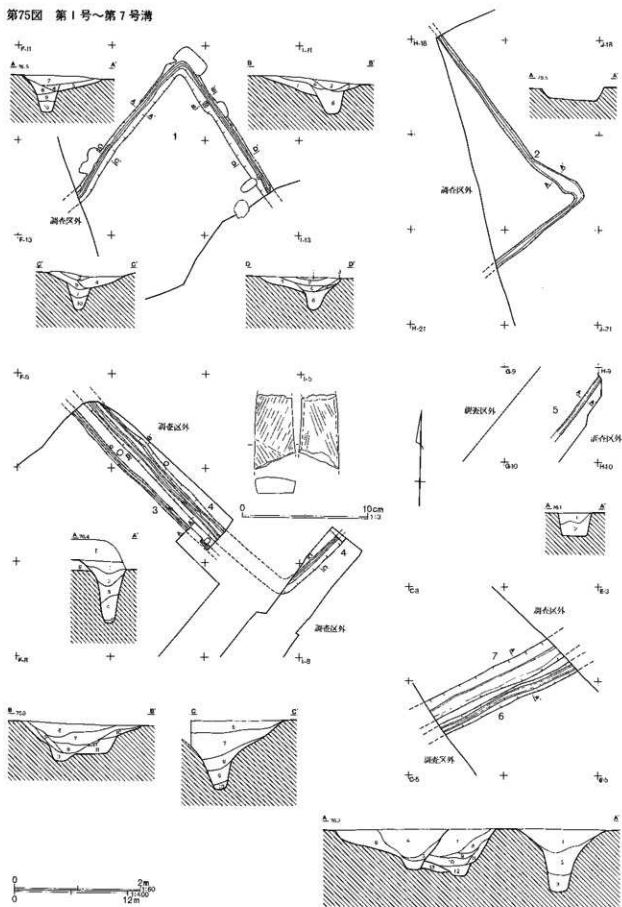
一方、連弧文系の土器も出土しているが、3では、沈線が2本となり、波状文と化してしまっている。33は地文を欠き、連弧の交点を日安に垂下する沈線が加えられる。こちらは、第4号住居跡の出土品と同じように、キャリバー器形の影響をうけ、3本が1単位となるだろう。

また、34から37は唐草文系の影響をうけた大甕で、34は椀口区画縄文と蕨手状沈線との組み合わせで下位文様帯を構成する在来系との折衷型である。

そして、4は両耳壺、38から42は鉢形土器の口縁部片である。前者は口縁部無文帯を画する隆帯がそのままにU字状区画の隆帯へと移行している。

また、後者の口縁下には沈線あるいは刺突の横位方向線が設けられ、口縁部無文帯を強調している。地文は櫛状工具による条線がもつばらである。

第75图 第1号~第7号溝



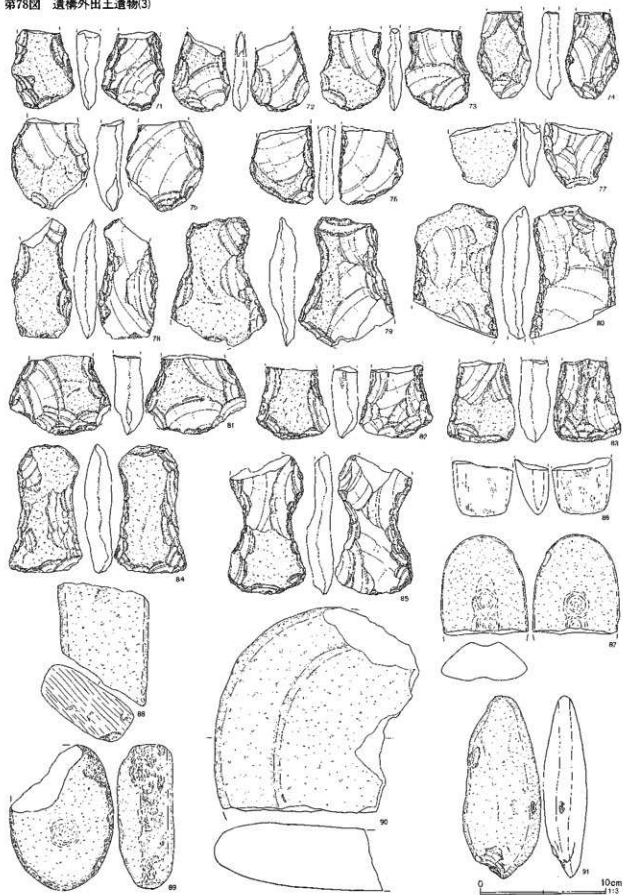
第76図 遺構外出土遺物(I)



第77図 遺構外出土遺物(2)



第78図 遺構外出土遺物(3)



石器 (第77図42～第78図91)

遺構外からは211点の石器類が出土した。このうち6点は先土器時代の石器であるが、いずれも表土を削除した後の遺構確認面から採集されたものである。それらが出土した地点では、同時代の石器群検出をもくろみ、ローム層内の調査を行なったが、確実な出土例を得られなかった。

ナイフ形石器は4点を発見したが、図示できたのは43・44の2点のみである。43は2.2cmほどの小型品であるが、側縁加工の細線彫は基部より手順を踏んで入念に行なわれている。また、45は細かな調整が一部に見られる剥片で、46は尖頭器の基部である。

一方、遺構外より出土した縄文時代に帰属する石器類は205点であるが、このうち143点はチャートを中心とする剥片類である。

62点が出土した縄文時代石器群の主体は、石鏝と打製石斧である。両者の合計は49点に達し、約80%を占める。

石鏝は遺構外より23点が出土し、このうち13点を図示したが、59の有茎を除き無茎で、凹基をめぐした細部加工が施されている。

形態は等辺を意図し、50・51の黒曜石製は小ぶりだが、チャート製の47・48も、加工の難易度にもかかわらず小型で、入念な調整剥離が施されている。58は大ききのわりに、剥離が荒く、基部の挟りも一律ではない。基部成形段階の未製品かもしれない。

これに対し、礫器・削器類は極端に少なく、錐・石匙などの小型剥片石器は出土しなかった。61・62は、いずれも横刃型の礫器であるが、前者は荒い打割に加え、刃部に細かな剥離を追加する。礫塊を素材として用いているが、削器としての用途を意図していたとも憶測できる。

後者は向山遺跡で多出した横刃型礫器の典型例と見まがうばかりで、あるいは早期に製作されたものかもしれない。

打製石斧は、素材を含めて遺跡全体で44点が出土しているが、このうち17点が第1号住居跡より出土して

おり、表面採集を含めた遺構外からの出土は、第15号土壇出土の1点をも除いた26点である。同住居跡で出土した素材は見当たらず、欠損品が比較的多いのも特徴となろうか。

石材は片岩類なども加えて雑多だが、なかでもホルンフェルスと砂岩が多くを占めている。

形態は、65の短冊形から79の撥形、極端なものでは85のように分銅形に近いものもある。刃部が偏刃となるものもあり、64のような片よりのないものと比べると、機能用途のちがいを想像させる。

これらに対する打割による加工は、着柄のための稜線敲打とともに、刃部よりも側縁に細かく行なわれる傾向がある。これは、着柄後の再加工のしにくさを反映しているようである。

反対に、刃部に対しては、荒い打割の鋭利さをそのままに利用するものも多い。着柄後の破損に際しても容易に再生作業ができることが、この傾向を助長しているとも考えられる。

打製石斧の多さにくらべると、本遺跡での磨製石斧の少なさは際だっている。86に示した刃部だけが遺存する1点のみの出土である。緑色岩を用い、一部に研磨前の敲打痕を残す。

一方、加工具の少なさも本遺跡の特徴である。磨石は4点が出土し、このうち3点を図示した。いずれも凹底を残し、88では自然面ではなく、分割面を使用している。89は側面に敲打痕を残す。

石皿、敲石は、それぞれ1点が出土した。90はゆるやかな凹部を残すのみで、たび重なる使用に起因する摩耗は認められない。

その他、143点が出土した剥片類は、チャートが圧倒的で、黒曜石・頁岩・ホルンフェルス・粘板岩などがわずかながら混じる。なかには先土器時代の技法の所産かとも思われるものもあるが、確定できる要素を見いだすことができなかった。

第7表 石器観察表(1)

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	備 考
1 住-28	1号住居	打製石斧	4.9	3.5	1.2	28.0	砂岩	
1 住-29	1号住居	打製石斧	6.5	3.7	2.2	63.0	ホルンフェルス	
1 住-30	1号住居	打製石斧	(8.3)	4.3	1.4	(46.0)	ホルンフェルス	
1 住-31	1号住居	打製石斧	(5.0)	4.2	1.1	(29.6)	緑泥片岩	
1 住-32	1号住居	打製石斧	(6.1)	(3.8)	1.7	(53.4)	ホルンフェルス	
1 住-33	1号住居	打製石斧	11.0	5.2	1.7	89.1	ホルンフェルス	
1 住-34	1号住居	打製石斧	11.0	5.4	1.8	121.8	泥岩	
1 住-35	1号住居	打製石斧	(12.0)	5.3	2.0	(168.5)	砂質	
1 住-36	1号住居	打製石斧	(12.9)	5.4	2.0	(126.4)	砂質頁岩	
1 住-37	1号住居	打製石斧(素材)	9.0	4.7	1.7	84.0	緑泥片岩	
1 住-37	1号住居	打製石斧(素材)	9.3	6.3	1.6	91.4	砂岩	
1 住-37	1号住居	打製石斧(素材)	12.9	5.3	2.0	143.6	緑泥片岩	
1 住-37	1号住居	打製石斧(素材)	12.2	6.5	2.8	162.5	粘板岩	
1 住-37	1号住居	打製石斧(素材)	7.3	4.2	0.8	28.1	チャート	
4 住-14	4号住居	石鏃	(2.0)	1.2	0.4	(0.8)	チャート	
4 住-15	4号住居	石鏃(未製品)	3.6	2.5	0.6	5.3	チャート	
4 住-16	4号住居	石棒	(14.1)	(11.5)	(9.7)	(2473.3)	閃緑岩	
8 土-3	8号土壌	砥石	17.0	4.1	3.8	415.1	砂岩	
12 土-5	12号土壌	礫器	7.5	6.6	1.5	134.5	緑泥片岩	
15 土-13	15号土壌	打製石斧	9.0	6.2	1.3	85.5	砂質頁岩	
G r - 43	21 I Grid	ナイフ形石器	(2.4)	1.1	0.5	(0.8)	チャート	先土器時代
G r - 44	11 Grid	ナイフ形石器	(2.8)	1.3	0.4	(1.7)	チャート	先土器時代
G r - 45	表探	削器	2.7	1.1	0.4	8.8	砂質頁岩	先土器時代
G r - 46	17 K Grid	尖頭器	(1.6)	(1.4)	0.5	(1.0)	黒曜石	先土器時代
G r - 47	5 F Grid	石鏃	1.8	(1.5)	0.4	(1.0)	チャート	
G r - 48	8 H Grid	石鏃	(1.7)	(1.3)	0.3	(0.5)	チャート	
G r - 49	表探	石鏃	(2.2)	(1.6)	0.3	(0.8)	チャート	
G r - 50	5 E Grid	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
G r - 51	8 H Grid	石鏃	1.9	1.5	0.2	0.4	黒曜石	
G r - 52	8 H Grid	石鏃	(1.7)	(1.9)	0.4	(1.3)	チャート	
G r - 53	6 F Grid	石鏃	2.4	(1.7)	0.4	(1.3)	チャート	
G r - 54	7 F Grid	石鏃	2.5	(1.8)	0.3	(0.8)	チャート	
G r - 55	4 D Grid	石鏃	(2.3)	2.5	0.5	(2.0)	チャート	
G r - 56	13 Grid	石鏃	(3.0)	(2.3)	0.4	(2.0)	チャート	
G r - 57	5 F Grid	石鏃	3.6	2.2	0.5	3.9	ホルンフェルス	
G r - 58	8 F Grid	石鏃(未製品)	(2.5)	(2.0)	0.5	(1.6)	チャート	
G r - 59	5 D Grid	石鏃	(2.8)	1.4	0.4	(1.1)	チャート	
G r - 60	9 E Grid	礫器	7.1	2.0	0.9	18.3	砂質頁岩	
G r - 61	21 K Grid	礫器	7.7	9.1	3.1	270.3	泥岩	
G r - 62	7号溝	礫器	6.1	10.3	3.2	256.1	砂岩	
G r - 63	12 II Grid	打製石斧	(6.5)	3.4	2.0	(65.6)	砂質頁岩	
G r - 64	9 E Grid	打製石斧	9.6	5.3	1.6	120.0	砂岩	
G r - 65	4号溝	打製石斧	(10.4)	(4.5)	2.3	(141.6)	砂岩	
G r - 66	21 L Grid	打製石斧	8.5	4.4	1.6	83.2	石礫片岩	
G r - 67	7号溝	打製石斧	(8.9)	(4.1)	(1.5)	(47.6)	泥岩	
G r - 68	7 D Grid	打製石斧	6.7	5.0	1.3	45.0	砂岩	
G r - 69	10 F Grid	打製石斧	(8.4)	4.7	1.1	(49.4)	ホルンフェルス	
G r - 70	10 II Grid	打製石斧	(7.5)	5.1	1.7	(74.6)	粘板岩	
G r - 71	10 E Grid	打製石斧	(6.3)	4.8	1.9	(65.0)	砂質頁岩	
G r - 72	5 F Grid	打製石斧	(6.3)	4.6	1.2	(38.4)	砂岩	
G r - 73	10 E Grid	打製石斧	(6.5)	5.2	1.1	(52.8)	斑レイ岩	
G r - 74	21 I Grid	打製石斧	(6.9)	4.2	2.0	(61.2)	砂質頁岩	
G r - 75	9 E Grid	打製石斧	(7.2)	6.2	2.0	(129.6)	ホルンフェルス	

第8表 石器観察表(2)

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	備 考
G r - 76	4号溝	打製石斧	(6.1)	5.1	1.3	(50.9)	砂岩	
G r - 77	6号溝	打製石斧	(5.1)	(5.5)	1.6	(54.2)	ホルンフェルス	
G r - 78	表探	打製石斧	(9.5)	4.6	1.8	(90.5)	ホルンフェルス	
G r - 79	9 EGrid	打製石斧	10.2	(7.6)	2.1	(164.5)	ホルンフェルス	
G r - 80	6号溝	打製石斧	(10.6)	(6.6)	2.2	(187.7)	ホルンフェルス	
G r - 81	表探	打製石斧	(6.3)	8.0	2.4	(146.1)	砂岩	
G r - 82	10 EGrid	打製石斧	(5.7)	5.8	2.1	(86.0)	砂岩	
G r - 83	3号溝	打製石斧	(6.5)	5.4	2.5	(108.5)	ホルンフェルス	
G r - 84	表探	打製石斧	10.2	5.8	2.1	155.7	ホルンフェルス	
G r - 85	4 EGrid	打製石斧	(11.0)	6.2	2.0	(144.5)	砂岩	
G r - 86	22 MGrid	磨製石斧	(4.4)	(4.8)	(2.5)	(85.4)	緑色岩	
G r - 87	表探	磨石	(7.8)	6.9	3.0	(233.8)	閃緑岩	
G r - 88	5 DGrid	磨石	9.8	7.2	3.6	415.1	砂岩	
G r - 89	10 FGrid	磨石	11.5	8.3	4.4	538.5	砂岩	
G r - 90	表探	台石	(16.1)	(15.0)	4.8	(2234.0)	閃緑岩	
G r - 91	7号溝	砥石	14.3	6.2	3.5	435.8	砂岩	

第9表 遺構番号新旧対照表

遺構 新	旧	遺構 新	旧	遺構 新	旧	遺構 新	旧	遺構 新	旧	遺構 新	旧
第1号住居跡	SJ 1	第1号炉穴	SK 58	第1号埋燵	UG 1	第1号土溝	SK168	第13号土溝	SK221	第25号土溝	SK 37
2	SK174	2	57	2	UG 3	2	169	14	7	26	50
3	SJ 3	3	55			3	166	15	8	27	62
4	SJ 4	4	59	第1号築石	SC 1	4	167	16	25	28	77
	UG 4	5	56			5	146	17	1	29	71
5	UG 2	6	60	第1号溝	SD 1	6	152	18	10	30	70
	SK173	7	53	2		7	160	19	24	31	65
	193	8	52	3		8	157	20	27	32	112
	194	9	54	4		9	172	21	44	33	142
	195	10	89	5		10	235	22	34	34	139
	196		90	6		11	258	23	36		
			91	7		12	211	24	46		

VII 結語

1 向山遺跡

(1) 住居跡と環状環群

今調査では、縄文時代早期と中期の集落跡を発見した。主体は前者で、燃系文系末期のいわゆる東山式土器と、押型文系土器が多く出土している。

埼玉県ではこれまで、燃系文系から、沈線文系や押型文系土器を目安とする、早期前半の調査例に恵まれなかった。まとまった資料が報告されているのは、南埼玉郡宮代町前原遺跡(青木1983)や人里郡川本町四反歩遺跡(金子1993)の燃系文系、浦和市北宿西遺跡(中村・大塚1986)の沈線文系と押型文系が代表例であり、他はいくつかが数えられるにすぎない。

これらの成果に匹敵する今回の調査は、広く関東全域に照らしてもまれで、同期の検討に格好の題材を提供することとなった。

この期の住居跡は6軒を検出した。これは、県内では四反歩・前原遺跡に次ぐ成果であるとともに、県南西部の早期前半で、はじめての発見例となった。

また、土壌は総計で86基、集石は19基を調査した。これらは、他期にあたるいくつかを除き、早期に構築されたかと判断した。だが、出土遺物に恵まれず、さらに詳しい査察期にはわかに決しがたい。

とくに、集石のうち土壌を伴わないものは、環の範囲で遺物の帰属を振りわけた。そのため、時期判定の客観性に劣るそりを免れない。

しかし、これらの総体である環状にめぐる環群は、早期土器の分布集中域と一致している。したがって、この期に形成されたものとしてさばくことが許されるだろう。当然、環群と連携し、その一部を構成する集石は同期の痕跡と判定できる。

住居跡と環群は調査区の北西に集中する。その範囲は区外にも確実な求められ、全体で南北に長い楕円形の分布を示すと考えられる。しかし、第6号住居跡や調査区北限界の遺物分布をみかぎり、区外の多くは南小畔川の浸食にさらわれている気配である。

あくまで調査の範囲だが、住居跡は、軸方向をともにするか、直交するかの統一を保ちつつ、3列に並設されたようにみえる。やみくもの積みかさねがこのような規則性をもたらしたとは考えにくい。よって、これらはひととき、あるいは埋没や廃絶の景観がたやすく峻別できる時のなかで終始したことになる。

既知の早期前半の遺跡のなかで、ここまで遺構間の連携を涉々とさせる光景は、他に例がない。まさに本遺跡の特徴であるとともに、検出遺構に対し大方の疑念が集中するところでもあろう。

検出できた住居跡の構造は、その疑問を一蹴するにはいささか心もとないものであった。これらは、隅丸方形から楕円形の堅穴形態と壁際に集中する柱穴列などに、おおよその統一を見いだせる。ところが、確認面から床面までの深さは浅く、燃焼施設も、第6号住居跡で石囲い状のごとき弧を描く組石を検出したものの、確定できるものはなかった。

しかし、壁直下やその付近に柱穴列を配置する構造は、沈線文系をも含めた早期前半の住居跡にまみえられる。関東では一般的なものである。

また、堅穴が軸を同じくして並列する例は、町田市成瀬西第II遺跡(松橋・池谷1990)、茨城県利根町花輪台貝塚(甲野・吉田1949)など、複数の遺跡で認められる。おなじように、住居跡の配置が直線化する例は、花輪台貝塚、四反歩遺跡、さらには成田市木の根No.6遺跡(宮1981)などが指摘できる。

これらはいずれも燃系文系期の例であり、多くが本遺跡の主体期より先出し、片手おちの非がある。しかし、沈線文系期の住居検出例は、常総台地に片より、楕円化や、壁柱穴構造の継続を見てとれるが、住居間の連携を検証できる報告例はほとんどない。

また、長野・静岡県下では、押型文系土器をもつばら出土する住居跡を中心に、いくつか検出されている。ところが、こちらは堅穴の形態や柱穴の配置など

の属性にたしかな知見を認めるに至っていない。

この現状を考えあわせれば、本遺跡群は、燃糸文系期に埋められる直線的な配列指向を意識化し、柱穴構造を継承しつつも、形態の楕円化傾向をもって早期後半への萌芽に至る変転を求めたと解する他ない。

一方、多くの集石を核としつつめぐる、環状化した礫群は、出土記録の累積そのものであり、客観性への異論をさしはさむ余地はない。往時の人々の意図は忖度できないが、彼らの生活様態に、幾何学・規則的な空間用法が備わっていたことはたしかだろう。

環を構成する礫は、その60%ほどが被熱・破砕しており、煮こぼれか炭化したような痕跡を残すものもある。反面、集石部でも受熱痕のない礫が多く出土しており、上下層での別や散布の範囲に規則性はない。

これは、礫の集積部と加熱場所が異なることを示唆している。遺跡内に散乱する礫は、北への地形傾斜に反し、環の内に少なく、南の周囲に拡散するきざしがある。この傾向は、中央から外周に向かっての投棄作業が反映されたものと考えられる。

環状の遺構分布は、中期集落のように、対立の連鎖や内外周の差別化がこれをもたらしと考えるのが一般的である。対して、早期のなかでは、別の形成過程をとるものも知られている。

早期後半の条痕文系期に造営された大里郡川本町白草遺跡（川口1993）の土壌群は、炉穴をそなえた小堅穴の周囲で環状化する。これは、対立や環への傾斜ではなく、中央からの行為を身近な周囲に求めた累積が景観につながったものである。

本遺跡の礫群も、これが投棄と仮定するならば、白草例と似かよった想定ができる。とすると、ただひとつ環内にある第13号集石の存在が示唆的である。

だが、同号の構成礫も他とちがいはなく、加熱の作業所として認められない。礫群形成の復元は、ここで行方を見失ってしまう。

ともあれ、無意識裏の環状化は、意識された住居群の直列化と対極にあることで、往時における後者の妥当性を支援することにもなるのである。

（2）出土土器と遺構の造営期

ひるがえり、これら遺構やその外部から出土した土器は、8群に分類した。

第Ⅰ群の草創期微隆起線文土器は、出土そのものが注目される。だが、4点はいずれも小片であり、文様構成を推しはかることはできない。

本遺跡で質量ともに主体を占めるのは、第Ⅱ群から第Ⅳ群土器である。

このうち、第Ⅱ群は燃糸文系末のいわゆる東山式を念頭において分類を設定した。だが、東地区出土の第1類は、器形の屈曲を目安に口縁をめぐらす、いわゆる稻荷原新段階（宮崎1981a）の所産である。

対して、西地区で大量に出土した第2類は、器形曲線の変化を無視し、沈線でこれを賄っている。いわゆる東山式土器の典型例で、第3類とした無文の口縁部や第4類で一括した胴部も合わせ、総計で1,182点を検出し、西関東の既測全例では最多量を記録することとなった。

これらにおける口縁帯の幅は0.9cm平均で、0.5cmから1.3cmまでの偏差がある。口唇部の形態は、円頭から角頭までがあり、第1類のなごりか、口唇部成形を折り返し、あるいは粘土追加で行なっているものもいくつか認められた。

口縁帯の幅と口唇部の形態は、狭化と角頭化の連鎖がわずかながら見てとれる。しかし、分布や沈線の幅などにこれら直接に反映されるわけではない。

口縁・口唇部の形態と、沈線の施文部位などの特徴からすれば、これらはおおよそ東山ⅡからⅢ段階（原田1986）に相当することになるだろうか。

これに対し、第Ⅲ群は、燃糸文系の最終末から沈線文系の初頭にまたがる両系交差期の土器を念頭においた。孤高で強固な構成の視覚的統一性を保ち、認定に異論が沸きにくい前群とは異なり、こちらはいささか内容が複雑である。

本群は表裏の器面調整の好みによって二分できる。すなわち、一方は、胎土に大粒の砂粒を意図的に混和し、器表ではこれを意図的に引きずって多孔質の視覚

的効果をもくろむ。そして、内面では砂粒の突出をおさえ、丁寧に撫で込むものである。

もう一方は、表裏ともに削り調整を行なうものの、粗砂粒を含まないために器面への影響が少なく、擦痕様の印象が強い。

前者には、第1類と第4類があたり、後者では第2類、第3類が相当する。このなかで、第1類と第2類は、撚糸文系末の、いわゆる平坂式と、その延長上に位置づけられる無文土器である。

また、第3類は、三戸1式(岡本1992)あるいは竹之内式(馬目1982)に見られる多段構成の鋸歯・格子文土器や、その前後に付属する、いわゆる凹線文土器(小野1980)の系譜上に展開する全面横位線構成の個体と考えられる。

これに加え、第4類は、削りによる横位線を文様と認定せずに、無文土器の仲間とあつかわれたり、本書のように、凹線と認定されたりと分類が一定しない。しかし、同類は、第1類では隠されていた、削り方向までも視覚効果の対象として認知し、横位方向の統一動作で主張をあからさみにしたものである。

この文様認識の萌芽は、第1類の手法を具備しつつも削り調整を多用する、確立した凹線文土器への変移過程を如実にものがたる。そしてさらに、横方向の沈線列のみで構成が終結する第3類への道のりを暗示している。

いうなれば、第1類から第2類への無文そのものの系譜と並行し、削り効果から派生した横位作業の繰り返しが、文様構成へと昇華される過程を三者が暗示していると考えられる。

仮に、第1類にみられる器面調整の特徴と、第3類の沈線施文を念頭に、胎土の趣向を配慮した共通性から短絡的にとらえるならば、前述した粗砂粒の有無による両者のちがいは、編年的な先後としてあつかうこともできるかもしれない。

しかし、この変移に指示される時間幅は、現状では限りなく短いか、併存するものと考えられている。また、第IV章で紹介した分布のちがいは、本群各類の先

後を証明するものではない。

そのため、発見できた個体数に限りのある本遺跡では、同じ時期に使用された器種の偏差と理解し、一群としてあつかった。兄玉郡美里町如来堂C遺跡(水村・宮崎1980)や大里郡川本町宮林遺跡(宮井1985)など、埼玉県北西部での出土例に本遺跡を加えれば、その妥当性はかなり高まろう。

一方、第IV群は押型文系の土器を一括してあつかった。遺構内外から1,250点が出土しているが、管見のかぎりでは、こちらもまた関東域では最多数を検出したことになる。

出土相の内容は、かたくなまでに統一性が強い。右文の94%が単純山形文の第2類、もしくは一部にこれを用いた第1類で占められている。小片なるかゆえに第7類無文にあてざるを得なかった部類を加えれば、この率はさらに増すだろう。

第2類の構成は、上位の横位に対して下位を縦位施文するT字型を基軸とする。口縁の横位帯は一段が多く、無文部をさしはさみ複段におよぶものはこれに劣る。また、わずかながら口縁横位帯を省略するものも存在した。

とくに、下位の縦位施文帯では、無文部を意図的に残す構成型が極端に少なく、多くはいわゆる密接施文で賄われている。そして、無文部を介する全面横位の帯状構成や、いわゆる横位密接施文の構成は、第1類とした遺構外118が、前者を基調とした可能性を残すのみである。

胎土の雲母が目立つものは3住15のみで、ほかは滑石のような白色粒子、結晶片岩が含有されるのが特徴的である。器厚もこの二者に対応し、前者は後者にくらべて器面のうねりなく、厚い。

これに対する他の要素は、破片数にすると極端に少ない。第3類とした遺構外255は、いわゆるネガティブ沈文の手法による楕円文であるが、253の組みあわせ格子、254の楕円とともに全面が横位密接施文された可能性が強い。

また、縄文・撚糸文などを施す第4から6類は、遺

構外257が口縁直下で横位状施文されているのが見てとれるほかは、確たる構成が判別できない。

山形文を中心とするこれらの特徴は、極沢Ⅱ式（中島1986）の一部に相当し、関東における出土相では普門寺式（酒沼・渡辺1949）に類似するだろう。

さて、これら3群の早期中葉土器の伴出関係と、住居跡をはじめとする遺構の細かな帰属判定が、調査の表面的な成果からは明確にできなかった。

関東在来と目される第Ⅱ・Ⅲ群と、外来とされる第Ⅳ群の伴出関係は、個別遺構の出土相では判断がつかない。住居跡をはじめとする遺構では、これら3群が混在し、層位や分布での識別は困難である。

この出土状態を率直に一括と見なすことも仮説の一つとして認められるかもしれない。しかし、調査区の全体に目を転じたとき、明らかな分布のちがいが存在するのである。

3群の分布傾向は第Ⅳ章で詳しくふれた。最も留意すべきは、第Ⅱ群と、第Ⅲ・Ⅳ群との範囲差である。すなわち、第Ⅲ群と第Ⅳ群はグリッド6列以北に出土品のほとんどが集中する点で同じ分布傾向を示す。これに対し、第Ⅱ群は、やはり同地区に集中が重なるものの、南方にも相当量が拡散している。また、出土点数で双駿をなす第Ⅱ群と第Ⅳ群は、北西にかぎって見ても東西方向に微妙なずれが認められる。

第Ⅱ群と第Ⅳ群のずれは、まさしく住居跡群と、環状礫群の展開範囲に対応する。両者の分布は、同じ調査区北西に片よりながらも、合致するものではない。整然とした配置の住居群、とくに第3号から第5号住居跡が成する中央列は、環状礫群を無視するかのようになぶ。両者が同じ景観のもとに共存しえないことは明らかである。

いささか強引な算定だが、ために、6軒の住居跡全体の出土比率を求めると、第Ⅱ群が28%、第Ⅲ群が2%、第Ⅳ群70%で、後者がひととき突出する。調査区全体での検出数は、第Ⅱ群が46%、第Ⅲ群が6%、第Ⅳ群が48%と、第Ⅱ群と第Ⅳ群がほぼ同率であるから、その片よりのほどが察せられよう。

住居跡群での比率は、南方に広がる第Ⅱ群を差し引いた調査区北西部の数値を反映してるともとれる。しかし、グリッド6列以北の比率は、第Ⅱ群が41%、第Ⅲ群が6%、第Ⅳ群が53%であり、わずかながらその差は縮まるものの、依然として住居跡群における第Ⅳ群の優位性は際立っている。

一方、環状礫群を構成する集石13基での比率は、第Ⅱ群が36%、第Ⅲ群が6%、第Ⅳ群が58%である。これは、調査区全体と住居跡群の中間にあり、グリッド6列以北の比率に近い。礫群のただ中にありながら、第Ⅳ群の出土比が突出する第6号住居跡などの傾向も合わせ、住居跡群の異質にかりなり。

さらに、礫との関係をみれば、調査区北西部だけでなく、7列以南でも第Ⅱ群と礫分布は合致する。5Eから8Dグリッド付近における分布の境界は、両者が示しあわせたような曲線を示す。これは、第Ⅱ群と礫利用との強いつながりを示している。

以上から、住居跡群は第Ⅳ群、対峙する環状礫群が第Ⅱ群を主体とする集団によって形成されたことを推測できる。加えて、両者の展開範囲から、第Ⅱ群と第Ⅳ群土器は、少なくともその主体の範囲では、共存していなかったことになる。

一方、第Ⅲ群は、全体に比して住居跡群での比率を下げている。しかし、第Ⅱ群と偏年的な先後傾向がほぼ判明している（原田1987）。また、これらは第Ⅳ群と分布を同じくする。そして、惣糸文系の主分布域である関東において、第Ⅳ群がまったくの単独で出土することは考えにくい。

これらのことより、第Ⅳ群に対応する関東在来系群として第Ⅲ群をあてるのが妥当だろう。住居跡群での出土比率の逆転は、個体数の少なさに起因する誤差と考えられる。

ところが、実は環状礫群は、第4号住居跡の覆土中にも展開している。これらの礫が、本来残るべき位置をたがえてないとするならば、住居跡と礫群の先後は逆転か、誤認とせねばならない。

しかし、第4号住居跡には、極度に礫が集中した、

集石と認定できるまとまりはない。むしろ、現存する環状のなかで、同所だけが際立った集中をもたないといえる。これは、同居居跡が構築された際に隣接が破壊され、埋没の過程で再度、付近の礫が散乱流入したものと理解できる。

そしてもう一つ、第II群と第IV群の大部分がともにあったとするならば、両者の出土量比に不審が生じてくる。従来、関東において客体視されてきた押型文系土器が、関東在来系譜をさしおいて、これほどまでに主体となることがあり得るのだろうか。

押型文土器の関東における進出の開始は、稲荷台式期を中心にいくつかの見解がある。そのいずれをとるにせよ、後の沈線文系期を含め、このような例は関東域では初出である。

しかし、この疑念には本遺跡の地政的な環境をあてることができる。ちなみに、本遺跡における第IV群土器の胎土には、秩父盆地北郊をとりまくように分布する結晶片岩が含まれている。その数は、識別し得るかぎりで同群全破片の約38%に達し、この一事をとっても西方とのつながりを彷彿させる。

とはいうものの、古期変成岩地層群のうち、結晶片岩を産する三波川帯は、奥秩父のみならず、信州諏訪から中央構造線とともに北部九州にいたるまで、列島の中央に沿って分布している。したがって、片岩胎土を根拠に製作地を判断することはできない。南の相模域からの経路の想定もまた可能なのである。

ところが、三波川帯の幅は狭く、山梨県ではこれが分布していない。また、東京都南部の遺跡より出土した押型文土器もこれを含まない。逆に、大宮台地に立地する北宮西遺跡では、一部の、そして時期が若干ずれるようだが、片岩が含まれている。

これらのことより、本遺跡の片岩を含む第IV群土器が、関東平野ではなく、三波川変成帯の南を縁どる秩父間地帯（堀口1973）とその延長上を指標とする何処かで製作され、樺太Ⅱ式末期の東方への拡散傾向のなかで波及に至ったことはまちがいないだろう。

同じようなことは縄文前期でも生じている。秩父郡

両神村薬師堂遺跡では、前期中葉のいわゆる黒浜期において、甲信地域に起源をもつ無繊維の釈迦堂Ⅱ3式が流入している（黒取1992）。

この一群は、秩父盆地を経由して高麗川あるいは人間川上流を下る経路で、当遺跡から4kmほど西の狭山市八木上遺跡（金子1990）にも達している。

そして逆に、山梨県一宮町釈迦堂遺跡（小野1986）では、西関東系の繊維土器の胎土に、周辺にはないはずの片岩が混和されている。

現代の交通網から受ける印象とはうらはらに、奥秩父を介した彼我の相互交流が、他の有力経路に比肩しうることが明らかとなった例である。

小畔川上流域は、直接には同盆地を縁どる外秩父山地に源を迫ることはできない。しかし、この地域は前出の二河川にはさまれている。つまり、秩父盆地から直接東に峠を越えてたどりつく、秩父間地帯の末端、そして、最初の関東平野がこの地域なのである。

秩父域の押型文土器出土遺跡は、調査例の希少さや規模とあいまって、疎密を論ずる次元ではない（中島1988）。しかし、このような環境を考えれば、当遺跡における西なる第IV群土器の突出と、第二章で示した小畔川上流域における押型文土器の濃密な分布は、他の関東域に勝る地政的な環境が招いた極相として認知されるだろう。

そのうえ、本遺跡における第II群と第III・IV群土器の様相は、摺系文系土器末期の不安定と次世代土器群の萌芽、そして、外米系列の受容時における西関東の地域差とも解せる素材を内包しているのである。

摺系文系稲荷台式後の地域差の顕現のなかでなお、単純なるかゆえに安定した視覚的統一を果たした（宮崎1981b）のが第II群東山式である。同式は西関東を主な分布域とし、本遺跡より以北では花輪台・大浦山・平坂式がほとんど伴出しない。

また、既調査の他遺跡を見るかぎり、東山式を出した遺跡では、伴出と目される押型文系土器は皆無か極くわずかである。児玉郡美里町東山遺跡（水村・宮崎1980）では、周辺に押型文系出土遺跡を望みつつ、

かつ約1,000点もの東山式土器を出土しながら、同系土器の出土は見られなかった。つまり、他を寄せつけぬ確固たる地位を保っていたことになる。

その東山式衰退の後、共存していた平板式が器種構成を維持するとされる(原田1987)。だが、平板系列の土器は、全面が無文なのがゆえに、東山系列の欠失を補うに不足があったはずである。そのような一群が長期にわたり単独で存続するとは考えにくい。

本遺跡の第Ⅲ群土器は、細々と続く関東在来の系譜が、無文の継統とともに、間線文をへて全面横位沈線文系列の構成を独自に作り出す様を示している。第1類から第3類、そして第4類への発想の連鎖は長期を要しなかったろう。

これに対し、本遺跡では、いわゆる竹之内式や、三戸類(西川1980)とされる鋸歯・格子を配置する構成は出土していない。この出土相は、欠落や先後という理解で終始すべきではない。本遺跡や前述の如来堂遺跡群を含めた西北関東の沈線文系最古期における本来の器種構成として認める必要があろう。

横位線列による地文や区画を擔する鋸歯・格子状文は関東在来にはなく、日計式押型文土器からの影響が以前より有力視されている。これが中部押型文系との攻防を回避した太平洋岸を主流とするならば、房総半島、常総台地北部経由のいずれをとるにせよ、もっとも伝達に遅れるのが西北関東域である。

第Ⅲ群3類の遺構外111は、鋸歯に傾きつつも、関東在来から発した全面横位線構成から脱することのできない系列内外の壁を象徴しているかのようである。また、直後にあたると思われる如来堂A遺跡や群馬県昭和村中棚遺跡(高沢1985)でも、鋸歯を獲得したにもかかわらず、幅狭の連続横帯区画にまで到達した構成は出土していない。

その伝達途上の不安定な間隙を押し広げるかのように、中部系派の押型文系土器が関東に進出を果たしたと考えられる。

押型文系土器の進出経路は複数が候補となっている(宮崎・金子1990)。本遺跡の場合、直接に同系土器の

主分布域に通じる秩父凹地帯のはずれに位置することが、第Ⅲ群・第Ⅳ群土器の出土量比にそのままに反映されている。

極端に山形文が多く、T型構成以外は横位施文をほとんど寄せ付けない本遺跡第Ⅳ群の姿は、沈線文系との同調をめざす中部系派細久保式直前の、関東における極限Ⅱ式最終の純粋な組成をあらわにしていると理解できる。

如来堂C遺跡では、極限Ⅱ式のT型構成を沈線でかえる土器が出土している。これは、沈線文系初期と同式が呼称の間柄にあることを示している(中島1988)。だが、同時に出土した沈線文系は、本遺跡と類似した器種構成を擁するものの、確立した竹之内式・三戸類が存在しない。

ところが、第Ⅳ群1類とした遺構外の118は、横位押型帯状施文の無文部に鋸歯状文を充填する。このような鋸歯構成は、関東をはじめ中部系列の押型文にも本来存在しない。日計式押型文土器や竹之内式・三戸類いずれかとの関連が考えられる。

しかし、中部・関東の押型文系は、基本的には、重複施文に不向きな特性を有している。したがって、横分帯が確立した竹之内式が成立することによってはじめて移封への発想が容易となる。

遺構外の2資料は、広域な情報伝達のなかで発生した外来の三戸幾何学文系列(恩田1991)との交渉を間接的に暗示するものである。現在のところ、これらが他の第Ⅲ・Ⅳ群と明確に弁別、そして分離できる根拠は見あたらない。

したがって、本遺跡の第Ⅲ群土器は、西北関東に位置するために、新旧の流れを共有しつつも、外来系派構成の受容に遅れた在来系派の純粋な姿を反映していることになる。

このように、本遺跡の早期中葉土器は、撫糸文系最終の安定と沈線文系移行期の不安定、加えて、当地周辺の地域相を、3群のあざやかな鼎立によって示しているのである。

(3) 出土石器

一方、212点が出土した石器は、打製石斧などの一部製品が中期加曽利E式に伴うほかは、大方が早期中葉に製作使用されたと考えた。県内における早期石器群の検出数としては東山（水村・宮崎1980）・北坂（水村1981）・四反歩遺跡と並び、最多の部類に属することになる。

そのなかで、本遺跡に期待されるのは、大量に出土した第IV群押型文土器に伴う石器群の実態であろう。しかし、同群に特徴的な石器形態として特定できたものは、量比の上では少ない。また、これに漏れたものにしても、石材が豊富にもかかわらず、石核石器に乏しい信州方面に照らしても、第IV群土器の出土比率を乗じた石器点数を期待するのは無理であろう。

とくに、礫器・スタンプ形石器などの大半は、関東在来系文系で培われた石器群であり、第Ⅲ・Ⅳ群製作期には、かぎられた一部以外、継続することはなかったろう。石器製品の分布では、土器との整合性を見いだすことができないものの、スタンプ形石器が住居跡から出土していないのが特徴である。

第Ⅱ群と、第Ⅲ・Ⅳ群との時間差は、研究の現状では極めて短いといわざるをえない。しかし、両者の継続は礫群と住居跡群の検討のなかで否定されている。このわずかな間に石核石器の伝統は、急速に衰退していったものと考えられ、燃糸文系最末期の激変は生業の手段までも伴うことを暗示している。

個別の器種に目を転ずると、石鏃では遺構外の319が典型的な鏃形鏃で、関東在来には極めて少なく、押型文土器とともにもたらされた可能性が高い。また、遺構外320の先端突出型も、時期さかのぼる可能性もあるが、中部域に招請を求められるだろう。

そのほか、燃糸文系の石器群としては平基かやや少ないようにもとれるが、局部磨製石鏃や、ハート形石鏃、そして、いわゆるトロトロ石器を欠き、二等辺三角形がもっぱらなど、関東的な色彩が濃い。

削器は大きさから形態まで多彩で、素材剥片の剥離法や意図の有無、あるいは楔形石器に近いものなどの

分離をも含め、判断がつかない要素が多い。

これに対し、砥石は中部域の押型文系と、西関東域の燃糸文系の双方で普遍的に使用されている。しかし、面利用の傾向は前者に多く、とくに遺構外433のような、端部を使用面とするものが特徴的である。

ともあれ、本遺跡での主体は、燃糸文系後半の西関東に盛行した狭義のスタンプ形石器と、礫器である。後者の一部は定形的で、これを石核と認定する明確な根拠は、少なくとも本遺跡では、見いだせない。

礫器の大方はホルンフェルスを用いており、仮に素材剥片を求めたとしても、小型剥片石器としての有効性は少ない。現に、剥片石器たる削器、そして、強引に石鏃を含めたとしても、本遺跡におけるこれらの素材はチャートと黒曜石が大半で、通ずる石質は1点の同材か、一部の砂岩でしかない。

これは、剥片生産ではなく、打割残核を利用目的としたことをものがた。となると、本遺跡の礫器が礫器として機能していたことは疑いない。さらに詳しく見ると、一部のものは、目的に即した定形化が成立していたこともわかる。

第2から5類として分類したものにこの傾向が顕著で、形態的に三角型と横刈型の両極の狭間を間断なく変移する。

前者は刃部が尖り、一点作用の効果的な衝撃をめざしたものにとれる。削器とは異なり、礫器は刃部角度が鋭く、重量による破壊力と強健な刃部が鋭利さに優先される機能が想定できる。粗加工のなかでさらにこれを求めようとするとき、尖刃は効果的である。

反対に、後者は作用点が分散し、前者に比して破壊力が劣る。しかし、連続した破壊作用が期待でき、挽く・はらうのに適している。

いずれにせよ、礫表を残す基部は、着柄に不適で、前者は握り振りおろす、横刃は振りまわす仕事を念頭に製作されたものだろう。

具体的に断言できないが、粗い加工と重さは、微細にこだわらぬ作業の内容と、対象の大きさを示している。たとえば、前者は根菜類の採集、後者は軟質木

工などに備え所持されていた可能性を指摘できる。

また、第7類としたものは、早期に多い礫石斧ともとれる。だが、他遺跡の同類より厚さに長じており、礫器的な要素が強い。この種の石斧にともなう磨製石斧も2点を検出したのみで、関東熱系文化系遺跡のなかでは少ない傾向がある。これが、遺跡単位の偶然か、地域や地代差に起因するのか判断できなかった。

これに対し、スタンプ形石器は遺構内外より56点が出土し、本遺跡石器群の主体を占める。このうち、遺構外412の形態や、基部と作業面のなす角度は、北関東域に多く分布する三角錐状石器に類似する。

だが、中層遺跡などで出土した典型的な三角錐状石器で普遍的な磨縁への多方向刻削加工を行なわない。そして、石材も他と同じ砂岩で、細粒均質なもの(石坂・岩崎1988)を用いているわけではない。

同石器の欠落と、スタンプ形石器の多出は、従来から指摘されている西南関東の熱系文化系後半期における石器群の特徴から逸脱するものではない。

スタンプ形石器については、以前より形態や製作法に対する分類がきざねられてきた(小田1980ほか)。これらの間隙を埋める視点をここで示すことはできない。だが、依然として残る課題が、本遺跡でもかわらず認められた。すなわち、石器製作の手間と使用の痕跡が両立しないということである。

本遺跡出土品では多くに使用痕が認められた。底面の摩耗痕を見いだせずとも、硬台との接触によって生じたと思われる底磨縁の細砂離までを含めれば、大半が使用に供された製品ととれる。

しかし、底面摩耗の多くは、剥離稜線と外周部の一部にかぎられ、あけぐ、遺構外417・418などは、入念な磨縁加工をもって石器製品を仕上げたにもかかわらず、底面に摩耗痕がほとんど残らない。

このことが、大方が堅果類の開殻作業に思いを馳せるにもかかわらず、使途の限定に慎重にならざるを得ない環境をつくっている。加えて本遺跡の場合、スタンプ形石器が堅果類の打割具だとするならば、セットになるであろう石皿や台石類が少なすぎる。

このような行きづまりを打開せんと、近年スタンプ形石器の使用法に対する新たな見解が提出された(早川1992)。従来、対象物に向けた作用側という視点でのみ語られてきたこの石器に、ほぞ付きの古木に固定した後の側縁に被作用の機能部を想定する。底面につきまとう矛盾は、この大胆な発想の転換で、解決するようにも見える。

しかし、本遺跡での観察結果はこれを無批判で支持するものではなかった。着古に際しての調整とされる底磨縁の細砂離は、底面の摩耗痕と対応するものが大半で、形態の細調整を意図したとしても、少なくとも本遺跡の例はなんら改善になっていない。

そして、摩耗痕の解釈として示された磨石類への転用は、第4号集石出土品のように、逆に磨石・凹石の破損品のなかでスタンプ形石器に転用可能なものが選ばれた可能性の方が強い。

また、遺構外420・421では、平坦面を残す上下の双方に摩耗痕と細砂離痕が認められた。破損を機に着古部を反転したとも解せるが、後者の倒立使用は着古の固定部が不安定で、いさかおさまりがわるい。

とはいうものの、底面加撃と着古のいずれの説に対しても、肯定の確実な根拠を見いだせなかった本報告では、両論を示すに終始せざるをえない。

ちなみに、スタンプ形石器とほぞ付木台の発想は、四部彫りの目的を対象物の固定とすることで、底面加撃でも援用できる。さらに、植物質補助具として、加撃時の古部と石器本体の間に介した緩衝材なども想定できる。これは、穿孔したチップや蔓編みなどが考えられ、対象の固定と粉砕の防止を兼ねることができ。たとえば、堅果類の開殻では、加減を気にせず、手早く、しかも粉砕を避けつつ作業ができる。

そしてなによりも、軟質物との接触は、使用痕が残りにくく、底面機能部での矛盾をいくばくか補うことができるだろう。ひいては、本遺跡におけるスタンプ形石器と石皿・台石類の数量的な不均衡とも整合することになる。

2 上原・向原遺跡

今回の調査は、東西に入組む両遺跡を南北に貫く形で進めた。検出できた遺構・遺物の大半は、上原・向原遺跡ともに、縄文時代中期の所産であった。第V章でもふれたが、両遺跡は大字境の生活道路を目玉に対面している。調査の結果、遺構・遺物の分布は疎であるものの、途切れなく広がることが判明した。

両者が実質的に同じ遺跡であることは、検出集落の質によっても支持できる。南小畔川への斜面では、勝坂系期の集石が集中する。加えて、住居跡をはじめとする同期遺構群は上原遺跡の北半で終始する。

調査の範囲では、その後、勝坂末から加曾利E系初期にかけて、しばしば断絶が認められる。そして、上原遺跡南半で再び稲音が響きはじめる加曾利E II期以降においても、時を追うにつれ、内陸へとむかう。

この傾向は南に向原遺跡を加えてもかわることはない。それどころか、さらに台地奥へと遺構・遺物の主分布が移動する様を、その成果はあらわしている。

おぼつかないながらも、かろうじて連続性が認められる中期後半集落の変遷も、向原遺跡D区で検出した加曾利E III期の第5号住居跡を最後に幕を閉じる。広大な遺跡の範囲を南北に縦断した調査区は、はからずもこの変移を手とり早く教えてくれた。

取水源を遠ざけてまでも敢行された、いわば集落の奥地化は、往時の人々のどのような欲求に起因するのか、今回の調査では、即座に判断できる根拠を発見できなかった。

一見して判別できる中期前後半の差は、集石の有無と遺構の深さである。しかし、両者ともに埼玉県西部の該期遺跡では普遍的な現象であり、これだけでは本遺跡の独自に帰趨させることはできない。

両遺跡でのまばらな遺構や遺物の分布は、さながらここが拠点あるいは定点的な集落として位置づけられていなかったことをほのめかすかのようである。

この検出は、遺構形態、とくに住居跡の堅穴規模を詳しく見るとさらに増幅する。それぞれの遺構は、検出状況の悪さや、検出数のわりには偏差が著しく、個

別の詳しい検討には耐えられない。上原遺跡第6号住居跡が、出土遺物とともに、阿玉台系列の属性を備える（伊藤1986）ことが判断できる程度である。

しかし、全体を見わたすと、堅穴が判別できた住居跡は、中期の前後半にかかわらず、4 m径程度の小規模なものが多い。あげくに、加曾利E期では、上原遺跡第19号土壇のように、径2 mたらずの掘り込みに燃焼施設を伴うものさえある。

ところが、周辺の遺跡、たとえば敷能市芦刈場遺跡（成近1979）では、崖内から加曾利E I古段階の住居跡8軒を調査したが、8 m規模の一軒を除き、上原遺跡と規模の上で変化ない。また、同市堂前遺跡（柳戸1986）でも、新道から加曾利E I中段階の住居跡6軒を調査しているが、この傾向にかわりない。

これに対し、日高市二反田遺跡（西井・金子・岡本1993）では、加曾利E I新时期からE II新时期にかけての住居跡13軒を検出しているが、径5から6 m規模がすべてで、柱穴・燃焼部構造も歴然としている。

断絶期をはさむ中期前後半にみる周辺遺跡との異同は、そのまま本遺跡における集落の継続性に通じる。すなわち、前半期は、周辺と大差ないことから、居住空間としての住居が、後半期ではその差から、臨時的な作業空間が意図されていたと推察できる。

前者は、数こそ少ないものの、集石を周辺にしたがえつつ、本遺跡を拠点とした起居を続けていたと考えられる。そのため、取水源に近い南小畔川岸に諸遺構が分布する景観となったのであろう。

対して、後者は、恐らくは疎林中の生業施設として設営されたと思われる。臨時的なもので、水源池に捕われる必要はない。そして、時を重ねるにしたがい、作業対象の採取地が移動し、その距離を優先させたがために、台地奥への進出が加熱したととれる。

このように考えれば、向原遺跡第1号住居跡より打製石斧の未製品が多く出土したのも、この生業活動に関係すると解することもできるだろう。

なお、向原遺跡第14号土壇よりはチャートの小礫が

充填された土器が出土した。出土状況の特異性や粒大の均質度を考慮し、礫種の鑑定を委託した。比較試料は、約7km北東の入間川の礫をあてた。

その結果、現入間川の43.3%に対して95%ものチャートが突出する結果となった。これをそのままに見れば、細かな礫を選択的に採取することにより成立する特異な思维行動を想定せざるをえなくなる。

だが、向山遺跡の今出土石類は、チャート84.1%、砂岩8.4%で、第14号土壌例と近くなる。同遺跡は南小畔川に面しており、黒曜石や緑色岩など、石器製作を念頭においた特殊な搬入石材を除いては、眼前の河原よりこれを調達してきたものと考えられる。

向原遺跡の場合も、上原遺跡を介するものの、至近の砂礫露頭は、入間川ではなく、南小畔川であり、必要にせまれば、まず同川を利用するだろう。

そのような観点から見れば、土器内の小礫は、同川よりもたらされ、礫種の意識的な選別はなかったものと判断できる。

しかし、石質のより分けがにせよ、小礫を努めて集めるには、そこに採集者の意志と目的が直接に反映されていることは確かである。

このような出土状況がいかなる行為の反映であるかは、よくわからない。さきに述べた向原遺跡の性格を振り所とすれば、非日常をめざしたのではなく、なんらかの作業を容易ならしめるために用いられたと解するのが妥当だろう。

一方、両遺跡から出土した中期遺物は、さほど多くない。このうち、上原遺跡出土の勝坂系土器は、大方が埼玉編年第VI期(谷井1982)、藤内期にあたり、唯一第5号住居跡出土品がやや時代降る井戸尻期に相当するかもしれない。

また、向原遺跡第1号埋嚢は、埼玉編年第IVb期、貉沢期に相当しよう。ただし、同土器は、把手部の形態的特徴と、器形・施文手法の点で、勝坂・阿玉台両系の特徴をあわせもっており、判断が難しい。

阿玉台Ib式の典型的な突起をもちながら、胴部懸垂文を欠くこのような土器は、阿玉台系列の西岡東に

おける地域性とのかかわりがある(谷井1982)。なかでも本品は、それに加え、阿玉台・貉沢両系列の基本属性である楕円区画を排し、かつ多段文様帯構成をとるといふあいまいさが幾重にも重なった土器である。

ともあれ、勝坂前半期の遺構は県内でも調査例が少なく、所沢市證郷遺跡(岩井1970)、入間市金堀沢II遺跡(斉藤1993)など、県南西部に片よっている。

第III章でも述べたとおり、遺跡周辺の小畔川上流域は、中期に至り俄然その勢いを増してくる。ここでは前出の芦刈場・堂前遺跡に加え、上原・向原遺跡でこの期の遺構を検出したことにより、普遍的な存在が確たるものとなった。

その点では、東京西部域と連携しつつ、県内でもいち早く継続的な中期文化の幕開けをむかえた一帯となり、その普及の北限として位置づけられるだろう。

一方、中期後半期の加曾利E系では、向山遺跡第7号住居跡もあわせ、連弧文系土器の安定と条線地文の多用が特徴的である。二反田遺跡をはじめとする周辺遺跡をも合わせ見ると、その傾向はEⅠ新段階に顕現し、EⅡ中段階に最高潮となる。

上原遺跡遺構外32のキャリバー形土器は、強固であったはずの旧来の口縁部文様帯構成が、連弧文土器をはじめとする他系の攻勢にさらされ、ゆらく、EⅡ中段階の様を垣間みることができる。

ところが、口縁無文型土器などの存在はあるものの、典型的な曾利系土器の出土は少ない。これは、当地域が相模川経路の曾利系流入を、東京多摩域の遡過を経て、さらに連弧文系土器流入の余波として受容したことを示している。

上原・向原遺跡で出土した中期土器は、この地が西北関東に傾斜し、南方との差が際立つ加曾利E系成立前後を避けるかのような時代幅を指し示す。これが、時代や集団の選択性によるのか、はたまた偶然なのか判断がつかない。だが、この期を欠くことでより鮮明に、武蔵野台地南西部や多摩丘陵域との連携を抽出できるのである。

3 台地と流域、南北と東西

建武二(1335)年、鎌倉幕府最後の将宗北条高時の次男時行は、幕府の再興をはかり、亡命先の信濃で挙兵した。守護小笠原貞宗を駆逐した時行は、諏訪頼重らとともに一路鎌倉をめざし、むかえ撃つ足利直義の軍勢と武蔵女影原で対峙する。

この戦いで勝利をおさめた時行軍は、同国の小手指原、久米川、府中と直義軍を連破し、その直属軍を現町田市の井手沢で撃破、鎌倉を手中にした。

京を陥した足利尊氏に敗走し、1月あまりで夢ついていたこの戦乱は、中先代の乱として史上に刻まれ、時行の破竹の行軍は、上野をめざす鎌倉街道上道(埼玉県立歴史資料館編1983)の道のりを今につたえる。

両軍が覇を競った女影原は、本道跡群より2.5kmほど北北西の日高市女影付近とされている。さらに、向山道跡の東に接する下向山道跡では、同街道にあたる道路跡が調査されている(西井・金干・岡本1993)。時行の軍馬ひしめき、新田義員が怒濤の詰めを演じた中世の大道は、本道跡群の近辺に開かれていた。

「いざ鎌倉」を容易ならしめ、あまたの武将の志と失意を見つめたこの軍用道は、近世に隆盛を極めた荒川低地帯での水運とともに、関東西部の南北をつなぐ高規格の幹線道であった。

なぜ、ここに道ができたのだろう。

第2図に見るように、荒川以西で南北の最短をめざすには、古扇状地形の影響で北東をさす谷を横ぎらねばならない。ところが、下流は入間川や高麗川、そして大河荒川の氾濫原が広がり、渡河や低地部の路盤維持に苦勞する。また、上流は高麗・加治などの丘陵地帯で、起伏が迅速な進行を妨げかねない。

その両者の中庸にあることが、この界隈に脚光をもたらす一つの要因であったことは疑いない。

この地政的環境は、さきに示した向山道跡の惣糸文系土器や石器の地域性にも通じている。スタンプ形石器が表象するように、これらがもつ因子は、関東西部を連鎖した東山式土器でもより南方に傾斜する。

おなじくこれは、上原・向原道跡の中期土器にもお

よび、道跡の継続が南方優位時にのみあることや、以北における道跡内容の現状を加味すれば、西南関東的な要素が容易に立ち入れる北限といえよう。

あたかも時行軍と直義軍が女影原で出あったがごとく、南北方向の情報がこの地でせめぎあっていたのである。同時代の様態はまさに、貫流する河川をこえ、広義の武蔵野台地にそなわる利点を象徴する。

これに対し、向山道跡の平坂・沈線文系土器は、東に外來系列を望みつつも、受容に遅れた西北関東の組織を示していた。また、惣糸文系土の拮抗が瓦解したとき、間隙をついた押型文系土器は、外秩父山地を刻む東西二つの河川をたよりにこの地に到達した。

これらは、勝坂系と阿玉台系が同居する向原道跡第1号埋襲例をもふくめ、北東流する河川の方向をよりどころとした流通経路を象徴している。

本書で報告した主な時代は、縄文時代の関東西部で小畔川上流域がきわめた二つの繁華をなぞらえることとなった。そこでは南北一帯地、東西一流域という情報伝播の二つの属性がめまぐるしく入れかわり、一部では混交しつつ地域相をかたちづけていた。

本道跡群周辺の地形的な特徴は、さして他とかわらない。しかし実は、南北と東西が行きかう情報の交錯点であったのである。これはなにも縄文や中世にとどまらない。小畔川上流域の地政的な優位性は、時をこえ、さまざまな形で求められ続けている。

たとえば、弥生・古墳時代を経て、古代に至るとあたりは繁栄をとりもどす。霊亀二(716)年、東国の高麗人1,799人がこの破城に入殖し、高麗郡が成立した。同じころ、付近には武蔵国府をめざす東山道武蔵路が敷かれ、南北の連鎖が重ねてあらわれる。

近年、所沢市東の上道跡で同路に比定される路面が調査され(飯田・粕谷1990)、現存中街道に沿う所沢以南の経路はほぼ確定した。だが、以北では、川越市の場合付近で小畔川を渡河する意見(木本1992)と、等幡付近にこれを求める考え(井上1994)がある。

しかし、いづれをとるにせよ、同路が小畔川上流域

と至近の位置にあったことは疑いない。ここにも、往来としての制約があるからである。

東山道武蔵路の敷設年代は不明である。だが、東の上遺跡例の上限は7世紀後葉にあり、第一次規格路の構築は8世紀中葉で放棄されている。また、『続日本紀』宝亀二(771)年来にみる、武蔵国の東海道への帰属がえの太政官奏上からすれば、この時すでに放棄にたる整備完了後の期間が経過していたととれる。

律令制整備の環境として、710から720年代に極まった国郡改組の趨勢のなか、これらを結ぶ官道の新設や整備も行なわれただろう。路盤の造成や維持で高麗の民が辛酸をなめていたことは想像に難くない。

とすれば、一步進んで高麗建都も、すじみちのない集団入殖ではなく、道路によってにわかに生じた有効地が着目され、道路のために、道路を目安として政治的に強行された可能性も否定できないだろう。

このように考えると、空白の弥生・古墳時代からの復興は、台地を貫く南北への要路に付随する必然と位置づけられる。そして逆に、所沢市から比企郡都幾川村にまでおよぶ広域長期にわたる空間化は、流域優先の大局のさなか、稲作にそぐわぬ上流域がこうむった東西の不均衡を反映するとの理解も可能となる。

時降り正平七(1352)年、観応の擾乱に際し、時行は再び尊氏勢と戦火を交える。武蔵野合戦における南朝方の退路は、ここでも鎌倉街道上道であり、時行らがしのぎを削った高麗原も女影原の付近にあたる。

同道は、路程の実際には異同あるだろうが、東山道武蔵路の人や物資の流れを礎としているはずである。いうなれば、古代の官道は情報経路の発露で、中世のそれは、次に訪れる対立と混交を象徴している。

そして、この南北への傾斜は、近世でも道筋をかえながら存続する。遺跡群は当時、大谷沢村と田木村にわかれていたが、両村をかすめ、八王子千人同心の日光東照宮勧番のため利用された往還が通っていた。

ところが、この期の南北は、直接に政経の中心をめぐらしたわけではない。鎌倉から江戸へと求心地が遷移した上に、水運の発達により、北西関東への最短経路

の利潤は人谷台地や、武蔵野台地でも荒川近くに移動した。かわって南北には新たな機能が雪かされる。

大谷沢・田木の両村は、高麗郡加治領に属し、大方が旗本領のまま幕末をむかえる。いうまでもなく、旗本・天領を江戸外周に配するのは幕府の防衛方針であり、遺跡群から5km西の栗坪村には高麗陣屋がおかれた。その管轄は、上野境の幡豆郡から南は多磨郡におよんだ。沙汰が日光脇往還を念頭に下されたことは容易に察しがつく。

首都圏の外郭としての機能は、近代の強兵政策でさらに研ぎすまされる。首都防衛をめざし、軍事施設が次々と設置され、航空関係では日高高架、坂戸、東松山唐古などの飛行場が南北に点在していた。また、小畔川下流には川越火工廠が、そして、向原道路周辺は戦後占領軍の駐屯地としても利用された。

前者の経路は、軍需物資の運搬を企てつづ昭和8年に開通したJR東日本八高線にも通じる。また、飯能市でこれに接続し、茨城県土浦市とを結ぶ「土飯線」は、まさに本遺跡群のただ中を東西に貫き、小畔川に沿うように計画されていた。

現代の到来とともに軍需は影をひそめたが、依然この地が情報・交通の交錯点であることにかわりない。台地を貫く日光脇往還は国道407号線、高麗川をたどる秩父往還は国道299号線と名をかえ、入間川右岸には、東京圏を結ぶ国道16号線が設定されている。

これらの旧新道、さらにはバイパスが並び、交差するこのあたりは、物流の要衝として大小のトラックが行きかい、交通渋滞が慢性化している。

このように、小畔川上流域は、関東西部における地政的な要路や均衡に応じてきた。向山遺跡、そして上原・向原遺跡にみる縄文の興亡は、時々偶然によるのではない。この地域のもてる地政的現境がもたらす必然のなかでこそ真の背景が理解できるのである。

そして今、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道が、いにしへの躍動をひもときつつ、この地に新たな幕を開こうとしている。

付 編

向原遺跡出土炭化材および炭化種実類

1. はじめに

向原遺跡は、日高市田木地内に所在する縄文時代早期および中期の住居跡および土壌群からなる遺跡である。これら住居跡内や土器内や炉穴内あるいは土壌内からは、炭化材や炭化種実類からなる炭化物が15試料出土している。また、土壌内充土の下部からは、ほぼ単一種からなる礫集合物が検出されている（SK-14出土土器）。

ここでは、これら遺構遺物内から出土した炭化材と種実類の種類を同定し、当時の燃料材と、食料としての種類について若干の検討を加えるものである。また、土器内の礫集合物については、その礫種を検討する。なお、炭化材については藤根久が担当し、炭化種実類については吉川純子と担当し、土器内の礫集合物については菱田量がそれぞれ担当した。

2. 炭化材

a. 方法と結果

同定を行なうにあたって、横断面において1年輪以上確認される炭化材片を選び出し、実顕微鏡下で観察して可能な限り組織的に分類を行なう。分類された試料のうち保存状態の良い炭化材1片を選び、切片カミソリなどを用いて横断面（木口と同義）、放射断面（年目と同義）および接線断面（板目と同義）の3断面を作成する。これらの試料は、直径1cmの真鍮製の試料台に固定し、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM T-100型）で観察し、現生標本との比較により、樹種の検討を行なう。

観察および同定の結果、10分類群（113点）を検出することができた。以下に、10分類群の特徴記載およびその同定の根拠を示す。なお、数量については、一括とりあげ試料であり、採取時やその後の分割が考えら

藤根 久・吉川純子・菱田 量（パレオ・ラボ）

れることから、検出数がただちに意味をなすものではない。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon*
マツ科

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は窓状であるが、放射仮道管の水平壁は鋸歯状であった（放射断面）。エビセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で2~11細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、マツ科マツ属複維管束亜属の材と同定される。マツ属複維管束亜属樹木には、暖帯の沿岸沿いに見られるクロマツ（*P. thunbergii*）、本州の暖帯から温帯にかけて見られるアカマツ（*P. densiflora*）がある。

マツ科—属 *Pinaceae* マツ科

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は炭化しているため明瞭ではない（放射断面）。エビセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で2~11細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、種あるいは属の特定は困難であるが、カラマツ属やトウヒ属などの可能性がある。カラマツ属には宮城県以南の日当たりのよい山地に生える落葉針葉樹のカラマツ（*Larix kaempferi*）がある。また、トウヒ属には北海道に生えるエゾマツ（*P. maximowiczii*）などがある。

針葉樹 A

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早から晩材への移行は緩やかである(横断面)。放射組織は、柔細胞のみからなり、単列で2~4細胞高である(接線断面)。分野壁孔は炭化しているためその特徴を確認できない(放射断面)。

以上の形質から、極あるいは属の特定は困難であるが、放射組織の細胞高からヒノキ科のヒノキ属の可能性がある。ヒノキ属の材にはヒノキ(*Chamaecyparis obtusa*)とサワラ(*C. pisifera*)がある。ヒノキは、本州、四国、九州の温帯に分布し、サワラは本州および九州に分布する、ともに樹高30~40mに達する常緑針葉樹である。

針葉樹 B

樹脂細胞は確認できないが、仮道管、放射柔細胞からなる針葉樹で、早材から晩材への移行は比較的緩やかである(横断面)。放射組織は、柔細胞のみからなり、単列で2~5細胞高前後である(接線断面)。分野壁孔は炭化しているため特徴を確認できない(放射断面)。

以上の形質であるが、種あるいは属の特定は困難である。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

クルミ科

大型の管孔が、やや径を減しながら単独または放射方向に2~4個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管の穿孔は単一である(放射断面)。放射組織は異性に近い同性で、1~4細胞幅、3~20細胞高である(接線断面)。

以上からクルミ科のオニグルミの材と同定される。オニグルミは全国の温帯から暖帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高25m、幹径1mに達する。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の管孔が1~10列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火災状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースが見られる。また、軸柔組織は短接線状に配列する(横断面)。道管の穿孔は単一である(放射断面)。放射組織は柔細胞で同性で、単列希に2細胞幅、3~14細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のクリ属クリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高20m、幹径1mに達する。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

年輪のはじめに大型の管孔が4列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火災状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり、著しい。道管の穿孔は単一である(放射断面)。放射組織は単列同性のものと集合放射組織からなる(接線断面)。

以上から、ブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Q. serrata*)や、ミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ(*Q. dentata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)等がある。いずれの樹木も樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹で、温帯から暖帯にかけて広く分布する。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科

年輪のはじめに大管孔が1ないし4列に並び、夏材部では小管孔が2~11個程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内腔にはややせん肥厚が明瞭に認められる(接線断面)。放射組織は、柔細胞で異性1~6細胞幅、1~31細胞高で、大型の結晶細胞も認められる(接線断面)。

以上から、ニレ科のケヤキの材と同定される。ケヤキは樹高35m、暖帯から温帯にかけて分布する幹径2mに達する落葉広葉樹である。

サクラ属 *Prunus* バラ科

全体的に2〜3個放射方向あるいはやや斜め接線方向に複合して散在する参考材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁には、らせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性で1〜4細胞幅、1〜20細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。日本に分布するサクラ属の樹木には樹高25mに達するヤマザクラ(*P. jamasakura*)など数種類あり、暖帯から亜熱帯にかけて分布する落葉広葉樹である。

タケ亜科(ササ類) subfam. Bambusoideae イネ科

左右の後生本部、外側の後生本部・原4細胞および内側の原生本部の周囲を維管束鞘が、取り巻く維管束が、多数散在する(横断面)。

以上から、イネ科のタケ亜科の科と同定される。タケ亜科には、タケ類とササ類があるが組織的には識別できない。試料は、いずれも稈の厚みが3mm前後で、直径も比較的小さいことからササ類と思われる。

b. 考察

15試料の遺構遺物内からの出土した炭化材の樹種を検討した結果、113点の炭化材について10分類群が検出された。15試料のうちSK-2とSJ-5埋嚢については、炭化物が含まれているものの、十分な大きさがなかったため樹種を検討するまでにはいけなかった。

全体的に見ると、クリ、コナラ属、ケヤキ、マツ属、複雑管束亜属、オニグルミ、マツ科一属、針葉樹A、サクラ属、タケ亜科が検出されている。時代別に見ると、点数としては早期と中期ではほぼ1対1程度で検出されているが、分類群数では、早期が5分類群、中期が大半の9分類群である。

当時の遺跡周辺の植生は、花粉化石などのデータが不足しているため断定できないが、コナラ属(コナラ属やクヌギ属)ニレ属—ケヤキ属あるいはモミ属などの樹木が多いものと考えられる。

2. 炭化種実類

a. 結果

試料は多量の炭化材に含まれた炭化種実類を顕微鏡下で選び出した。炭化種実類が含まれていた試料番号と種類、個数を表(炭化種実類表)に示した。

出土した種類はオニグルミの核と、分類群不明の果実と思われる炭化物のみであった。きわめて多量なのはD区SK-5で241個のオニグルミの破片を出土している。次に多いのはB区SL-10の98個、A区SJ-1の42個となっている。

このうちSJ-1は炉内充土となっているが、他の2試料の条件は不明である。また、SK-15およびSJ-5埋嚢は土器および埋嚢充土となっている。その他の試料の条件は不明だが、どの試料も比較的同数の炭化核を出土している。

オニグルミは核を割り、中の脂肪分の多い子葉を食用とする。核は壁が厚く木質で炭化して残りやすい。そのため住居の炉内でも炭化材の小片と同じ様な挙動をとりやすいのではないかと考えられる。

次に出土した分類群の記載を行なう。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

出土したのは木質の核の壁が割れて小片となったものである。核の表面には特有の凹凸や彫紋があり、核の内側は2〜4室に分れており、破片になっても複雑な凹凸がある。従って、かなりの小片になっても、激しく燃焼しなければオニグルミの核であるということが確認できる。

不明種

出土したのは果実部分と思われるが、表面の焼け方が散見しか、あるいは摩滅されているらしく、種の確定は出来なかった。やや欠けている部分から、内部の炭化の様子を観察すると、水分の多い液果などではなくやや堅めの石果などのである。

3. 土器充土中の礫について

a. 方法

向原遺跡SK-14の遺構より出土した土器(縄文時代中期 加曾利EⅡ)を充填する土壌中に含まれる礫について、その粒度組織と構成される礫の種類・組成を調べるために分析を行った。

粒度分析はあらかじめ2.0mmのふるいによって、ふるい分けしてある試料を用いて、φ(ファイ)スケールにより、-3.0φ(8.0mm)から1.0φ(0.5mm)のふるいを0.5φ間隔で、9枚重ねて乾式でふるい分けを行った。

器種は、ふるい分けしていない試料について、肉眼および実体顕微鏡による観察により、礫それぞれの特徴を記載し岩石名を決定し、個数%により組成をもとめた。分類は砂サイズ(2.0~0.063mm)の粒子からなる主として灰色~暗灰色の堆積岩を砂岩、シルト~粘土サイズ(0.063mm未満)の粒子からなる、主として黒色の堆積岩を泥岩・頁岩、珪質な堆積岩をチャート、他の不明な粒子も含めたものをその他とした。

さらに、チャートについては、その色調や構造的な特徴から分類した。また、比較試料として、向原遺跡近くを流れる人間川の現河川の礫(川越市雁見橋付近にて採集)について、土器充土中の礫の粒径とあわせるために-3.0φ(8.0mm)から1.0φ(0.5mm)の間の粒径の礫について、同様にして礫種を調べた。

b. 結果

(1) 粒度分析

図からわかるように、-3.5φ(11.3mm)を超えるような粗粒な礫は含まれず、-2.5φ(5.66mm)から、-0.1φ(2.0mm)の粒径に集中し、淘沙が良く、平均の粒径は-1.85φ(3.61mm)で標準偏差0.48である。また、礫の最大粒径は11mmである。なお、粒度係数の算出は(Friedman 1961)による。

(2) 礫種組成

土器充土中の礫635個について観察したが、この中には、礫ではなくロームや土壌が凝集して軟質な粒子

が142個(22.3%)含まれていた。

これらを除く493個について礫種を調べた結果、チャートが95.0%を占め、わずかに砂岩(1.8%)、泥岩・頁岩(1.6%)、その他(1.6%)を含む。また、全体的に角張った礫が多いのが特徴である。

一方、人間川現河川礫については、チャートは含まれるが、43.3%と割合は少なく、砂岩が30.6%、泥岩・頁岩が21.8%、その他が4.3%含まれ、全体にやや円磨された礫が目立つ。

土器充土中のチャートについては肉眼および実体顕微鏡観察による特徴から以下の11種類に分類したが、煩雑になるので表現上は大まかに、黒色、灰色、黄褐色、赤褐色、灰白色・白色、その他という7種類の色調による分類にし、人間川現河川礫中のチャートもこれに従った。

なお、この特徴記載の中で、色調は『新版 標準土色帖』を用いて観察した。また、脈というのはチャート中によくみられる0.1~0.3mmくらいの、主として石英からなる白色筋状にみえるものであり、透明感が大きいほど珪質かつ、泥質が少ない傾向にある。

【チャートの肉眼的特徴記載】

・黒色

- ①黒色(5Y 2/1)：脈少ない、透明感ややあり、表面滑らかである。
- ②黒色(5Y 2/1)：脈多い、透明感ややあり、表面凹凸あり、表面やや風化して褐色~暗灰色、および灰白色がかかるものあり。

・灰色

- ③黄灰色(2.5Y 6/1)：黒色脈あり、透明感少なく、表面滑らかである。ごくわずかに含まれる。
- ④灰オリーブ色(5Y 4/2~5/2)：脈ほとんどない、透明感ない、表面滑らかである。
- ⑤灰オリーブ色(5Y 6/2~5/2)：脈ほとんどない、透明感あり、表面滑らかである。

・黄褐色

⑥にふい黄褐色 (10YR 5/3) : 脈あり, 透明感は少なく, 表面凹凸あり。

⑦黄褐色 (10YR 5/4) ~ にふい黄褐色 (10YR 5/4) : 脈ほとんどない, 透明感ない, 表面滑らかである。

⑧明黄褐色 (10YR 6/6) ~ にふい黄褐色 (10YR 6/4) : 脈ほとんどない, 透明感あり, 表面滑らかである。

・赤褐色

⑨にふい赤褐色 (2.5YR 4/3) : 脈少ない, 透明感ない, 表面滑らかである。

・灰白色 ・白色

⑩灰白 (10YR 8/2) 白色 ~ にふい黄褐色 (10YR 7/4) : 脈少ない, 透明感あり, 表面滑らか, 乳白色のものも含む。

・その他

⑪主に塊状~脈状に灰白色の珪質部があるもので, 他のチャートと異なり不均質である。やや風化している。表面は凹凸が著しい。

分析結果からは, 土器充土中の礫に付いては, 黄褐色のものが多く, 41.9%で, 次いで黒色, 灰色が含まれ, わずかに灰白色・白色, 赤褐色などがみられる。入間川現河川礫は, 土器充土中の礫とはやや異なり, 灰色が多く32.2%で, 次いで黒色, 灰白色・白色, 黄褐色が含まれ, わずかに赤褐色のものがみられる。

これらの肉眼的観察による色調の分類だけでは土器充土中のチャートと入間川現河川のチャートとの関係を考察するのは困難であるが, 少なくとも, 土器充土中のチャートは1種類でなく, 数種類のものから構成されていることが分かる。

C. 考察

分析結果からわかるように, 土器充土中の礫の礫種組成は, ほとんどがチャートの礫からなる特徴的な組成からなっている。

これと比較するための試料を採取した入間川は約8万年前から現在とはほぼ同じ流路であったと考えられており(菊地1981), その上流地域には中・古生代に堆積した地層が分布し, それらは砂岩, 泥岩, チャートを主体とする堆積岩からなる。

そのため, 分析下入間川の現河川礫の礫種組成は上流の地質を反映して, チャートだけではなく, 砂岩, 泥岩・頁岩も多く含まれている。

このような礫種組成は入間川の支流となるような周辺の小川川の礫においても同様な傾向になると推定され, 縄文時代における遺跡の周辺の河川の礫や, それ以前に形成された流域の段丘礫層の礫においても現在の礫種組成と大きな変化はないものと考えられる。

以上述べたような入間川の礫種組成は, 土器充土中の, チャートが卓越するような組成と比較すると, 明らかに異なるものである。また, 一般的に河原でみられる礫は, 粗粒なものから細粒なものまで含まれていることが多く, 淘汰は比較的によくない傾向にある。

だが, ここの土器充土中の礫は, 粒上分析の結果からわかるように, 淘汰が良く, 比較的一定の粒径にそろっており, 河原でみられる礫の粒上組成とは異なっている。

また, この遺跡において, SK-14の遺構の覆土となるローム層や黒土層中にはこのような土器充土中の礫が含まれていないことが確認されており, このような礫はそこから持ち込まれたために土器充土中に含まれている可能性が高い。

おそらく土器充土中の礫は, 遺跡周辺の河原や段丘礫層などの自然に堆積している礫からそのまま持ち込まれたものではなく, なんらかの選択的要因により, このように粒径がそろっていて淘汰が良く, チャートが卓越する礫種組成になったという可能性が以上の分析結果から示唆される。

表 1-1 出土炭化材及び炭化種実類(1)

調査区	試料番号 出土地点	A 区								B 区	
		Na 1 SJ1が充土	Na 2 SK14土器充土	Na 3 SK15土器充土	Na 4 SL7	Na 5 SL3	Na 6 SL5	Na 7 SL10	Na 8 SL10		
炭化材	時代	中期	中期	中期	早期	早期	早期	早期	早期		
マツ属複維管束重属									1		
マツ科一属									1		
針葉樹A						1					
針葉樹B											
オニグルミ				1							
クリ		3	1	14	1	2	1	12	1		
コナラ属					2	1	3	28			
ケヤキ											
サクラ属											
タケ亜科 (ササ類)											
炭化材合計		3	1	15	3	4	4	42	1		
炭化種実類											
オニグルミ核破片		42		3		9	9	99	2		
不明 果実									1		
炭化種子合計		42		3		9	9	99	3		

表 1-2 出土炭化材及び炭化種実類(2)

	調査区 試料番号 出土地点	D 区							合 計
		Na 9 SK 5	Na10 SK 8	Na11 SK 2	Na12 SJ5炉充土	Na13 SJ 2	Na14 SJ5埋喪充土	Na15 SJ5埋喪掘方	
炭化材時代		中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	
マツ属複雑管束重属		2							3
マツ科一属					1				2
針葉樹A									1
針葉樹B			2						2
オニグルミ		2							3
クリ		11	4		2	4			56
コナラ属		2	1			1			38
ケヤキ		2				2			4
サクラ属		2							2
タケ亜科（ササ類）					1		1		2
炭化材合計		21	7		4	7	1		113
炭化種実類									0
オニグルミ核破片		241	25	21	2	2	12		467
不明 果実									1
炭化種子合計		241	25	21	2	2	12		468

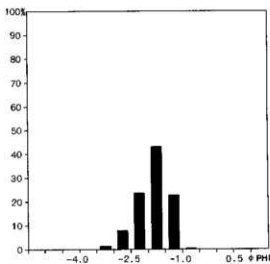


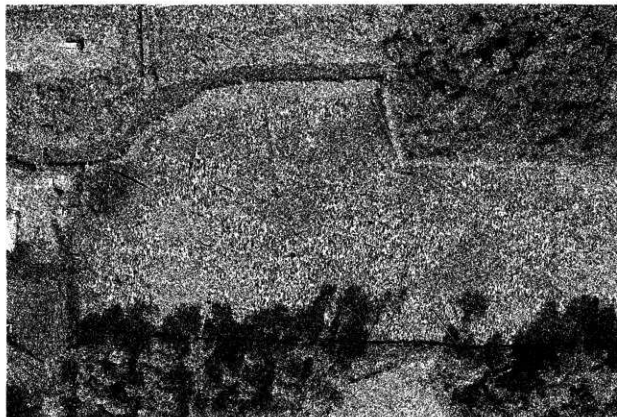
図 1 土器充土中の礫の粒度組成

引用文献

- 青木秀雄 1983 『前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第1集 宮代町教育委員会
- 飯田光晴・粕谷吉一 1990 『所沢市東の上道跡の調査』『第23回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他
- 石坂 茂・岩崎泰一 1988 『熊谷出土器文化における石器群の一種相—スタンピング石器と三角鋸状石器を中心として—』『研究紀要』第5号 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚和則 1986 『縄文時代中期中葉の住居形態』『研究紀要1986』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩井佳男他1970 『膳棚』『鳳翔』7号 埼玉大学考古学研究会
- 井上尚明 1994 『光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
- 岡本東三 1992 『埼玉県・大原遺跡第3類土器をめぐって』『人間・遺跡・遺物』2 発掘者談話会
- 小川静夫 1980 『小金井市西之台遺跡B地点』東京都埋蔵文化財調査報告第7集 東京都教育委員会
- 小野真一 1980 『常陸伏見』伏見遺跡調査会
- 小野正文 1986 『家蓮堂Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集 山梨県教育委員会
- 恩田 勇 1991 『沈黙文土器群の成立と展開Ⅰ—沈黙文土器群前葉を中心として—』『神奈川考古』第27号 神奈川考古学同人会
- 金子直行 1990 『八木上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第91集
- 金子直行 1993 『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
- 川口 潤 1993 『白草遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集
- 菊地豊男 1981 『先史時代の利根川水系とその変遷』『アーバンクボタ』19
- 木本雅康 1992 『宝亀2年以前の上山道式廢路について』『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 黒坂健二 1989 『上組Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
- 黒坂健二 1992 『桑野堂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第117集
- 甲野 勇・古川 格 1949 『縄文式文化年圖集 花輪式文化』山岡書店
- 小淵良樹 1987 『狭山市埋蔵文化財調査報告書5 今宿遺跡』狭山市文化財報告13 狭山市教育委員会
- 斎藤祐司 1993 『金堀沢Ⅱ遺跡』入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第14集
- 酒詰伸男・渡辺 仁 1949 『栃木県澁井村菅門寺遺跡発掘概報』『人類学雑誌』第61巻第1号 東京人類学会
- 城近憲市 1972 『宮地遺跡』狭山市文化財調査報告Ⅰ 狭山市教育委員会
- 城近憲市 1979 『芦刈場遺跡』飯能市教育委員会
- 曾根原裕明1984 『飯能の遺跡Ⅰ』飯能市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ 飯能市教育委員会
- 橘 昌信 1975 『高崎県新野遺跡における細石器文化』『考古学論叢』3
- 田中英司 1979 『武蔵野台地ⅡB期前半の石器群と砂川期の設定について』『神奈川考古』第7号 神奈川考古学同人会
- 田中英司 1984 『砂川型式期石器群の研究』『考古学雑誌』第69巻第4号 日本考古学会
- 田中英司 1987 『埼玉の先土器文化』『埼玉の文化財』第27号
- 富沢敏弘 1985 『中瀬遺跡・長井城跡』昭和三村教育委員会 群馬県教育委員会
- 富元久美子1991 『飯能の遺跡ⅠⅠ』飯能市教育委員会
- 富元久美子1993a 『飯能の遺跡ⅠⅡ』飯能市教育委員会
- 富元久美子1993b 『釜ノ根遺跡第1次調査』飯能市遺跡調査会発掘調査報告書8
- 中島 宏 1986 『龍門寺遺跡の押型文土器について』『利根川』7 利根川同人
- 中島 宏 1988 『埼玉県の押型文土器』『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館
- 中平 薫 1990 『稲荷』日高町埋蔵文化財調査報告第15号 日高町教育委員会

- 中平 薫・松本尚也 1994 『宿東—7次調査—』日高市埋蔵文化財調査報告書第24集 日高市教育委員会
- 中村誠二・人塚和男 1986 『北宿西・北宿南遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査報告書第63集
- 仲山英樹 1986 『鉄山市埋蔵文化財調査報告書4 揚楯木遺跡』鉄山市文化財報告12 鉄山市教育委員会
- 西井幸雄 1986 『中砂遺跡・埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書第60集』
- 西井幸雄 1988 『関東地方旧石器文化小考』『紀要』2号
- 西井幸雄・金子直行・岡本健一 1993 『谷津・二反田・下向山』埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書第131集
- 西井幸雄・栗岡潤 1995 『西久保／金井上』埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書第156集
- 西井幸雄 1995 『柳戸／向山／青柳／新山』埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書第154集
- 西川博孝 1980 『三戸式土器の研究』『古代探義』早稲田大学出版会
- 農林省水産技術会議事務局監修 1976 『標準土色図』
- 早川 泉 1992 『スタンプ彩石器研究序説』『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会
- 原田昌幸 1986 『熱系文系土器終末期の諸問題—無文土器束山式の設定—』『物質文化』No.46 物質文化研究会
- 原田昌幸 1987 『熱系文系土器終末期の諸問題（II）—平板式土器の再検討—』『物質文化』No.48 物質文化研究会
- 堀口 万吉 1973 『関東山地北東部の地形について』『埼玉大学研究紀要』自然科学編第8巻 埼玉大学教養学部
- 松橋英二・池谷信之 1990 『成瀬西遺跡群』成瀬西遺跡群整理地内遺跡調査刊
- 島目順一 1982 『竹之内遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書第8冊 いわき市教育委員会
- 水村孝行・宮崎朝雄 1980 『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会
- 水村孝行 1981 『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書第1集
- 水村孝行 1988 『埼玉の細石刃文化に関する覚書』『埼玉県立博物館紀要』15
- 宮井英一 1985 『大林Ⅰ・Ⅱ 富林 下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業調査報告書第50集
- 宮崎朝雄 1981a 『熱系文系土器群の終末と無文土器群』『土曜考古』第3号 土曜考古学会
- 宮崎朝雄 1981b 『熱系文系土器』『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 宮崎朝雄・金子直行 1990 『熱系文系土器群と押原文系土器群の関係(素描)』『縄文時代』第1号 縄文時代文化研究会
- 宮 重行 1981 『木の根』千葉県文化財センター
- 安岡路洋 1977 『小岩井渡場遺跡』飯能市教育委員会
- 柳戸信彦 1986 『飯能の遺跡(6)』飯能市遺跡発掘調査報告書3 飯能市教育委員会
- 大和市教育委員会 1984 『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内発掘調査報告書Ⅱ』
- Friedman, G. H. 1961 Distinction between dune, beach and river sands from the textural characteristics. Jour. Sed. Petro. 31, 4.

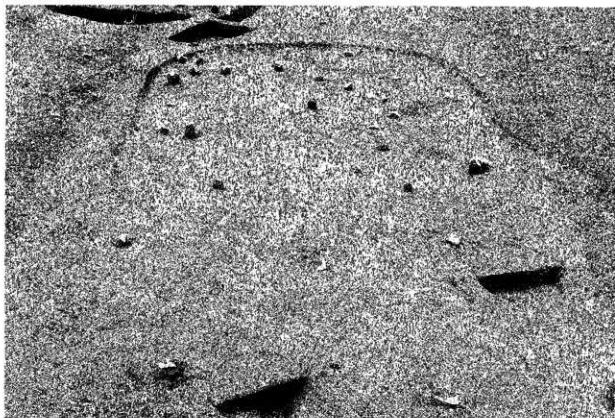
写真図版



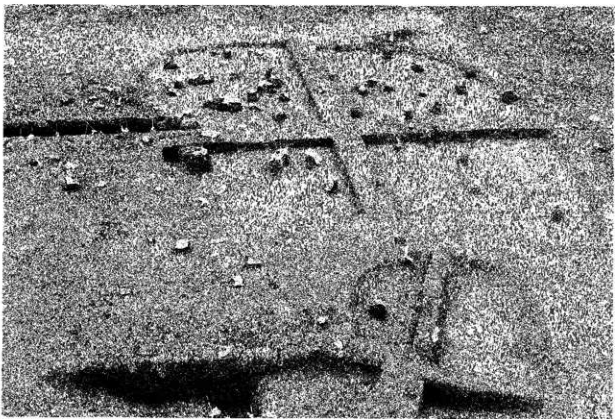
向山遺跡航空写真



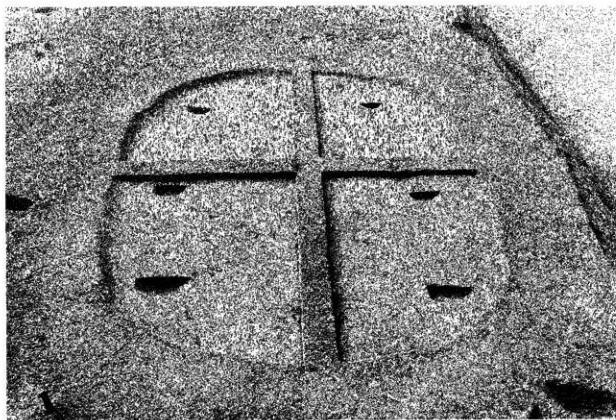
西地区遺構集中部



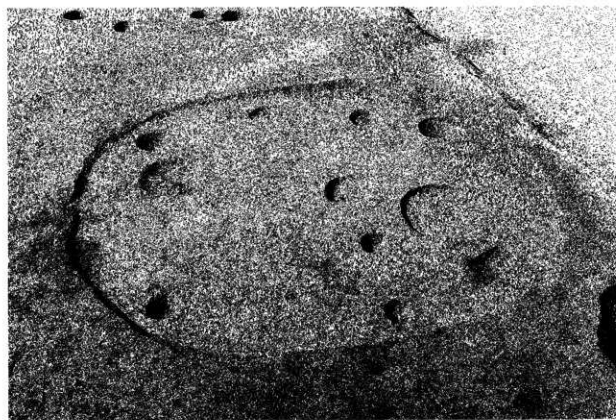
第1号住居跡遺物出土状況



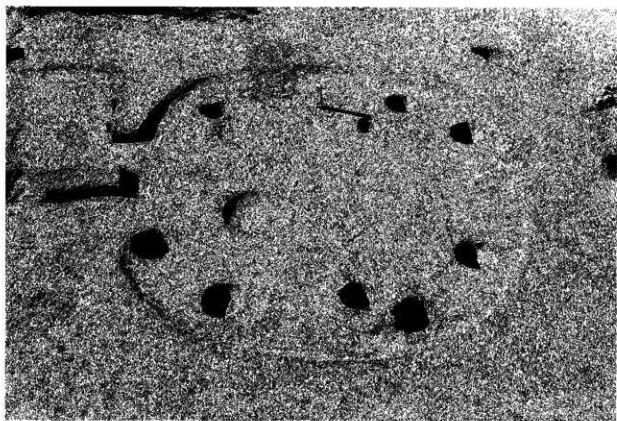
第2号住居跡遺物出土状況



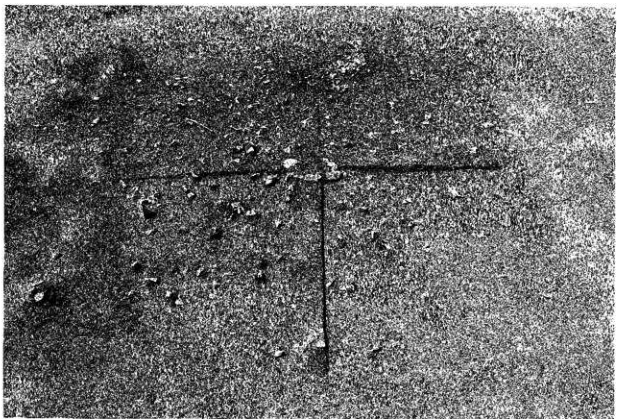
第3号住居跡



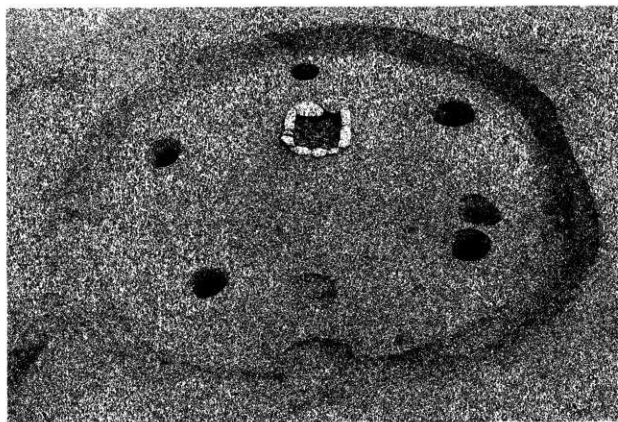
第4号住居跡



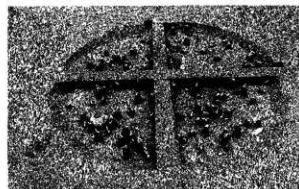
第 5 号住居跡



第 6 号住居跡遺物出土状況



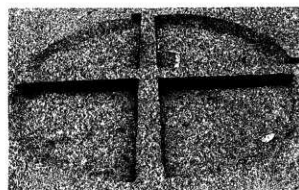
第7号住居跡



第7号住居跡遺物出土状況



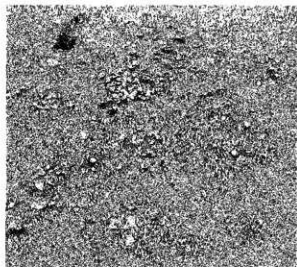
第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡土層断面



第7号住居跡炉跡



第 2 号集石



第 3 号集石



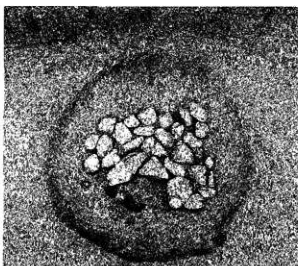
第 4 号集石



第 5 号集石



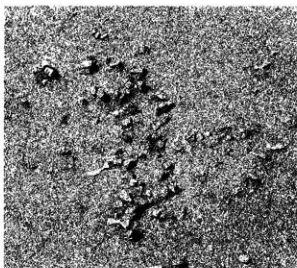
第 7 号集石上層



第 7 号集石下層



第8号集石



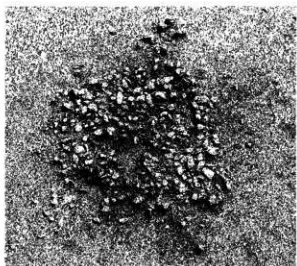
第10号集石



第11号集石



第12号集石



第13号集石



第13号集石断面



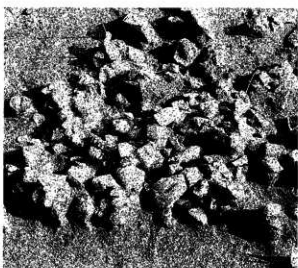
第14号集石



第16号集石



第17号集石



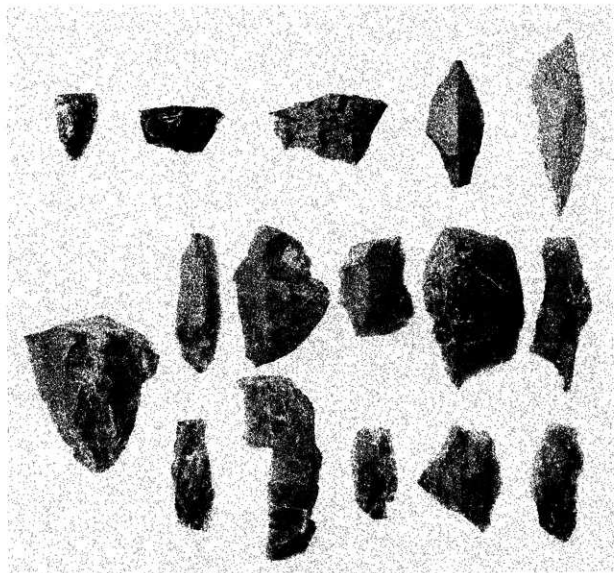
第17号集石遺物出土状況



第1号溝



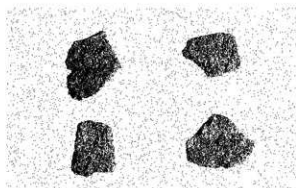
第2号溝



先土器時代石器類



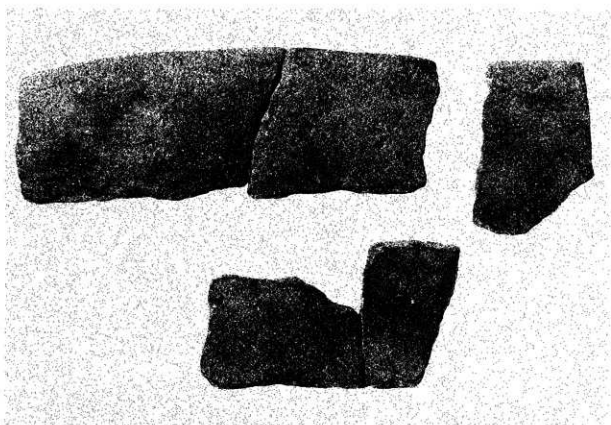
先土器時代接合資料



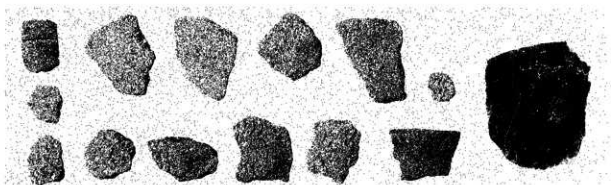
第1号住居跡出土土器



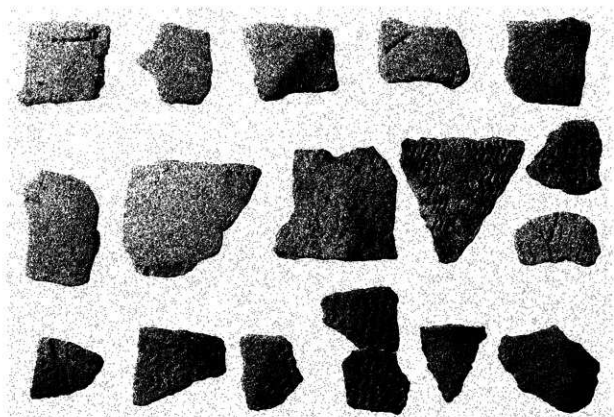
第1号住居跡出土石器



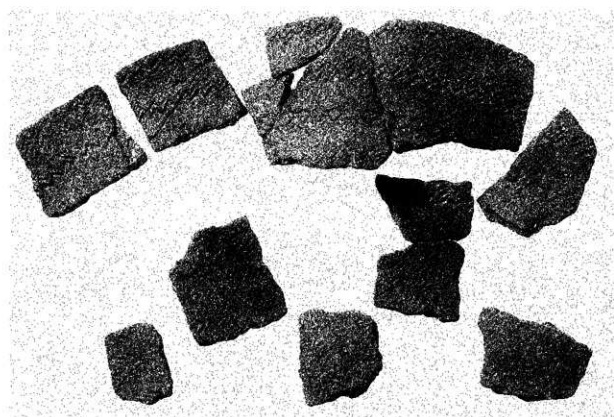
第2号住居跡出土土器



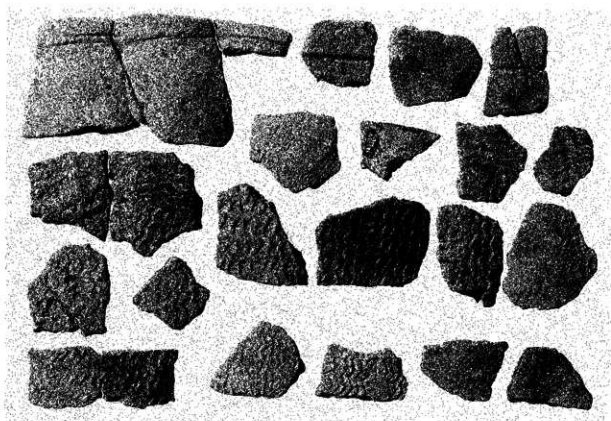
第2号住居跡出土土器、石器



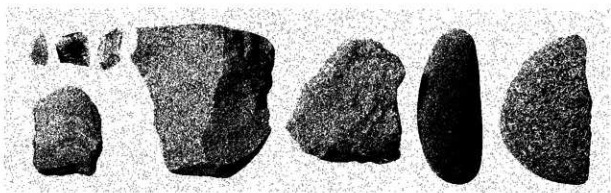
第3号住居跡出土土器



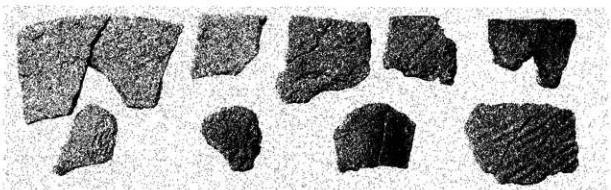
第3号住居跡出土土器



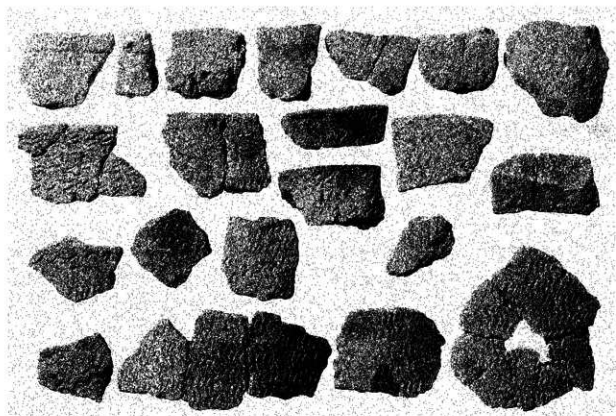
第4号住居跡出土石器



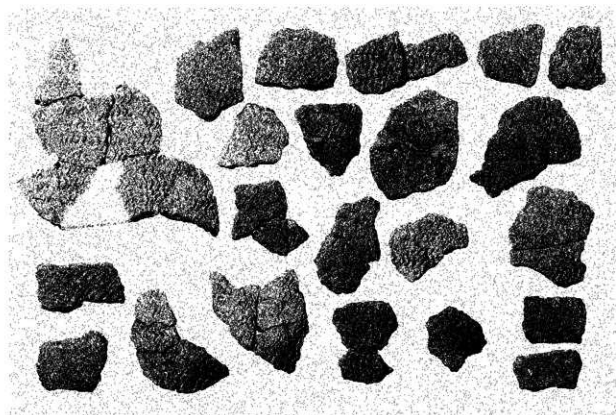
第4号住居跡出土石器



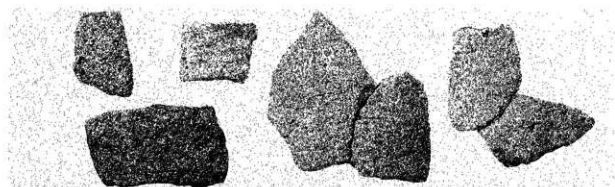
第5号住居跡出土土器



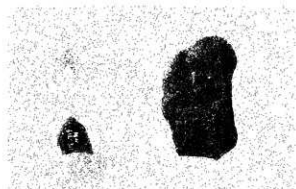
第6号住居跡出土土器



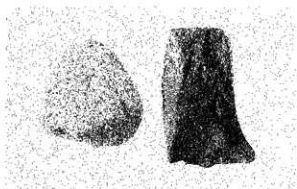
第6号住居跡出土土器



第6号住居跡出土石器



第6号住居跡出土石器



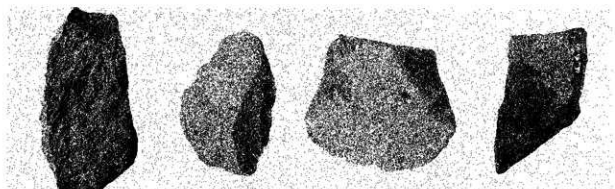
第6号住居跡出土石器



第7号住居跡出土石器



第7号住居跡出土石器



第7号住居跡出土石器